

聖書人物伝

参考資料：聖書人物伝 沢村五郎著 いのちのことば社

聖書人物伝 いのちのことば社フォレストブックス

1 アダム

1. 人の創造 創世 1 : 26、27、2 : 7

神は6日間の天地創造の最後に人を創造されました。神は人が生きていくために必要なすべての環境を整えてから、人を造られたのです。神は人を神のかたちに創造されました。具体的には、神は人(アダム:男性名詞)を土地(アダマー:女性名詞)のちりで形作り、その鼻にいのちの息(霊)を吹き込まれました。その結果、人は神のかたちとなったのです。人は他の動物とは違い、霊を持っているので、神との交わりを持って生きる者とされました。神は人を男と女に造り、地を治める特権と責任を与えられました。人は、神のみこころにかなって地を治めるという尊い使命を与えられたのです。

2. 罪を犯したアダム 創世 3 : 5、6

人はエデンの園で土地を耕し、同時に自由に決断し、選択することが許されました。しかし、神は善悪の知識の木から取って食べてはならないとの一つの戒めを与えられました。この戒めは、この世の主権者は神であり、主権者なる神に従う時にのみ、人は祝福された人生を歩むことができることを教えたのです。また善悪の知識の木は、人間にとっての善悪は神が主権をもって定められることを意味していました。しかし、蛇に誘惑されたエバがまず善悪の知識の木の実を食べ、アダムも一緒に食べてしまいました。アダムとエバは、神から禁止されていた善悪の知識の木の実を食べることにより、「私は自分で善悪を決める。私が主権者だ。」という態度をもって神に反逆したのです。こうして、最初の人アダムは神に対して罪を犯しました。

3. 罪の結果 創世 3 : 17～19

アダムとエバが善悪の知識の木の実を食べた時、彼らに変化が訪れました。まず彼らの目が開かれ、裸であることを知りました。彼らの裸の恥は罪の恥でした。彼らは罪を犯すことによって、罪の恥を知ったのです。また、神を避けるようになりました。罪を自覚した結果、神のさばきを恐れたのです。神は善悪の知識の木から取って食べるなら、必ず死ぬと言われましたが、死はまず神との関係において、霊的死という形で起こりました。神は、罪に対するさばきを宣告されました。エバには産みの苦しみと夫の支配、アダムには労働の苦しみと肉体的死を宣言されました。そして、二人はエデンの園から追放され、こうして彼らの子孫であるすべての人が、罪の影響下に生きるようになったのです。

4. 来るべき方のひな型 ローマ 5 : 14、15

罪の結果、神との交わりを損なったアダムとエバに対して、神は救いの道を備えておられることも知らされました。女の子孫が蛇の子孫に打ち勝つとの創世記 3 : 15の預言は原福音と呼ばれ、聖書は女の子孫とはだれかというテーマに沿って展開していきます。そして、その女の子孫はアブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストであることが明らかにされるのです。アダムの罪によって、罪と死が全人類に広がったように、キリストの恵みによって、罪の赦しと永遠のいのちがキリストにあるすべての人に満ちあふれるのです。ですから、アダムは来るべき方のひな型であり、キリストは第2のアダムと呼ばれるのです。

2 エバ

1. 女の創造 創世 2 : 18、21-23

神は、人を神のかたちに創造されました。神は愛の神なので、父、子、聖霊の間で愛の交わりを持っておられます。同様に神は、人にも愛という性質を与えられたので、「人が一人にいるのは良くない。」と言われて、人を男と女に創造されました。アダムのあばら骨から造られた女は、他の動物とは違い、アダムと同じ神のかたちに造られた人間でした。エバはアダムの分身であり、同じ人間でありつつ、男女の違いを持つ存在でした。アダムはエバを、男(イシュ:男性名詞)から取られたので女(イシャ:女性名詞)と名付けました。女が男の助け手として造られたとは、女が男より低い存在であるという意味ではありません。そうではなく、平等の人間でありつつ、男とは違う女の性を持つ者として、男を助けることができる存在であるという意味です。男も女も互いに助け合うことによって、神からゆだねられた使命を果たすことができるのです。

2. 結婚の制定 創世 2 : 24、25

神が人を男と女に創造された時、神は男女の結婚を神が定められました。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。」との神の祝福は、男女の結婚によって可能となるのです。こうして、神のご計画の中で、アダムとエバは結婚し、ふたりは一体となりました。パウロは夫と妻の結婚は、キリストと教会の関係を指していると教えましたが、キリストと教会の間にある愛と従順が夫婦の中に実現していくとき、夫婦は神に祝福された結婚生活を送ることができるのです。(エペソ 5 : 32) アダムとエバは、罪を犯す前は裸であったのに、互いに恥ずかしいとは思いませんでした。彼らの間には隠さなければならない秘密がなかったのです。夫婦間で隠し事がないことが、幸せな結婚生活の条件です。

3. 罪を犯したアダムとエバ 創世 3 : 6、7

神が「取って食べてはならない。」と堅く命じられていた善悪の知識の木の実を、蛇の誘惑によってまずエバが食べました。そして、エバはアダムにも与えたのでアダムも食べました。こうして、彼らが神に対して罪を犯した時、二人の目は開かれ、彼らは自分たちが裸であることを知りました。そこで、彼らはいちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作ったのです。彼らが罪を犯した時、神との関係も人との関係もおかしくなっていました。神に対しては、自分の罪の恥を隠し、神を避けるようになりました。また人に対しては、アダムもエバも自分の罪の恥を互いに隠し合うようになったのです。

4. 妻の名はエバ 創世 3 : 20、21

二人が罪を犯しても、二人が神によって夫婦とされた男女であることに変わりはありませんでした。アダムは妻の名をエバと呼びました。エバ(ギリシャ語の発音、ヘブル語はハバ)はいのちを意味しています。それは、彼女はすべて生きているもの(ヘブル語はハイ)の母であったからです。神はアダムとエバのために、皮の衣を作り、彼らに着せてくださいました。神が皮の衣を作ったとは、二人の罪の恥を隠すために動物が犠牲になったことを表しています。そしてこのことは、やがてキリストが人間の罪を贖うためにご自身をささげられ、キリストの衣を着ることによって罪が赦されることを予表しています。

3 カインとアベル

1. カインとアベルの誕生 創世 4 : 1 - 4

エデンの園を追放されたアダムとエバに、最初の子供カインが産まれました。カインが産まれた時、エバは「私は、主によってひとりの男子を得た。」と言いました。カインは「得る」という意味の名前です。その後、エバは弟アベルを生みました。アベルは「息」という意味です。神は約束通り、アダムとエバを祝福し、出産を通して同じ人間である子供を与えてくださったのです。しかし、二人の子供は、アダムとエバの罪を受け継ぐ罪人であることが、その後の出来事でわかります。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となりました。ある時期になり、カインは地の作物から主へのささげものを持って行き、アベルは彼の羊の初子の中から最良のものを自分自身で持って行きました。

2. アベルのささげ物を受け入れる神 創世 4 : 5 - 7

主はアベルとそのささげ物には目を留められましたが、カインとそのささげ物には目を留められませんでした。アベルは正しく行ったので主に受け入れられ、カインは正しく行わなかったので、主に受け入れられなかったのです。ヘブル 11:4 では、「信仰によって、アベルはカインよりもすぐれたいけにえを神にささげ」たと言っています。具体的には、神はすでに神へのささげものとして、罪を贖う動物の犠牲のいけにえがふさわしいことを教えておられたと考えられます。アベルは神が教えられたとおりにささげたので、神に受け入れられ、カインは神の教えに従わずに、自分の考えでささげたので受け入れられなかったのです。カインは自分のささげ物が主に受け入れられないので、ひどく怒りました。

3. カインによるアベルの殺人 創世 4 : 8 - 10

カインは、アベルに対するねたみと憎しみの思いを持ちました。そのことを知った主はカインに罪の思いを治めるべきだと警告されました。しかし、カインは神のことばを聞くことなく、アベルを野に誘い、彼を殺しました。人類最初の殺人がカインによって行われたのです。アダムとエバは、カインがアベルを殺したことを知り、悲しみとともに罪の恐ろしさを覚えたに違いありません。神に逆らう罪は、人間同士がねたみ、憎しみ、ついには殺し合う罪へと発展していくのです。主はカインに、「アベルはどこにいるのか。」と問われましたが、カインは、「知りません。私は自分の弟の番人なのではないでしょうか。」と答え、自分の罪を隠し、神に悔い改めることをしませんでした。

4. 義人アベルと罪人カイン ヘブル 11 : 4、I ヨハネ 3 : 12

新約聖書は、アベルが信仰によって生きた義人であると高く評価しています。彼は地上での生涯は短かったのですが、永遠に神に受け入れられ、彼は死んでも、その信仰によって今も語っているのです。マタイ 23:35 やルカ 11:50 ではアベルは最初の殉教者と見なされています。また、ヘブル 12:24 ではアベルの血は、新しい契約の仲介者イエスの血を予表するものとされています。一方でカインは罪人の典型として語られています。I ヨハネ 3:12 では、「カインのようであってはいけない。」とカインを反面教師として教えています。またユダ 11 では、偽教師はカインの道を行く者だと教えています。カインのようではなくアベルのように信仰によって生きる者となりましょう。

4 エノク

1. 神とともに歩んだエノク 創世5：21－24

アダムの系図の中で、ひとときわ輝く人物がエノクです。他の人たちは「こうして彼は死んだ。」と記されているのに対して、エノクは「神が彼を取られたので、彼はいなくなりました。」と記されています。これはエノクは死ぬことなく、生きたまま天に引き上げられたということです。旧約聖書ではもう一人、エリヤが生きたまま天に引き上げられました。新約では、キリストの再臨時、生きている信者がそのまま天に引き上げられることが約束されています。エノクが生きたまま天に引き上げられた理由として、エノクが神とともに歩んだことが記されています。エノクは65年生きてメトシェラを生み、その後彼は3百年、神とともに歩んだのです。メトシェラ誕生の時、エノクも神とともに歩む新しいのちの出発をしたのです。そして、エノクが365歳になった時、神はエノクを生きたまま天に引き上げられました。それは特別な神の恵みでした。私たちも神とともに歩み、もしキリストの再臨時に生きているならば、エノクと同じ経験をすることができるでしょう。

2. 信仰によって歩んだエノク ヘブル11：5、6

神とともに歩むとは、神を信じる信仰によって歩むことです。エノクは信仰によって歩んだので、その生き方を神は喜ばれ、その結果、神は死を見ることのないように、天に移されたのです。「信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。」神とともに歩む者は、神の近くにいて生きる人です。その人は、いつでもどこでも神が共におられることを信じます。どんな困難な状況が起ころうとも、そこにも神が共におられ、神のご支配があり、神の計画があることを信じ、神にゆだね、神に信頼して生きるのです。エノクの人生も決して平たんな歩みだったのではなく、様々な試練に会ったことでしょう。しかし、彼は共におられる神に信頼して歩んだのです。また神とともに歩む者は、神に求めるなら神は報いてくださるお方であることを信じます。すなわち、神とともに歩む者は、神に祈りながら歩むのです。神と会話をしながら、神に願い求めながら、神のみこころを期待しながら歩むのです。神はそのような人を喜んでくださいます。

3. 預言者エノク ユダ14、15

ユダはエノクが預言者であったことを記しています。エノクはアダムから7代目でした。7は完全数ですから、エノクの信仰者としての特別な祝福を表しています。一方、アダムから7代目のエノクの時代は、ますます罪に満ちてきた時代でもありました。エノクのひ孫がノアであり、ノアの時代には罪が満ちあふれ、ついに洪水による神のさばきが行われたのでした。エノクが神とともに歩んだとは、彼が神の御声を聞きながら歩んだことをも意味します。そして、エノクは自らが神のことばに従って生きるとともに、人々に神のことばを宣べ伝えたのです。14、15節の引用は偽典のエノク書からのものです。偽典は正典ではありませんが、ユダは聖霊に導かれて、預言者としてのエノクの働きをこの箇所を引用して語ったのです。エノクは当時の人々に罪に対する神のさばきを語り、悔い改めを迫ったのでした。これは預言者エリヤの働きと共通しており、地上での霊的戦いを終えて、神は二人を天に引き上げられたのでした。

5 ノア

1. 正しい人ノア 創世6：8－12

ノアの時代、地は神の前に墮落し、人の悪が増大しました。それをご覧になった主は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められ、地の表から人を消し去ろうとしました。しかし、ノアは主の心にながっていました。ノアは正しい人でした。彼の正しさは「信仰による義を相続する者」としての正しさです。(ヘブル11:7)また、その罪の時代にあっても全き人でした。「全き人」とは罪のない完全な人ではなく、自分の罪を神に悔い改め、神に信頼し、世の罪の道を歩まなかった人という意味です。ノアは神と共に歩みました。ノアは神と共に歩んだエノクのひ孫です。神と共に歩み、天に引き上げられた曾祖父エノクの信仰をノアは継承していたのです。神はノアと彼の家族を救おうとされました。

2. ノアの箱舟 創世6：13－16

神はノアに、人の暴虐で満ちた地を滅ぼす神の計画を伝えられました。そして、神はノアとその家族とあらゆる種類の動物を救うために箱舟を作るように命じられました。箱舟は長さ132m、幅22m、高さ13.2mの巨大な船でした。神はノアと契約を結び、箱舟にノアの家族と、すべての生き物一つがいつ、きよい動物は七つがいつ入るようにと命じられました。ノアはすべて神が命じられたとおりにしました。陸地に巨大な船を造るノアを見て、当時の人々はノアたちを馬鹿にしたのではないのでしょうか。しかし、ノアは神が洪水をもってこの地を滅ぼされると伝えながら、神に従い箱舟を作ったのです。ノアは言葉と行いをもって義を宣べ伝えたのでした。(Ⅱペテロ2:5)

3. ノアの洪水 創世7：6－10

箱舟が完成すると、神はノアに大洪水を避けるために、家族と動物を箱舟に入れるように命じられました。ノアはすべて神が命じられたとおりにしました。この時はまだ、雨は全く降っていませんでした。しかし、ノアはいつも神に信頼し、神が言われるとおりに行ったのです。ノアたちが箱舟に入ると、神は後ろの戸を閉ざされました。すると神が語られたとおりに大洪水が起きました。ノア600歳の時でした。水はすべてのものをおおい尽くし、息のあるものすべてが洪水によって死にました。救われたのは箱舟に乗っていたノアの家族と動物だけでした。水は150日間、地の上に増え続け、その後徐々に水かさは減り、箱舟はアララテ山の上にとどまり、洪水が始まって1年後に地は乾ききりました。

4. ノアと家族の救い 創世9：9－13

地が乾ききった時、神はノアに箱舟から出るようにと仰せられました。そこでノアとその家族、そして動物たちは箱舟から出ました。ノアが箱舟から出た時、まず主のために祭壇を築き、全焼のいけにえをささげました。神はそのなだめの香りをかがれ、再び洪水で地を滅ぼすことはしないとされました。そして、そのことを確かなものとするために、神はノアとその子孫とに対して契約を立てられました。そして契約のしるしとして虹を立てられました。ノアの箱舟の救いは、キリストの十字架の救いに当てはめることができます。やがて神は最後の審判のさばきを行われます。その時、キリストの十字架の救いの中に入っているなら、さばきに会うことなく、永遠の救いに入れられるのです。私達には、新しい契約のしるしとして、キリストの十字架の救いが与えられているのです。

6 セム、ハム、ヤペテ

1. ぶどう酒に酔うノア 創世9：18－21

箱舟から出て来たノアと彼の家族は、神の新しい契約のもとで、新たな生活を始めました。ノアにはセム、ハム、ヤペテの3人の息子がいました。この3人から全世界の民は分かれ出たのです。さて、ノアは農夫となり、ぶどう畑を作り始めました。ある日、ノアはぶどう酒を飲んで酔い、天幕の中で裸になって寝てしまいました。ノアは正しい人、全き人で、神とともに歩みました。しかし、彼も神に罪を赦された罪人の一人であり、人間的な弱さを持っていました。ぶどう酒の力には勝てず、彼は酔っ払い、自制心を失ってしまったのです。このことは、私たちに対する教訓でもあります。エペソ 5:18 では、「酒に酔ってははいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。」とあります。どんな信仰者であっても、酒に酔えば自制心を失い、罪を犯しやすくなります。クリスチャンはむしろ、御霊に満たされることを求めるべきなのです。

2. ハムの罪 創世9：22

ノアの失態を最初に見たのはハムでした。「見る」は「じっと見る」という意味のことばであり、ハムは父の裸をじっと見つめ、父の失態をおもしろがったのです。そして、そのことを物笑いの種にして、兄弟に告げました。ここにハムの罪があります。ノアは息子たち家族にとっていのちの恩人でした。ハムはその恩をあだで報い、人の欠点を喜んだのです。このことも私たちに対する教訓です。罪人は、人の欠点を見ておもしろがり、それをほかの人に告げて喜びます。私達の心にもそのような罪の思いがないわけではありません。その罪の思いに支配されれば、ハムと同じ罪を犯すことになります。だからこそ、私達は自分の言動に気を付けなければならないのです。

3. セムとヤペテの正しい行動 創世9：23

ハムから父の状況を聞いたセムとヤペテは、ハムとは対照的な行動をとりました。二人は着物を取り、自分たち二人の肩に掛け、後ろ向きに歩いて行って、父の裸をおおいました。彼らは顔をそむけて、父の裸を見なかったのです。二人はハムのように父の裸を見て、物笑いの種として語るという罪を犯しませんでした。むしろ、彼らは一言も語らず、父の裸も見ず、後ろ向きに歩いて行って、着物で父の裸をおおったのです。セムとヤペテは、父ノアの弱さをおおい、父の恩を忘れず、父とともに歩む姿勢を示しました。セムとヤペテは、何が神に喜ばれる言動なのかを問いながら、神に喜ばれる行動を取ることができました。これがクリスチャンの取るべき言動であることを教えられます。

4. ノアの預言 創世9：24－29

酔いからさめたノアは、息子たちが取った言動を知りました。そして、3人の息子に対して預言しました。ここでのノアの預言は、神から特別な啓示を受けての預言です。ハムに対しては、彼の息子カナンについて預言しました。カナンの子孫はカナン人となり、やがて彼らは罪に墮落し、その結果、イスラエル人に支配されることを預言しました。セムに対しては特別に「セムの神、主よ。」と言って、セムの子孫が特別な神の祝福を受けることを預言します。実際、セムの子孫からアブラハムが生まれ、やがてキリストも誕生することになります。神がヤペテを広げてセムの天幕に住まわせるとは、キリストの救いに入る祝福を預言していると考えられます。キリストが来られる時には、カナン人も異邦人もユダヤ人もなく、キリストを信じる者はみな救われます。今私達は、「セムの天幕」が意味する「キリストの救い」の中に住むという祝福にあずかっているのです。

7 アブラハム

1. 約束の地 創世 12 : 1－4 ヘブル 11 : 8

信仰の父と呼ばれるアブラハムの信仰の出発点は、約束の地に行けとの神の召しに対する信仰による応答でした。アブラハムは父テラと一緒にカナンの地に行くために故郷のウルから出発しましたが、途中のカラン(ハラン)に住み着いてしまいました。けれども父テラの死後、主はアブラハムに「わたしが示す地へ行け。そうすればあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福しよう。」と仰せられました。その時、アブラハムは主の召しに従い、主がお告げになった通りに出かけました。ヘブル 11:8 では「信仰によって…これに従い、どこに行くのかを知らないで、出て行きました。」とあります。アブラハムにも知らない土地に行く不安はあったでしょう。けれども彼はただ主を頼りとし、信仰によって主の召しに従いました。その結果、主の祝福を受ける人生を歩むことができたのです。

2. 信仰による義 創世 15 : 4－6 ローマ 4 : 3

アブラハムにとっての悩みの種は、彼に子供がいなかったことです。跡継ぎの子がいなければ、「わたしはあなたを大いなる国民とする」との神の約束も成就しません。アブラハムがそのことを主に訴え、主は「あなた自身から生まれ出てくる者が、あなたの跡を継がなければならない。」と仰せられました。さらに主はアブラハムに空の星を見せ、「あなたの子孫はこのようになる。」と言われたのです。その時、主はアブラハムの信仰を受け入れ、彼を義と認められました。「彼は主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」パウロはこの出来事によって、信仰義認を教えました。アブラハムは割礼を受ける前に、信仰によって義と認められたのです。私たちも行いによらず、主イエスを信じる信仰によって、義と認められるのです。

3. イサクの誕生 創世 17 : 19、21 : 1－5

主はアブラハムに跡継ぎの子を与えると約束されましたが、なかなか子供は与えられませんでした。そこでアブラハムは妻サラの勧めに従い、サラの女奴隷ハガルによってイシュマエルを得ました。これは当時の習慣として許されていた行為でした。けれども、このアブラハムの行動は主のみこころではありませんでした。アブラハムは忍耐して、主のみわざを待たなければならなかったのです。イシュマエルが生まれてから 13 年後、アブラハム 99 歳の時、主は再びアブラハムに現れ、妻サラによって男の子が生まれることと、その名をイサクと名付けることを告げられました。そしてそのとおり、主が約束されたとおりに、イサクが誕生したのです。主は確かに約束を守られる全能の神です。

4. 最大の試練 創世 22 : 9－12 ヘブル 11 : 17－19

アブラハムの生涯には様々な試練があり、時には失敗もしました。彼の生涯最大の試練はイサクを全焼のいけにえとしてささげよとの神の命令を受けた時です。待ちに待って生まれた最愛のひとり子をささげることなど、父として到底できないことです。また、イサクをアブラハムの跡継ぎとし、大いなる国民とするとの神の約束にも矛盾します。けれども、アブラハムは信仰によって神に従いました。ヘブル 11:19 によれば、神はイサクを死者の中からよみがえらせてくださると考えたのです。そして、いよいよイサクをほふろうとしたとき、神はアブラハムを止められました。アブラハムは神の信仰のテストに合格しました。またこの試練は、神がやがて罪人を救うために、ご自身の愛するひとり子イエスを罪のためのいけにえとしてささげることがを預言する出来事だったのです。

8 ロト

1. ソドムとゴモラの地を選んだロト 創世 13 : 9 - 13

ききんのためにエジプトに避難していたアブラハムとロト達がカナンの地に戻った時、互いの牧者達の間に争いが起こりました。その地は二人が一緒に住むには十分ではなかったからです。そこで、アブラハムはまずロトに良い土地を選ばせました。ロトはヨルダンの低地ソドムとゴモラの地を選びました。ロトにはその地は主の園のように、エジプトの地のように潤った地として見えたのです。しかし、その地の人々はよこしまな者で、主に対しては非常な罪人だったのです。ロトは主を信じる人ではありませんでしたが、肉的な人で、この世的な繁栄を求め、神のみこころを求めず、自分の判断でソドムとゴモラの地を選びました。その結果ロトは、信仰によってアブラハムに与えられる主の祝福を共にすることができなくなりました。

2. アブラハムによる助け 創世 14 : 14 - 16、18 : 32

ソドムとゴモラの地に住み着いたロトは、自分の蒔いた肉の種を刈り取らなければなりませんでした。(ガラテヤ 6:7, 8) しかし、その都度、おじアブラハムの助けがありました。まずケドルラオメル王の連合軍がソドムとゴモラを攻撃し、ロト達も捕虜となって連れて行かれました。その時、アブラハムはロト達を救うために彼らを追跡し、ロト達をはじめ、ソドムとゴモラの全財産を奪い返しました。二度目は主がアブラハムにソドムとゴモラの滅びを告げられた時です。アブラハムは主に何度もとりなし、主はアブラハムの願いを聞き、町に正しい人が十人見つければソドムとゴモラを滅ぼさないと約束されました。しかし、実際は正しい人は十人もいませんでした。けれども、このアブラハムのとりなしは、ロトと二人の娘を救うことにつながったのです。(創世 19:29)

3. 主のあわれみ 創世 19 : 15 - 17

Ⅱペテロ 2:7, 8を見ると、義人ロトはソドムとゴモラの好色なふるまいに悩みと不法な行いに心を痛めていたとあります。ロトは肉的な信仰者でしたが、ソドムとゴモラの罪深さには悩んでいたのです。彼は自分の選択が間違っていたことに気づいたことでしょう。神はそのようなロトをあわれみ、ロトと彼の家族を救おうとされました。神は御使いを遣わし、逃げることをためらうロトと彼の妻と二人の娘の手をつかんで、町の外に連れ出しました。そして、うしろを振り向かずにいのちがけで逃げるように告げました。けれども、ロトの妻は振り返ったので塩の柱になってしまい、ロトと二人の娘だけが救われました。ロトの妻は今までの生活を惜しみ、御使いの警告に従わなかったのです。主イエスは神のさばきから救われるために、「ロトの妻を思い出さない。」と言われました。(ルカ 17:32) 主は私たちが罪を悔い改め、ご自分を信じて救われるようにと、今日も語っておられます。

4. モアブ人とアモン人 創世 19 : 36 - 38

滅びから救われたロトと二人の娘は山に住みました。二人の娘は、父に酒を飲ませ、父によって子孫を残そうと考え、実行に移しました。娘たちにはソドムとゴモラの罪の生活がしみこんでいたのです。その結果、それぞれが男の子をもうけました。二人の子はモアブ人とアモン人の先祖となりました。イスラエル人はその後、モアブ人とアモン人に悩まされることになります。けれども、ここにもロトに対する主の憐れみを見ることができます。ボアズの妻となったモアブ人ルツ、ソロモンの妻となったアモン人ナアマが救い主の系図に入れられ、キリストがすべての人の救い主として誕生したのです。(Ⅰ列王 14:21)

9 イサク

1. イサクの試練 創世22：6－9

「イサクをささげよ。」との主の命令は、アブラハムだけでなく、イサクにとっても人生最大の試練でした。イサクは全焼のいけにえをささげるために、父アブラハムと共にモリヤの山を登っていきました。しかし、火とたきぎは持っていても肝心のいけにえのための羊がありません。イサクは父に尋ねますが、父は主が備えてくださると言って歩きます。イサクはやがてそれが自分のことであると理解しました。イサクはこの時すでに青年になっていたと考えられます。ですから、アブラハムがイサクを縛ろうとした時、抵抗して逃げることも可能だったのです。けれども、アブラハムが主に従ったように、イサクも信仰によって主に従い、自分が全焼のいけにえとなることは主のみこころだと信じ、身を差し出したのです。イサクはやがて同じ場所で自らを犠牲のいけにえとしてささげられたイエスの型となったのです。

2. リベカとの結婚 創世24：66、67

イサクはモリヤの山での経験を通して、主と主を信じる父アブラハムへの信頼を増し加えていきました。イサクの信仰の土台には、主の御手にすべてをゆだねることがありました。彼は自分の結婚についても主にすべてゆだねていました。アブラハムはそのようなイサクを覚え、最年長のしもべに対して、自分の生まれ故郷に行ってイサクのために妻を迎えるようにと頼みました。このしもべもまた信仰の人でした。アブラハムの故郷に着くとしもべは主に祈り、主は祈りに答えて、アブラハムのおいの娘リベカのもとへとしもべを導きました。リベカはイサクとの結婚を主のみこころと信じ、しもべと共にイサクの所にやってきました。しもべはイサクにすべての出来事を告げると、イサクはリベカを主が備えてくださった妻として受け入れ、二人は結婚へと導かれたのです。この美しい出来事は、イサクのすべてを主にゆだねる信仰に対する主からの祝福の答えでした。

3. イサクの弱さ 創世25：28、26：6、7

イサクは主にすべてをゆだねる信仰者でしたが、弱さも持っていました。イサクとリベカには、エサウとヤコブというふたごが与えられました。二人は成長し、エサウは猟師となり、ヤコブは家事を好む人になりました。イサクは猟の獲物が好きだったのでエサウを愛しました。この愛の動機は極めて肉的なものでした。やがてこのことは大きな問題を引き起こすことになります。またききんを避けてゲラルのペリシテ人の所に行った時のことです。彼は自分のいのちを惜しんで、自分の妻を妹だと偽りました。これは父アブラハムがエジプトで行った同じ失敗です。主はアブラハムの時と同様に、イサクも危機から救われましたが、イサクには人の目を恐れて、主に信頼することを忘れてしまう弱さを持っていたのです。私達はイサクの失敗を反面教師としなければなりません。

4. イサクの信仰 創世27：38－40、ヘブル11：20

イサクは年を取ると視力も衰え、歩くこともできなくなりました。イサクは自分が死ぬ前に、アブラハムから受け継いだ主の祝福を自分の子に継承するために、祈ることにしました。イサクは兄エサウを祝福するつもりでしたが、弟ヤコブに欺かれてヤコブを祝福してしまいました。後から来たエサウは泣きながら自分も祝福してくれるようにとイサクに願いました。しかし、イサクは一度与えた祝福は、主の前で取り消すことができない確実なものであることを告げ、ここにも主のみこころがあることを信じたのです。そこでヘブル11:20は、信仰によってイサクは未来のことについて二人を祝福したと教えているのです。

10 ヤコブ

1. 兄が弟に仕える 創世25:23-26

イサクの妻リベカが双子を身ごもった時、主は「兄が弟に仕える。」と言われました。出産時、兄エサウ(毛深い)のかかとをつかんで弟が生まれたので、弟をヤコブ(押しのける者)と名付けました。これは神の選びの計画でした。(ローマ9:11、12)ヤコブは成長すると、兄を押しのかけてでも神の祝福を得たいと願い、人間的な策略を講じ、まずレンズ豆の煮物と引き換えに長子の権利を得ました。(創世25:29-34)次に、父を欺き、兄エサウに変装して、兄エサウが受けようとしていた神の祝福を奪い取りました。ヤコブの行為は決してほめられるものではありません。けれども、エサウは神の祝福に無頓着であったのに対し、ヤコブは神の祝福の特権を知り、熱望したのでした。その結果、神の計画通り、アブラハム、イサクに与えられた神の祝福はヤコブに引き継がれたのです。

2. 石の枕 創世28:11-15

兄エサウは、ヤコブが父を欺いて、自分が受ける祝福を横取りしたことに腹を立て、父イサクが死んだ後、ヤコブを殺そうと考えました。そこで、ヤコブはカランの地に住むおじラバンの所に行くために旅立ちました。旅の途中ある所で、ヤコブは石を枕に一夜を明かしました。その時、夢の中で主が現れ、主はヤコブを祝福し、主の臨在と守りを約束しました。ヤコブの個人的な信仰生活は、この時から始まったのです。おじラバンの家では、ヤコブの肉적인自我を砕くための神の訓練がありました。ヤコブはラバンに何度も欺かれ、自らの欺きに対する神の懲らしめと訓練を受け、苦難を通して神の人として整えられていきました。またラバンの家にいた20年間で、ラケルとレア、ビルハとジルパを通して11人の男の子と多く財産を得ました。

3. ヤボク川での祈り 創世32:24-28

おじラバンの敵意を感じていたヤコブに対し、主はカナンに帰るようにと告げました。ヤコブは主に従い、カランの地から旅立ちました。しかし、カナンの地が近づき、兄エサウが400人を引き連れて迎えに来ることを知ると、ヤコブは大変恐れ、家族を先に行かせ、1人だけヤボク川のほとりに残りました。そしてヤコブは御使いと夜明けまで格闘しました。この格闘はヤコブの祈りの格闘でした。御使いはヤコブが肉の努力をやめようとしないうのを見て、もものつがいを打ちました。もものつがいは肉体的には力の所在を表し、靈的には自我を表します。ヤコブは神の祝福を求め、神はヤコブにイスラエル(神は戦う、神の王子)という新しい名前を与えました。このとき、ヤコブは自我に頼らず、神に頼る人に変えられ、神に信頼して、エサウに会うことができました。

4. ヤコブの神 詩46:7、ヘブル11:21

ヤコブは晩年、病に伏した時にも、信仰の眼ははっきりと見えていました。そして、信仰によって、ヨセフの子、エフライムとマナセを自らの子として祝福し、自らの12の子を祝福し、彼らの将来を預言しました。ヤコブはイスラエル12部族の父祖となり、ヤコブに与えられたイスラエルの名前は民族の名前となりました。ヤコブは、最初は自我の強い肉적인人でしたが、神の訓練を受ける中で、最後は信仰の人とされました。聖書は主のことをアブラハム、イサク、ヤコブの神と呼び、またヤコブ一人の名を取って、ヤコブの神と呼びます。ヤコブの神はとりでであり、私達を守り、祈りを聞かれる神です。

11 ヨセフ

1. 主が彼とともにおられた 創世39：1－4

父ヤコブはラケルの子ヨセフを特別に愛したので、兄たちはヨセフをねたみました。ある時、羊の群れを飼う兄たちのもとにヨセフが来た時、彼らはヨセフをミデヤン人の商人に売り、やぎの血を浸した彼の長服を父ヤコブに持って行きました。ヤコブは息子たちの欺きにより、ヨセフが死んだと思い、深く悲しみました。さてヨセフを買った商人は、パロの廷臣ポティファルにヨセフを奴隷として売りました。けれども、主がヨセフとともにおられたので、主が彼のすることすべてを成功させてくださいました。それを見た彼の主人はヨセフを側近の者とし、彼の全財産をヨセフの手にゆだねました。ヨセフは兄たちに奴隷として売られても、主を見上げ主に信頼した結果、主も彼とともにおられ、ヨセフを守られたのです。

2. エジプトの宰相 創世41：38－41

主人ポティファルの家で忠実に仕えるヨセフに、主人の妻が好意を持ち、彼を誘惑しました。しかし、ヨセフは「どうしてそのような悪事をして、私は神に罪を犯すことができますでしょうか。」と言って、誘惑を拒みました。主人の妻は自分から逃げるヨセフをうらみ、夫にヨセフが自分にいたずらをしようとしたとのうその証言をし、その結果、ヨセフは監獄に入れられました。しかし、監獄でも主はヨセフとともにおられ、ヨセフは監獄の長から監獄の管理を任されるようになりました。さて、ある日パロが夢を見ますが、夢を解き明かす者が誰もいません。その時、監獄でヨセフから夢を解き明かしてもらった献酌官長がヨセフのことを思い出し、ヨセフはパロのもとに呼び出され、パロの夢を解き明かしました。ヨセフは、夢は7年の大豊作の後、7年の大飢饉が来ることを教えているので、すぐに備える必要があるとパロに伝えました。パロは、神の霊が宿り、知恵に満ちたヨセフが国を治める適任者であるとし、ヨセフをエジプト全土の支配者としました。こうして奴隷から囚人、囚人からエジプトの宰相へと、神はヨセフの人生を導かれたのでした。

3. 神の摂理 創世45：3－5

飢饉はエジプトだけでなく、周りの国にも起こり、カナンのに住むヤコブの家も飢饉のために食べ物なくなりました。そこで、食料を買うためにヤコブは息子たちをエジプトに送りました。彼らがエジプトに行くと、ヨセフがエジプトの支配者として穀物を売っていました。ヨセフには兄たちが来たことがわかりましたが、兄たちはヨセフのことがわかりません。ヨセフは兄たちを問者だとし、末の弟を連れて来るようにと言います。カナンの地に戻った兄たちは父にそのことを伝えますが、父は末息子ベニヤミンをエジプトに連れていくことを拒みます。しかし、ついに食料がなくなり、兄たちはベニヤミンを連れて再びヨセフの所に行きました。そしてヨセフの前で、ユダがベニヤミンの身代わりに奴隷となると申し出た時、ヨセフはついに自分の正体を明かし、神がいのちを救うために私をエジプトに遣わされたのだと言って、神の摂理を信じて兄たちを受け入れたのです。また、ヨセフの神を信じる信仰が、ヨセフに兄たちを赦す寛容な心を与えたのです。

4. 信仰の人 創世50：24－26、ヘブル11：22

ヨセフの兄弟たちはカナンに帰り、ヨセフは生きておりエジプトの支配者になっていることをヤコブに告げました。そしてヨセフの申し出どおり、ヤコブを連れて家族全員でエジプトに避難しました。ヤコブにとって、ヨセフとの再会は夢のようでした。さて、ヤコブが死に、ヨセフも死を迎える時が来ました。ヨセフは神が約束の地カナンに必ず戻らせてくれるから、その時には自分の遺体を携え上ってほしいとの遺言を残しました。ヨセフは神の約束を堅く信じていました。そして、彼の骨はエジプトに住むイスラエルの民に、約束の地に戻れるとの神の約束のしるしとなったのです。やがてイスラエルの民がエジプトを脱出する時、彼らはヨセフの骨を持ち運び、ついにシェケムの地に葬ったのです。

12 モーセ I

1. モーセの誕生 出エジプト2：1－3、ヘブル11：23

ヨセフの時代に、イスラエルの民がエジプトに移住してから、すでに350年ほどが経ちました。イスラエル人が増えるに従って、パロは彼らを弾圧し、苦役に服させました。また生まれてくる男子はみな、殺さなければならぬと命じました。そのような状況下で、モーセが生まれました。モーセの両親は、信仰によって、パロの命令にそむき、モーセを3ヶ月間隠して育てました。そして、ついに隠しきれなくなった時、両親はモーセを神にゆだね、かごの中に入れて、ナイルの岸に置きました。すると、水浴びに来たパロの娘がモーセ(引き出すの意味)を水から引き出し、自分の子供として育てることにしたのです。しかも、機転を利かせたモーセの姉によって、モーセの母が乳母となり、モーセは大きくなるまで両親によって育てられたのです。その間、モーセは主への信仰を両親から十分教えられ、そして、王家に行ってからエジプトの最高の学問を学び、成長したのです。

2. モーセ、ミデヤンの地へ 出エジプト2：11：15、ヘブル11：24－27

モーセが40歳になった時、同胞ヘブル人を顧みる心を起こしました。(使徒7:23)彼は虐待されているヘブル人のかばい、エジプト人を打ち殺しました。モーセは同胞ヘブル人が自分を受け入れてくれるものと思いましたが、受け入れられず、パロもエジプトに反逆するモーセを殺そうとしていることを知って、ミデヤンの地に逃れました。モーセはこの時、信仰によって、パロの娘の子と呼ばれることを拒み、神の民とともに苦しむ道を選んだのです。けれども、この時のモーセは、自分の力に頼ってヘブル人を救おうとし、その結果、エジプト人を殺し、同胞からも受け入れられない状況となりました。神は自分の力に頼る者を用いません。モーセはその後、荒野で神の訓練を受けることになりました。

3. 主によって遣わされるモーセ 出エジプト3：7－10

モーセは荒野で羊飼いとして働きながら、神の訓練を受けました。「この世の教育は人を偉大にする。しかし神の教育は人をむなしくする。」とは、沢村五郎著「聖書人物伝」の解説です。モーセは荒野で徹底的に、自分の力の空しさを経験し、ただ神にのみ頼って生きる人へと変えられていったのです。そして、荒野での40年が経った時、主が柴の燃える炎の中からモーセに現れました。(使徒7:30)そして、主はモーセに、エジプトで苦しむ民を救い出すために、モーセを遣わすと語られたのです。「今、行け。わたしはあなたをパロのもとに遣わそう。わたしの民イスラエル人をエジプトから連れ出せ。」モーセは自分の力の無さを痛感してためらいますが、神はモーセを励まし、モーセはアロンとともにイスラエル人を救い出すために、パロのもとに遣わされていきました。

4. パロのところへ行くモーセ 出エジプト5：1－4

モーセは神の力に満たされ、アロンとともにパロのところに行きました。そして、イスラエル人を解放し、荒野に3日間の旅をさせ、主なる神のための祭りをさせるようにと告げました。けれども、パロの前に逃亡者であるモーセが突然戻ってきて、このような要求をするのは無謀なことでした。パロは「主とはいったい何者か。私がその声を聞いてイスラエルを行かせなければならぬというのは。」と言って取り合わず、かえってイスラエル人の労役を重くしたのです。イスラエル人はその苦しみをモーセに訴え、モーセも神に訴えました。神はモーセに答えられ、再びアロンとともにパロのもとに遣わし、エジプトに十の災いを与えられました。けれども、パロは九番目の災いまでは、ますますかたくなになってイスラエルを荒野に行かせることを拒み続けました。しかし、モーセは主に信頼し、パロのもとに行き続けたのです。

13 モーセ II

1. 過越のいけにえ 出エジプト12:12-14、ヘブル11:28

神がエジプトに下された十番目で最後の災いは、エジプトのすべての初子の死でした。しかし、神はイスラエルの初子が死ぬことがないように、家ごとに羊をほふり、その血を二本の門柱とかもいに付けるように命じられました。羊の血はイスラエルの民の罪を贖うためのものであり、神は羊の血が塗られている家は過ぎ越し、災いは起こらないと約束されたのです。I コリント 5:7 では「私達の過越の小羊キリストが、すでにほふられたからです。」と言い、過越のいけにえが来るべきキリストを指し示していたことを教えています。イスラエルの家では神が命じられたとおりにしました。その結果、神はエジプトのすべての初子を打たれましたが、イスラエルの家ではだれも死にませんでした。パロはついにイスラエル人に出て行くように命じ、イスラエル人は、エジプト滞在 430 年間の後、エジプトを脱出することができたのです。

2. 海を渡るイスラエル人 出エジプト14:29-31、ヘブル11:29

イスラエル人がエジプトを旅立つと、パロはイスラエル人を連れ戻そうと考え直し、軍勢を率いて追いかけてきました。イスラエル人の行く手には海があり、後ろからはエジプト軍が追いかけてきたので、民は恐れて、神に向かって叫びました。そのとき、神はモーセに対し、杖を上げ手を海に差し伸ばし、海を分けて海の真中の乾いた地を進むようにと言われたのです。モーセは神が言われたとおりにすると、神は強い東風によって、海を分けて陸地とし、民は海の真中の乾いた地を歩き、向こう岸に渡りました。一方、エジプト軍もその後には続きましたが、モーセが再び手を海に差し伸べると海は元どおりになり、エジプト軍は溺れてしまいました。こうして、主はイスラエルをエジプトから救われたのです。

3. 荒野の旅 出エジプト16:2-5

イスラエル人はついにエジプトを後にし、カナンの地を目指して、荒野の旅を始めました。けれども、荒野の旅は試練の連続であり、民はその都度、モーセにつぶやきました。水がないと言ってはつぶやき、食べ物がないと言ってはつぶやきました。彼らはあつという間に、出エジプトの救いの恵みを忘れて、神につぶやいたのです。けれども神はそのような民をあわれみ、必要を満たしてくださいました。神は日ごとに天からマナと呼ばれる食べ物を降らせ、荒野の旅の 40 年間、民を養われました。イエスは、「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」と言われました。(マタイ 6:33)つぶやかず、いつでも神に信頼しましょう。

4. モーセの同労者 出エジプト18:21、22

出エジプトにおいて、モーセの存在は絶大でした。確かに神はモーセをイスラエルの霊的指導者として立て、モーセを通してイスラエルを導かれました。けれども、モーセも一人の人間でした。モーセを支え、モーセと共に民を導く同労者がいたからこそ、40 年の荒野の旅を歩むことができたのです。アロンはモーセとともにパロのもとに行きました。また、アマレク人との戦いの時には、アロンとフルがモーセの手を支えたので、モーセは折り続けることができ、戦いに勝利しました。(17:12) また、モーセのしゅうとイテロの助言に従い、千人の長、百人の長、十人の長を立てたことによってモーセは彼らとともに、民を治めることができました。また、70 人の長老がモーセと共に重荷を負い合いました。(民数 12:3) 神は多くの人を用いて、ご自分の民を導かれるのです。

14 モーセ Ⅲ

1. シナイ契約と十戒 出エジプト19：5－8

イスラエル人はシナイ山のふもとに宿営しました。ここで、民はシナイ契約と呼ばれる契約を神と結びました。それは、民が神のことばに聞き従い、契約を守るなら、神はイスラエルを祝福し、イスラエルを神の宝、祭司の王国、聖なる国民とするというものです。民は主に従いますと応答し、神は民に十戒を与えられました。十戒は神の民が守るべき戒めであり、律法すなわち旧約聖書の中心的な教えです。けれども、十戒を完全に守ることができる人はだれもおらず、かえって人間の罪を明らかにしました。人はシナイ契約では救われません。そこで神はキリストによる新しい契約を与えられたのです。「こうして、律法は私達をキリストに導くための養育係となりました。」(ガラテヤ 3:24) けれども、同時に十戒は、今日も救われた民の生き方を示す大切な道しるべでもあるのです。

2. 主と語るモーセ 出エジプト33：9－11

モーセと神との関係は特別なものでした。それは、変貌の山での出来事で、モーセとエリヤが栄光の姿に変わったイエスと話したことによってもわかります。荒野の旅の間、主は、人が自分の友と語るように、顔と顔を合わせてモーセと語られました。それは、神はモーセに直接親しく語られ、モーセも神に直接親しく語ることができたということです。32章では、民が金の子牛を拝んだことを神が怒り、民を滅ぼそうとした時、モーセは民のために神にとりなしました。その結果、神はモーセのとりなしを聞かれ、民に下そうとしていた災いを思い直されました。モーセは会見の天幕で神と語り、神と交わりました。今日、私達はイエスの御名によって、父なる神と親しく語ることができます。この特権を用い、モーセのように、日々みことばと祈りによって神とお会いしましょう。

3. 荒野の40年 民数13：1－3

イスラエル人がパランの荒野に来た時、モーセは主の命によって、カナンの地を探るために12人の斥候を送りました。40日後、偵察から戻った彼らは、カナンの地が乳と蜜が流れる良い地だと伝えました。けれども、10人はあの地の民は強いので、私達は攻め上げないと報告し、ヨシュアとカレブだけが、ぜひとも上って行ってそこを占領しようと言ったのです。民は10人の報告に従い、一人のかしらを立ててエジプトに帰ろうと言い出しました。それに対してモーセは、民は自分達の咎のために40年間荒野をさまよい、20歳以上の者はみな荒野で死に、20歳未満の世代が約束の地に入るとの神のことばを伝えました。イスラエル人はそのとおり、40年間荒野をさまようことになったのです。

4. ピスガの頂き 申命34：1－5

主に信頼した二人の斥候のヨシュアとカレブ、そして20歳未満の人達は、主が言われたとおり約束の地に入ることができました。けれども、40年間イスラエル人を導いたモーセとアロンはカナンの地に入ることは許されませんでした。それは主がモーセに、岩に命じれば水が出ると言われたのに、モーセは主に従わず、民に対する怒りにまかせて杖で岩を二度打ち、神を聖なる者としなかったからでした。(民数 20:12) 神はモーセの後継者としてヨシュアを立て、モーセにはピスガの頂から約束の地を見ることを許されました。そしてその後、神はモーセを天上の約束の地へと召されたのでした。

15 ミリヤムとアロン

1. 女預言者ミリヤム 出エジプト15：20-21

モーセの働きを姉のミリヤムと兄のアロンが支えました。ミリヤムはモーセがかごの中に入れられ、ナイルの岸に置かれた時に見守った姉です。パロの娘がモーセを見つけた時、機転を利かせてヘブル人の乳母を紹介し、モーセが大きくなるまで実の母のもとで育つことができるようにした人物です。この卓越した素質は、後に女預言者として開花したのでした。イスラエル人が紅海を渡り終え、エジプト軍が滅んだ時、ミリヤムが女たちの先頭に立ってタンバリンをたたき、踊りながら主を賛美しました。男だけでも60万人、女子供を入れると200万以上の人々を40年間荒野で牧するために、ミリヤムは女性指導者として大いに用いられたのでした。

2. ミリヤムの失敗 民数12：1-3

女預言者として用いられたミリヤムでしたが、シナイ山を出発しハツェロテに着いた時、アロンとともに大失敗をしてしまいました。それはモーセの妻クシュ人チツボラのことでモーセを非難したのです。チツボラは、モーセが召命に応じてエジプトに向かう途中、息子に割礼を施し、モーセのいのちを救いました。その後、父イテロのもとに戻り、イスラエルがエジプト脱出後、シナイ山の手前のレフィディムでモーセと再会したのでした。ミリヤムは最近合流したチツボラが気に入らなかったのです。けれども、非難の矛先はむしろモーセに向けられました。ミリヤムはモーセが、姉の自分や兄のアロンよりも用いられることをねたんだのです。結果は、神のさばきを受け、ミリヤムはツァラアトに冒され、7日間宿営の外に締め出されました。この出来事を通してミリヤムは悔い改め、いやされたミリヤムは再び民と合流して、再び主に用いられ、旅を続けることができました。

3. 大祭司アロン 出エジプト28：1、2

アロンはモーセより3歳年長の兄でした。モーセが主によってパロのもとに遣わされる時、口べたなモーセを助けるために、雄弁なアロンと一緒に遣わされました。アロンも主の召命に応え、モーセとともにパロのもとに行き、パロに主のことばを語りました。アロンがいなければモーセはパロのもとに行くことができず、その結果、出エジプトも実現できなかったでしょう。主が祭司職を制定された時、アロンは大祭司に、彼の4人の子どもは祭司に任職され、荒野の幕屋で主に仕えました。イスラエルの祭司職はその後、アロンの子孫が代々受け継ぐことになりました。(出エジプト40:13-15)

4. アロンの失敗 出エジプト32：3、4

アロンがミリヤムとともにモーセを非難した時、ミリヤムだけが神の怒りを受けたことから考えると、このときの首謀者はミリヤムだったことがわかります。一方で、イスラエルが偶像礼拝の罪を犯した時の中心人物はアロンでした。モーセが40日40夜シナイ山にいて帰って来ない中で、民はアロンに自分たちを導く神を造るようにと願いました。アロンは、民を戒めるどころか、民の声を聞き、金の子牛を造り、「これがあなたをエジプトの地から連れ上ったあなたの神だ。」と言ったのです。怒りに燃えたモーセに対して、アロンは苦し紛れの弁明をしました。この罪により、民のうち3千人が倒れました。アロンは民に同情するあまり、モーセのように神に従い通す信仰に欠けていたのです。アロンはやが大祭司として任職された時、この時の教訓を生かしたに違いありません。

16 バラム

1. モアブの王バラクの頼み 民数22：4－6

イスラエル人がエリコをのぞむモアブの草原に宿営した時、モアブはイスラエルを非常に恐れました。そこでモアブの王バラクはベトルの地に使者を遣わし、占い師バラムに助けを求めました。バラムは主なる神と交わりを持ち、主の御声を聞くことのできる人でもありました。彼が主のみこころを伺うと、主は彼らと一緒に行ってイスラエルを呪ってはならないと告げました。そこで、バラムは使者に対して、主は自分をあなたがたと一緒に行かせようとはなさらないので帰りなさいと伝え、バラクのもとに行きませんでした。けれども、バラムの心には利得をむさぼる欲が依然として残っていたのです。彼の金銀を愛する心が、やがて彼の人生を主なる神の祝福から切り離すことになるのです。

2. 神に正されるバラム 民数22：32－35

バラクは再び使者をバラムに遣わし、あなたを手厚くもてなすのでイスラエルを呪ってほしいと告げました。バラムは再び主に伺いました。彼は神がみこころを変えてくれることを期待したのです。神はバラムに行くようにと伝えます。けれども、バラムの心を正すために、主の使いが抜き身の剣を手にとってろばに乗るバラムの行く手をはばみました。バラムは話するろばによって、主の使いの存在に気づきました。「バラムは自分の罪をとがめられました。ものを言うことのないろばが、人間の声でものを言い、この預言者の狂ったふるまいをはばんだのです。」(Ⅱペテロ2:17) 主はバラムに、主が告げることばだけを語るようにと再度告げて、バラムをバラクのもとに送りました。

3. イスラエルを祝福するバラム 民数24：15－17

主の戒めを受けたバラムは、バラクからイスラエルをのろうようにと三度告げられても、その都度、主がバラムに告げられた通りイスラエルを祝福し、逆にモアブの上に神のさばきを宣言しました。バラムは神の霊に満たされ、モアブ王バラクの前でも大胆に、又忠実に神のことばを語りました。バラムの預言はイスラエルの民の麗しさを告げ、神が一人の人を起こし、モアブを打ち砕くとの預言をしました。「ヤコブから一つの星が上り、イスラエルから一本の杖が起こり」とは、ダビデについての預言です。ダビデは、バラムの預言通り、モアブを支配する王となりました。

4. バラクに通じるバラム 民数25：1－3

イスラエルを祝福した後、バラムはバラクと分かれて帰りました。けれども、これでバラムとバラクの関係が絶たれていたのではなかったのです。その後、イスラエル人はモアブの娘と不品行を行い、モアブの神々を拝む罪を犯しました。その結果、2万4千人が神罰で死にました。この出来事の黒幕がバラムだったのです。「バラムはバラクに教えて、イスラエルの人々の前に、つまずきの石を置き、偶像の神にささげた物を食べさせ、また不品行を行わせた。」(黙示2:14) バラムは金銭に対する誘惑を絶つことができず、そのとりこになった結果、バラクと手を組んだのでした。「不義の報酬を愛したベオルの子バラム」(Ⅱペテロ2:15)、「利益のためにバラムの迷いに陥り」(ユダ11)と聖書はバラムの罪を教え、その道に歩まないようにと警告しています。イスラエルは、ミデヤン人との戦いで、バラムを剣で殺しました。それがバラムの罪に対する報いでした。

17 ヨシュア I

1. 勝利は主にある 出エジプト17：13－16

イスラエルの民を約束の地に導いたヨシュアは、指導者に任命される前の40年間、モーセの従者として訓練を受けました。しもべとして仕えることが、指導者となるための準備だったのです。ヨシュアの最初の活躍はアマレク人との戦いでした。モーセはヨシュアに戦いに行くように命じ、自らは神の杖を手に持って、丘の頂に立つと言いました。戦いの勝敗はモーセの手が上げられ続けることにありました。モーセの手は祈りの手でした。アロンとフルがモーセの手を支え続けたので、イスラエルが勝利しました。主はモーセに、このことを書物に書き記し、ヨシュアに読んで聞かせよと言われました。ヨシュアはこの戦いを通して、勝利は人間の力によるのではなく、ただ主にあることを学んだのです。

2. 約束の地を目指す信仰 民数14：6－9

モーセが12人の斥候をカナンの地に送った時、戻って来た12人中10人は、その地は良い地だが、その地の住民は強く、自分たちがいながらのように見えたと報告しました。それを聞いた民は、一人のかしらを立ててエジプトに帰ろうと言い出したのです。その時、カナンの地を偵察したヨシュアとカレブは、自分たちの着物を引き裂いて言いました。「主のみこころにかなえば、主が私達をあの地に導き入れてくださる。主に背いてはならない。その地の人々を恐れてはならない。主が私たちと共におられる。」10人の斥候とイスラエルの民は敵を見、自分を見て恐れしました。けれども、ヨシュアとカレブは主を見上げ、主に信頼しました。二人は、勝利は人間の力によるのではなく、主にあることを知っていたのです。そして、主に信頼したヨシュアとカレブだけが約束の地へと導かれました。

3. ヨシュアの任命 民数27：18－23

40年間イスラエル人を導いたモーセは、約束の地に入ることは許されませんでした。モーセは主に、新たな指導者を与えてくださいと祈りました。その時、主はヨシュアを新しい指導者に任命するようと言われました。ヨシュアを新たな指導者に選んだのは、モーセではなく主ご自身でした。モーセがそうであったように、神の民の指導者は主によって選ばれなければなりません。主がヨシュアを選ばれた理由は、彼が神の霊の宿っている人だったからです。単に戦いに強いとか、勇気があるとか、経験があるという人間的な理由ではありませんでした。ヨシュアが選ばれたのは、彼が信仰の人であったからです。モーセのもとで信仰を養われたヨシュアを、主が任命されたのです。

4. ヨシュアとともにおられる主 ヨシュア1：1－5

主のしもべモーセは、神の命によってモアブの地で死にました。その時主はヨシュアに、「今、あなたとこのすべての民は立って、このヨルダン川を渡り、わたしがイスラエルの人々に与えようとしている地に行け。」と言われました。そして、「わたしは、モーセと共にいたように、あなたと共にいよう。わたしはあなたを見放さず、あなたを見捨てない。強くあれ。雄々しくあれ。」とヨシュアを励まされました。この主の励ましはヨシュアにとってどんなに大きな力となったことでしょうか。ヨシュアは、主がカナンの地を与えてくださることと、主が共におられるという約束を再確認することができました。この約束を握りしめて、モーセに代わり、ヨシュアが民を引き連れて約束の地に入っていくのです。

18 ヨシュア II

1. ヨルダン川を渡る民 ヨシュア 3 : 14 - 17

約束の地に入るには、まずヨルダン川を渡らなければなりません。けれどもヨルダン川は岸いっぱいあふれています。その時神は、契約の箱を担ぐ祭司たちが先頭に立って川に入れば、ヨルダン川の水はせき止められると言われました。契約の箱は神の臨在の象徴です。また契約の箱の中には十戒が入れられています。神はヨシュアに、民の祝福は律法を守り行うことにあると言われました。今イスラエルは、共におられる主を信じ、神のことばに従うことをもって、ヨルダン川を渡ることができるのです。そして、主が言われたとおりすると、ヨルダン川はせき止められ、全員が乾いた川底を渡ることができたのです。

2. エリコでの勝利 ヨシュア 6 : 20、21、

いよいよ約束の地カナンを占領する戦いが始まります。神はエリコを占領するための作戦を教えられました。それは、六日間角笛を吹いて、町の周囲を一度回り、七日目は七度回るというものです。これは戦いの方策としては奇妙なものですが、神はこれからの戦いが主の戦いであることをイスラエルに教えるために、主はこのような作戦をヨシュアに与えられました。主が言われたとおりにイスラエル人が行くと、エリコの城壁は崩れ落ち、民はその町を攻め取ることができました。イスラエルの民は、主に従うことが勝利の秘訣であることを知ることができました。

3. アイでの失敗 ヨシュア 7 : 1 - 4

カナンの地を占領する時の戦いは、聖絶を原則としました。聖絶とは、神が許された戦利品以外はすべて滅ぼすことです。なぜ神が聖絶を求められたのかという理由の一つには、罪によって腐敗したカナン人に対する神のさばきという意味がありました。もう一つは、イスラエルの民が、カナン人の偶像と罪の影響を受けないためです。けれども、エリコの戦いにおいて、アカンは聖絶のものに手を出し、罪を犯してしまいました。また、ヨシュアも主に伺うことなく、アイの町を偵察してきた者の声を聞き、少人数で町を攻め、敗北したのです。主はヨシュアに聖絶のものを取った者がいることを告げました。イスラエルはアカンをさばき、ヨシュアは主のことばに聞き従い、今度は全員でアイを攻撃し、アイを占領することができました。

4. 私と私の家とは主に仕える ヨシュア 24 : 15、25、31

主の勝利によって、イスラエルはカナンの地を次々に占領していきました。けれども、占領すべき地はまだたくさん残っていました。そして、ヨシュアも死を迎える時が近づいていました。その時ヨシュアは民に対して、主を恐れ、主に仕えることが主の祝福にあずかり、カナンの地を占領する唯一の方法であることを民に伝えました。そして、「私と私の家とは、主に仕える。」と宣言し、民に決断を求めました。その声に応答して民も、「私達も主に仕えます。」と宣言し、ヨシュアは民と契約を結びました。イスラエルはヨシュアが生きている間、また主のわざを知っていた長老たちが生きている間、主に仕えました。私達にとっても、主に仕える信仰こそが主の祝福にあずかり続ける秘訣なのです。

19 ギデオン

1. ギデオンの召し 士師 6 : 11 - 14

ヨシュアの死後、新しい世代が起こると、イスラエル人は主の目の前に悪を行い、バアルの神に仕えました。その結果、主はイスラエル人をさばき、周りの民がイスラエル人を支配しました。イスラエル人がこの苦しみの時に主に叫ぶと、主は士師と呼ばれるさばきつかさを起こし、イスラエルを敵の手から救われました。このように、イスラエルは王制となるまで、士師たちが国を治めることになりました。ギデオンもイスラエルを治めた士師の一人です。ミデヤン人に苦しめられていた時、イスラエル人が主に叫び求めると、主はギデオンを士師として召されました。主はギデオンに、「あなたのその力で行き、イスラエルをミデヤン人の手から救え。わたしがあなたを遣わすのではないか。」と言われました。私達の力は小さくても、主は小さな私達を用いて、大きな主のわざを成されるのです。

2. 神の約束の確認 士師 6 : 37 - 40

主に召されたギデオンは、主に命じられて、父が持っているバアルの祭壇を取り壊し、アシェラ像を切り倒し、主のための祭壇を築きました。町の人々はギデオンを殺すように言いますが、ギデオンの父は、「バアルは自分で争えばよい。」と言って息子をかばいました。そこでギデオンはエルバアル(バアルは争う)と呼ばれました。さてミデヤン人は周りの民と連合して、イスラエルに対して陣を敷きました。主の霊に満たされたギデオンも、戦いのためにイスラエル人を呼び集めました。そして、戦いの勝利のしるしを主に求めました。彼は一頭分の羊の毛の上にだけ露がおり、周囲の土が乾いているように求め、翌日には周囲の土に露がおり、羊の毛だけが乾いているように求めました。主はギデオンが求めたとおりにしてくださり、ギデオンは主の勝利を信じて戦いに向かいました。

3. 三百人の勇士による勝利 士師 7 : 19 - 22

ギデオンのもとに集まった兵士は3万2千人いました。けれども主は、イスラエル人が自分の手で自分を救ったと言って誇ることがないように、兵士を減らしました。まず、戦いを恐れる者は帰るように伝えると2万2千人が帰り、1万人が残りました。主はそれでも兵士の数が多いとし、口に手を当てて水を飲んだ300人だけを残しました。300人の勇士は100人ずつ三隊に分かれ、角笛を吹き鳴らし、つばを打ち砕き、たいまつを握り、「主の剣、ギデオンの剣だ。」と叫び、敵の陣営に向かいました。すると、敵は大声を上げて逃げ出し、主は同士討ちが起こるようにされました。その結果、イスラエル人はミデヤンの軍勢に勝利することができました。

4. ギデオンの失敗 士師 8 : 26 - 28

この大勝利を受けて、イスラエル人はギデオンを王にしようとしませんが、ギデオンは「主があなたを治められます。」と言って民の申し出を拒みました。その一方で、ギデオンは民に、ミデヤン人から取った分捕り物の金の耳輪を求め、それで一つのエボデを作り、それを彼の町に置きました。エボデは、もともとは祭司が着る聖なる装束ですが、士師の時代にはこれが偶像となり、民はギデオンが作ったエボデを拝み、これがイスラエルの民の落とし穴となったのです。ギデオンの時代の40年間、イスラエルは穏やかでした。けれども、ギデオンが死ぬとすぐ、民はバアルを自分の神とし、主から離れました。

20 サムソン

1. サムソンの誕生 士師 13 : 3-5、24

イスラエル人が40年間、ペリシテ人に支配されていた頃、主はイスラエルをペリシテ人から救うためにサムソンを士師として立てられました。彼の母は不妊の女でしたが、主の使いが彼女に現れて、男の子を産むことを告げました。そして、その子は胎内にいる時から神へのナジル人(神にささげられた者)なので、妊娠中もぶどう酒、強い酒、汚れた物を食してはならないこと、またその子の髪の毛にかみそりを当ててはならないことを告げました。そして、彼がイスラエルをペリシテ人の手から救い始めることを告げました。御使いの告げた通り、彼女は男の子を産み、その名をサムソンと呼びました。主はサムソンを祝福され、彼はイスラエルを救うという使命が与えられて成長しました。

2. サムソンの怪力 士師 14 : 6、19、15 : 14、15

サムソンは怪力の持ち主でした。彼の怪力は、まず若獅子を素手で引き裂く出来事で現されました。次にはアシュケロンの住民30人を打ち殺し、彼らの晴れ着をはぎ取ることによって、さらには、ろばのあご骨で千人のペリシテ人を打ち殺すことによって、怪力を発揮しました。また、ある時は、ガザの町の門の扉と二本の門柱を引き抜き、肩に担いでヘブロンまで帰って行きました。しかし、サムソンの力は彼自身のものではなく、主の霊によって与えられた特別な賜物でした。主の霊が彼に下る時、彼は特別な力が与えられて、ペリシテ人を打ち破ることができました。彼は主から離れては何もできなかったのです。ナジル人としての神への献身のしるしとしての長い髪の毛こそ、彼の力の源でした。

3. サムソンの弱点 士師 16 : 19-21

サムソンには女性に全く弱いという一つの弱点がありました。最大の致命傷となったのが、ペリシテ人の女性デリラのとりこになってしまったことです。デリラはペリシテ人の領主たちに頼まれて、サムソンの力の源をサムソンから聞き出そうとしました。デリラから何度も力の源を聞かれますが、サムソンはその都度、答えをはぐらかしました。けれども、デリラから毎日せがまれた結果、自分はナジル人なので、髪の毛がそり落とされたら自分の力は去ると、とうとう真実を告げてしまいました。デリラによって髪の毛をそられたサムソンの力は去り、ペリシテ人に捕えられ、目をえぐられ牢に入れられて、臼を引くことになりました。けれども、サムソンの髪は牢の中でまた伸び始めました。

4. サムソンの最後 士師 16 : 28-31

ある時、ペリシテ人の領主たちが、自分たちの神ダゴンにいけにえをささげる祭りを行いました。そして、サムソンを見せ物にするために牢から呼び出し、彼は人々の前で戯れる屈辱を味わいました。サムソンはこの時、自分を強めてくださいと主に呼ばわり、宮を支えている二本の中柱に寄りかかりました。そして、ペリシテ人と一緒に死のうと言って、力を込めてそれを引きました。すると、宮は崩れ落ち、彼が活着している間に殺した者よりも多くの人々が、この時死にました。サムソンは20年間、士師としてイスラエルをペリシテ人から救い出しました。けれども、サムソンは霊的にも道徳的にも主のみこころから離れており、力によってペリシテ人と戦い、死んでいきました。士師記の時代は、士師も民もますます神から離れ、自分の目に正しいと見えることを行いました。

21 ルツ

1. ルツの信仰の決断 1 : 15 - 18

霊的に墮落していく士師の時代にあって、すばらしい信仰者がいたことをルツ記は教えています。イスラエルの地にききんがあった時、エリメレクは妻ナオミと二人の息子連れて、ベツレヘムからヨルダン川東岸のモアブの地に避難しました。ところが、彼らがモアブの地に十年間滞在している間にエリメレクは死に、二人の息子はモアブの娘と結婚しますが、二人の息子も死んでしまいます。残されたナオミはイスラエルのききんが終わったことを聞き、二人の嫁とベツレヘムへ帰ろうとしますが、途中で二人の嫁にモアブにとどまり、そこで再婚し、幸せになってほしいと言って、二人をモアブに帰そうとします。ナオミのことは聞き、一人の嫁オルパはモアブに戻っていきましたが、ルツはナオミにすがりつき、自分がナオミと一緒にベツレヘムに行くのは、主への信仰によることを告げました。「あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。」この言葉に、ルツの信仰の決断が表わされています。ルツは主への信仰によって、主の民イスラエルとともに生きることを選んだのです。

2. ルツの信仰に対する主の報い 2 : 10 - 13

ベツレヘムに着いたナオミとルツは貧しい生活を強いられ、ルツは落ち穂拾いをすることによって、生計を立てようとしていました。ところが、ここに主の特別の計らいがありました。ルツが行った落ち穂拾いの畑が、はからずも買戻しの権利のあるエリメレクの親類ボアズの畑だったのです。ボアズはすでに、ルツがしゅうとめナオミにしたこと、またモアブの地から主に信頼してイスラエルに来たことを聞いていました。そして、「主があなたのしたことに報いてくださるように。また、あなたがその翼の下に避け所を求めて来たイスラエルの神、主から、豊かな報いがあるように。」とルツに告げました。ボアズもまた主に信頼する信仰者だったのです。そして、主はボアズを通して、豊かな報いをルツに与えられることになったのです。

3. ルツのボアズへの求婚 3 : 8 - 11

ルツはボアズの好意を受け、引き続きボアズの畑で落ち穂拾いをしました。ある時、ナオミはルツに、ボアズの所に行って求婚するようにと告げました。それは、ボアズが買戻しの権利のある親類であるとともに、ルツに好意をいただいていることを知ったからです。ルツはナオミの言うことに従い、主にゆだねて、夜ボアズが寝たのを見届けて、ボアズの足の所をまくって、そこに寝ました。ボアズは夜中になって、女性が自分の足もとに寝ているのに驚き、起き上がって名を尋ねると、ルツであることがわかりました。ボアズは「娘さん。主があなたを祝されるように。あなたのあとの真実は、先の真実にまさっています。」と言って、ルツの行いを受けとめます。そして、自分より近い買戻しの権利のある親類がいることを告げ、ルツの願うように、正式な手続きをすることを約束しました。

4. ルツとボアズの結婚 4 : 13 - 17

ボアズはルツと約束した通りに、翌朝自分より近い買戻しの権利のある親類を呼び、町の長老十人を招き、正式な手続きを始めました。ボアズが、ナオミがエリメレクの畑を売ろうとしていること、また畑を買い戻す場合、死んだ者の名前を相続地に起こすために、モアブの女ルツを妻としなければならないことを告げると、親戚の者は自分は買い戻せないで、ボアズが買い戻すようにと答えました。そこで、ボアズは長老十人の前で、自分が買い戻すことを正式に告げ、ルツを妻として迎えました。主は二人を祝し、ルツは男の子オベデを産みました。このオベデの孫がダビデであり、こうして異邦人ルツがイエス・キリストの系図に入れられたのです。ルツの信仰は、歴史の中で、主を信じる者を主が報いてくださることを証しています。

22 サムエル I

1. ハンナの祈り Iサムエル1：9－11

サムエルは最後の士師、主の預言者、王制創設者として、靈的暗黒時代のイスラエルに、新しい神の息吹を吹き込んだ人物です。このサムエルの誕生には母ハンナの切なる祈りがありました。結婚後しばらく不妊だったハンナは、主の宮で激しく泣きながら主に誓願を立てて祈りました。彼女の誓願は、主が男の子を授けてくださるなら、その子の一生をナジル人として主にささげるというものでした。ハンナの祈る姿を見ていた祭司エリは、彼女が酔っていると思いましたが、ハンナはエリに、主に心を注ぎ出して祈っていたことを告げました。エリから祝福の言葉を告げられると、ハンナは自分の祈りを主にゆだね、主に信頼し、心晴れやかになりました。

2. サムエルの誕生 Iサムエル1：19、20、26－28

主はハンナの祈りを聞かれ、彼女はみごもって男の子を産みました。ハンナはその子をサムエルと名付け、乳離れするまで自分で育てました。そして、サムエルが乳離れしたとき、彼をシロの主の宮に連れて行き、サムエルを誓願どおり主にささげ、祭司エリにサムエルを託しました。このことは母親のハンナにとってどれほどつらいことだったのでしょうか。まさに身を切るような思いだったに違いありません。けれども、ハンナは自らの献身として、誓願どおりサムエルを主にささげたのです。そして、そのことによって、サムエルはやがて預言者となり、イスラエルを救う人物となったのです。ハンナの祈りとハンナの献身が、後のサムエルの活躍の土台となったのです。

3. 少年サムエル Iサムエル2：18、19、26

サムエルは、祭司エリのもとで主の宮で育ちました。ハンナは、年に一回、夫とともに主の宮に礼拝をささげに行くときに、サムエルのために作った上着を持って行きました。この時のしばしの親子の交わりはどんなに素晴らしいひと時だったことでしょうか。またハンナは、日々息子サムエルのためにとりなし祈っていたに違いありません。ハンナも、祭司エリの二人の息子が靈的に墮落していることを聞いていたでしょう。そのような中でも、サムエルが主のみもとで成長するように祈っていたのです。そして、そのとおり、サムエルは主のみもとで成長し、主にも人にも愛される人物となり、主の前で仕えたのでした。

4. 主の預言者 Iサムエル3：10、19－21

ある夜、サムエルが神の箱の安置されている主の宮で寝っていると、自分と呼ぶ声を聞きました。サムエルは祭司エリが呼んでいると思い、エリのところに行くと、呼んでいないとのことで戻りました。このようなことが3回ある中で、エリは主がサムエルを呼んでおられることを悟りました。4回目に主がサムエルを呼ばれた時、エリから教えられたとおり、「お話し下さい。しもべは聞いています。」とサムエルが言うと、主はサムエルにエリの家に対するさばきを告げられました。サムエルはその後成長し、主は彼とともにおられ、主のことばがサムエルに与えられました。こうして、全イスラエルはサムエルが主の預言者に任じられたことを知ったのでした。

23 サムエル II

1. さばきつかさ Iサムエル7：3－6

イスラエルはペリシテ人との戦いの中で、神の箱を持ち出した結果、神の箱がペリシテ人に奪われ、ペリシテ人の支配に苦しむようになりました。一方、神の箱を奪ったペリシテ人も、主なる神から下る災いを受け、結局神の箱をイスラエルに戻しました。その後、神の箱はキルヤテ・エアリムに20年間とどまり、その間もイスラエルはペリシテ人の支配下に置かれました。そして、ついにイスラエルが主を求めると、サムエルはイスラエルに対して、心を尽くして主に帰り、偶像を取り除けば、主はイスラエルをペリシテ人から救われると告げました。イスラエルはサムエルの言葉に従い、ミツパに集まって主の前に悔い改めました。そして、主はペリシテ人に対する勝利を与えられました。こうしてサムエルは一生の間、イスラエルをさばき、その間ペリシテ人は攻撃してきませんでした。

2. 王を求める民 Iサムエル8：4－7

サムエルが年老いた時、二人の息子をさばきつかさとしました。ところが、この息子たちは父の道に歩まず、利得をむさぼり、さばきを曲げました。そこで、イスラエルの長老たちがサムエルの所に来て、「ほかのすべての国民のように私達をさばく王を立ててください。」と言いました。この求めはサムエルの気に入りませんでした、サムエルは主に祈りました。すると、サムエルの思いとは違い、主は民の声を聞き入れて王を立てるようにと告げられました。さらに主はサムエルに対し、民に王の権利を伝え、民に厳しく警告するようにと伝えられました。サムエルは主のことばに従い、王制移行を決意しました。

3. サウルへの油注ぎ Iサムエル10：1、13：1、13、14

サムエルは主のお告げに従い、ろばを探しに來たサウルに油を注ぎました。そして、サムエルはミツパに民を集め、サウルを王として立てました。サウルは30歳で王となり、イスラエル最初の王として12年間治めました。ある時、ペリシテ人との戦いを前にして、サウルはサムエルを待ち切れずに自分でいけにえをささげ、ペリシテ人を恐れる民の士気を上げようとしてしました。しかし、それは主の命令に従わないことでした。なぜなら、サムエルはサウルに対して、サムエルが着くまで7日間待ち、サムエルから成すべき事を聞かなければならないと伝えていたからです。(10:8)サムエルは、主はご自分の命令に従わないサウルを退け、主のみこころにかなう新たな王を立てられるとサウルに告げました。

4. ダビデへの油注ぎ Iサムエル16：13、19：20、25：1

主はサウルのことと悲しむサムエルに対して、エッサイの子に油を注いで、王に任命するようにと語られました。エッサイはボアズとルツの孫です。エッサイは7人の息子をサムエルの所に連れて來ましたが、だれも主が選ばれた人ではありませんでした。そして、末息子のダビデが連れて來られた時、主は「この者に油を注げ。」とサムエルに語られ、サムエルはダビデに油を注ぎました。その日以来、主の霊がダビデの上に激しく下りました。サムエルはその後、ラマに帰りました。サムエルはサウルが王となって以来、ラマで預言者学校を建ち上げ、監督者として働いていました。サムエルは王制時代のイスラエルには、王と民に神のことばを語る預言者が必要であることを感じ取ったのでした。そしてそのとおり、イスラエルの王国時代に預言者の全盛期を迎えました。サムエルはこの世での使命を立派に果たし、民に惜しまれて、天に召されました。

24 サウル

1. 最初の王 I サムエル 10 : 1、21－24

サムエルが高齢になり、サムエルの息子たちがさばきつかさとなりましたが、彼らは民を正しく治めませんでした。そこで、イスラエルの民は、自分たちを治める王を立ててほしいとサムエルに願いました。神はそのことを聞き入れ、サウルをイスラエルの最初の王として選ばれました。サムエルはろばを探しに来たサウルを招き、彼に油を注ぎ、王に任命しました。そして、ミツパに民を集め、部族ごと、氏族ごとにくじを引かせると、サウルが取り分けられました。サウルは荷物の間に隠れていましたが、人々はサウルを連れて来て、新しい王の任命を喜びました。サムエルは民に王の責任を告げ、それを文書にして、主の前に納めました。よこしまな者たちはサウルを軽蔑しましたが、サウルは黙っていました。このように、サウルが王として任命された時、彼は謙遜と忍耐を示し、王としての大切な素質を表しました。

2. サウルの全盛期 I サムエル 11 : 6－7、14－15

その後、アモン人に攻められたヤベシュ・ギルアデの人々が、サウルのもとに助けを求めに来ました。その時、神の霊がサウルに激しく下り、アモン人と戦うためにイスラエルの民を呼び集めました。民は主を恐れて、一斉に出て来てアモン人と戦い、ヤベシュ・ギルアデをアモン人から救い出しました。この時、イスラエルの民はサウルを軽蔑した者を殺すことを求めましたが、サウルは彼らを殺してはならないと言って、王としての寛容さを示しました。そして、ギルガルで王権創設の宣言が成され、イスラエルは王国時代を迎え、サウルは栄誉ある最初の王となりました。けれども、サウルが主の祝福にあずかる、王としての全盛期は7日間で終わることになります。

3. サウルの墮落 I サムエル 13 : 8－14

サムエルがサウルに油を注いだ時、「ギルガルに行って7日間待つように。私も行っていけにえをささげ、あなたに成すべきことを教える。」と伝えました(10:8)。その後、ミツパでの王としての任命、アモン人との戦い、ギルガルでの王権創設宣言がありました。そして、ヨナタンがペリシテ人の守備隊長を殺したことをきっかけに、ペリシテ人との戦いが始まろうとしていました。サウルはサムエルの言葉通り、7日間ギルガルで待ちましたが、サムエルは現れませんでした。その間、民はペリシテ人に恐れを抱き、サウルから離れようとしていました。そこで、サウルは自分の判断でいけにえをささげ、民を引き留めようとしたのです。サウルがいけにえをささげ終わった時、サムエルが到着しました。そして、サウルが主の命令を守らなかったため、主は別の人を王として立てられると伝えました。

4. サウルの破滅 I サムエル 15 : 22－23、31 : 3－4

サウルはさらなる罪を犯しました。アマレク人との戦いの時、サムエルからアマレク人を聖絶するようにとの主の命令を告げられたにも関わらず、サウルは主の命令に背き、アマレク人の王を生かし、価値のあるものを惜しんで聖絶しませんでした。このサウルの不従順に対して、サムエルは、「主もあなたを王位から退けた。」と伝えました。その後、サムエルはダビデに油を注ぎました。一方、サウルは主の祝福を失い、悪霊に悩まされ(18:10)、目覚ましい活躍をするダビデを恐れ(18:12)、ダビデを殺そうとしますが、逆にダビデによっていのちを助けられます(24:6,26:11)。ついには霊媒師を呼んでサムエルの霊を呼び出し、助けを求めようとして(28:7)。そして、ペリシテ人との戦いで、ひどい傷を負い、自ら命を絶しました。サウルは、王としての権力を得ることにより、高慢になり、自分の判断で国を治めようとし、主に従わなかった結果、主の祝福を失ってしまったのです。

25 ダビデ I

1. ダビデへの油注ぎ I サムエル 16 : 11-13、21-23

主はサウルに代わる新しい王を立てるために、サムエルをエッサイの家に遣わしました。エッサイはボアズとルツの孫にあたります。サムエルは長男エリアブを見た時、この人が油注がれる人だと思いましたが、主は「人はうわべを見るが、主は心を見る。」(16:7)と言われ、エリアブではないことを示されました。結局、家にいる7人のエッサイの息子は誰もふさわしくありませんでした。そこで、羊の番をしていたダビデを呼び寄せると、主は「この者に油を注げ。」と言われ、サムエルはダビデに油を注ぎました。その日以来、主の霊がダビデに激しく下りました。一方、サウルは悪霊に悩まされるようになりました。そこで、サウルの家来の助言により、立琴を上手に弾くダビデがサウルのもとに遣わされました。ダビデが立琴を弾くと、サウルから悪霊は離れました。そこで、サウルはダビデを愛し、ダビデはサウルの道具持ちとなりました。

2. ゴリアテとの戦い I サムエル 17 : 46-49、18 : 6-9

イスラエルとペリシテ人の戦いが再び始まりました。ペリシテ人の陣営からはゴリアテという大男の代表戦士が出て来て、自分と決闘するようにとイスラエルの陣営に語りますが、イスラエル人はゴリアテを恐れ、誰も戦おうとはしません。その時、戦場にいる兄の安否を確かめるために、ダビデがやって来ました。ダビデはゴリアテの声を聞き、ゴリアテと対決することをサウルに願い出ました。そして、ダビデは石投げで石を放ち、ゴリアテの額に命中させて、ゴリアテを倒しました。その結果、イスラエル人はペリシテ人に勝利しました。ところが、サウルを迎えた女たちが、「サウルは千を打ち、ダビデは万を打った。」と歌ったことから、その日以来、サウルはダビデを疑いの目で見えるようになりました。

3. ダビデの百戦連勝 I サムエル 18 : 27-30

サウルはダビデを恐れ、彼を自分のもとから離し、千人隊長にしました。ダビデは行く所どこでも勝利を収めた結果、サウルはますますダビデを恐れ、ついに殺意を抱くようになりました。サウルは娘ミルカがダビデを愛していることを知ると、ダビデに対して、ペリシテ人の陽の皮百を持ってくれば、ミルカと結婚できると言って、ダビデをペリシテ人の手に下らせようとしてしました。けれども、ダビデはペリシテ人に勝利し、結局ダビデはミルカと結婚し、王の婿となったのです。サウルは、主がダビデとともにおられることを知り、ますますダビデを恐れ、サウルはいつまでもダビデの敵となりました。一方、百戦連勝するダビデの名は、イスラエルで尊ばれるようになりました。

4. ダビデの逃亡 I サムエル 19 : 9-12

サウルはダビデを殺すことを息子ヨナタンに話しました。けれども、ヨナタンはダビデを親友として愛していたので、父を説得し、思いとどまらせました。しかしその後、悪霊がサウルに臨んだ時、サウルは立琴を弾くダビデに槍を投げて突き刺そうとしました。ダビデはとっさに身をかわし、その場から逃げました。けれども、サウルはダビデを殺すためにダビデの家に使者を遣わしました。ダビデの妻ミカルはそのことを知ると、夫ダビデを窓から下ろし、家から逃がしました。この時から、ダビデの逃亡生活が始まりました。ダビデはラマのサムエルの所に逃れると、サウルはダビデを捕えるために使者たちをラマに送りました。けれども、使者たちにも神の霊が臨み、預言者学校の一同とともに預言しました。そこでサウル自身もラマに行くと、彼にも神の霊が臨み、預言したのです。(19:18-24)ダビデとは「愛される者」という意味の名前です。主に愛されたダビデは、王になるまでは苦難の道を歩み、神の訓練を受けながら、信仰者として整えられていったのです。

26 ダビデⅡ

1. ヨナタンとの友情 I サムエル 20 : 13 - 17

ダビデはサウルの息子ヨナタンに、サウルが自分を殺そうとしていることを打ち明けました。そして、「自分はベツレヘムでいけにえをささげるために、新月祭の食事を欠席するとサウルに伝えてほしい。もし、サウルがダビデの欠席を了承すれば、自分は安全であるが、激しく怒ればサウルは自分を殺そうとしていると思ってほしい。」とヨナタンに告げました。ヨナタンは必ず結果をダビデに伝えると言い、ダビデと契約を結びました。ヨナタンはダビデを愛し、ダビデこそが将来の王になると考えていました。ダビデもヨナタンを愛し、ヨナタンとの友情は生涯続きました。さて、サウルはダビデが食事を欠席したことを激しく怒り、ダビデをかばうヨナタンさえも殺そうとしました。ヨナタンはサウルがダビデを殺そうとしていることを知り、ダビデにこのことを伝えました。ダビデはサウルから逃れますが、ヨナタンは逃亡中のダビデを訪問し、ダビデを励ました。(23:16-18)

2. エン・ゲディの荒野 I サムエル 24 : 3 - 7

サウルはダビデを追い、ダビデはサウルから逃げました。エン・ゲディの荒野にダビデがいた時のことです。ダビデと部下がほら穴で隠れていた時に、サウルが用を足すために、そのほら穴に入ってきました。ダビデの部下はサウルを殺そうと言いましたが、ダビデはサウルの上着のすそをこっそり切り取り、そのことさえも心を痛めて部下に言いました。「私が、主に逆らって、主に油注がれた方、私の主君に対して、そのようなことをして、手を下すなど、主の前に絶対にできないことだ。彼は主に油注がれた方だから。」と言いました。ダビデはいのちの危険を覚える中でも、主に従い通すことが大切であることを知っていたのです。サウルがほら穴を出た後、ダビデもほら穴から出て、サウルに自分がしたことを伝えました。サウルはダビデの真実に触れ、ダビデを祝福して帰って行きました。

3. ハキラの丘 I サムエル 26 : 7 - 12

サウルは再びダビデを殺すためにハキラの丘にやって来て陣を敷きました。ダビデは部下のアビシャイを伴い、夜サウルの陣営に入り込みました。サウルは寝ており、兵士たちもその回りに寝ていました。その時アビシャイはサウルを殺そうとダビデに言いましたが、ダビデはアビシャイに、「殺してはならない。主に油注がれた方に手を下して、だれが無罪でおられよう。」と答えました。そして、サウルの枕もとの槍と水差しを取り、山の頂上まで引き返し、兵士たちに呼びかけました。サウルは再びダビデが自分のいのちを救ったことを知り、ダビデに対して、「私は罪を犯した。わが子ダビデ。帰って来なさい。私はもう、おまえに害を加えない。」(26:21)と言いました。けれども、サウルの悔い改めは真実ではありませんでした。一方、ダビデは「主はおのおの、その人の正しさと真実に報いてくださいます。」(26:23)と言い、神の前に真実を尽くした結果、主の祝福を受けることができました。

4. ペリシテ人の地 I サムエル 27 : 1 - 4

ダビデは、サウルが再び自分を探しに来ると考え、部下 600 人を連れてペリシテ人の地、ガテの王アキシュのもとに逃れました。ダビデがガテへ逃げたことをサウルが知ると、サウルは二度とダビデを追いませんでした。ダビデはアキシュからツィケラグの町を与えられ、アキシュの信頼を勝ち取ります。けれどもペリシテ人とイスラエル人との戦いの時に、ペリシテ人の首長たちの信頼を得ることができず、ペリシテ人とともに行動することを許されませんでした。(29章)ここにも、ダビデがイスラエル人と戦わなくて済むようにとの主の配慮がありました。さらに、ツィケラグに戻ると、アマレク人がダビデと部下の家族を連れ去った後でした。ダビデは部下とともにアマレク人を追いかけて、家族全員を取り戻すことができました。(30章)ここにも主の特別の配慮がありました。

27 ダビデⅢ

1. サウルとヨナタンの死 IIサムエル1：11－16

イスラエルとペリシテ人の戦いの中で、サウルもヨナタンも戦死しました。ダビデのもとに一人のアマレク人がそのことを報告しに来ました。彼は、瀕死の状態のサウルが殺してほしいと言ったので、自分がサウルを殺したことをダビデに伝えました。ダビデはアマレク人に対し、「主に油注がれた方に、手を下して殺すのを恐れなかったとは、どうしたのか。」と言い、若者の一人を呼んで彼を打ち殺しました。アマレク人の行為は、主に対する冒とく罪だったので、その罪に対するさばきをダビデが行ったのです。ダビデはサウルとヨナタンの死を悲しみ、哀歌を作り、「サウルもヨナタンも愛されるりっぱな人だった。」(1:23)と歌いました。ダビデは自分のいのちをねらったサウルに対しても、最後まで真実を尽くし、恨むことはしませんでした。これは、ダビデの主に対する信仰から出たことです。

2. ユダの王 IIサムエル2：1－4a

サウルの死後、ダビデは主に、「ユダの一つの町へ上って行くべきでしょうか。」と主に伺いました。主はダビデの祈りの答え、ユダの町ヘブロンに上って行くようにと語られました。ダビデは部下たちを連れてヘブロンに行くと、ユダの人々がやって来て、ダビデに油を注ぎ、ユダの家の王としました。一方、サウルの將軍アブネルは、サウルの子イシュ・ボシェテをマハナインに連れて行き、全イスラエルの王としました。(2:8,9)こうして、ユダ族とそれ以外のイスラエル部族に別々の王が立つことになりました。ダビデがヘブロンでユダの王であった期間は7年6カ月でした。(2:11)ダビデがサムエルから油注ぎを受けてから、ユダの王になるまでは試練の連続でした。けれどもダビデは主に信頼して、主の計画の成就を待ちました。そして主はついにダビデをユダの王とされたのです。けれどもダビデが全イスラエルの王になるためには、さらに待たなければなりませんでした。

3. サウルの家とダビデの家 IIサムエル3：1、27－30

サウルの家とダビデの家との間には、長く戦いが続き、ダビデはますます強くなり、サウルの家はますます弱くなりました。そのような中で、サウルの家では將軍アブネルが勢力を増し加えました。ある時、アブネルがサウルのそばめと通じたことをイスラエルの王イシュ・ボシェテにとがめられたのをきっかけに、アブネルはダビデの家に寝返る計画を立てました。しかし、アブネルがダビデの所に来た帰り道に、ダビデの家の將軍ヨアブによって暗殺されてしまいました。ヨアブは自分の兄弟アサエルがアブネルによって殺されたことに対する復讐をしたのです。ダビデはアブネルが殺されたことを悲しみ、断食しました。そこで、全イスラエルはダビデがアブネルを殺したのではないことを知りました。ダビデは力で王位を取ろうとはせず、ただ主のみこころにまかせていました。

4. 全イスラエルの王 IIサムエル5：1－5

イスラエルではさらに事件が起こりました。二人の略奪隊長が、昼寝をしていたイシュ・ボシェテ王を暗殺したのです。彼らはダビデにそのことを報告しに来ました。すると、ダビデは二人を罰し、ダビデの命令により殺されました。ダビデは寝ている王を殺す罪を赦すわけにはいかなかったのです。(4章)こうして、イスラエルが王を失ったとき、イスラエルの全部族がダビデのもとに来て、全イスラエルの王になってほしいと願いました。そして、イスラエルの全長老がヘブロンに来た時、ダビデは主の前に彼らと契約を結び、彼らはダビデに油を注いで、イスラエルの王としました。ダビデは30歳で王となり、ヘブロンで7年半、エルサレムで33年、全イスラエルとユダを治めました。こうしてついに、サムエルによるダビデの油注ぎは、主のご計画の中で成就したのです。

28 ダビデⅣ

1. ダビデの町エルサレム IIサムエル5：6－10

ダビデは天然のとりでであるエルサレムを首都にしたいと考えました。けれども、当時はエブス人がエルサレムに住んでいました。ヨシヤとその後の時代に、イスラエル人はエルサレムを取ったにも関わらず、再びエブス人に奪われていたのです。ダビデはシオンの要害エルサレムを攻め取り、奪い返しました。ダビデはここをダビデの町と呼び、周りに城壁を建て、中に王宮を建てて、イスラエルの都としました。さて、ダビデがユダ族の王であったときは、ペリシテ人はダビデが一地方代官として、なおペリシテ人の側にあると思っていました。けれども、ダビデが全イスラエルの王になったことを知った時、ペリシテ人はダビデを打つために進軍してきました。けれども、ダビデは主の命令に従い、ペリシテ人を打ち破り、こうしてイスラエル王国を確かなものとししました。(5:17-25)

2. 主の箱、エルサレムへ IIサムエル6：16－19

主の箱がアミナダブの家に置かれてから、すでに70年が経っていました。ダビデは都エルサレムに主の箱を移し、エルサレムを政治と信仰の中心にしたいと考えました。主の箱が新しい車に載せられ、運ばれる間、ダビデとイスラエルの民は主を賛美し、力の限り喜び踊りました。けれども、途中で主の箱が倒れそうになった時、ウザが手で主の箱を押さえたため、主の怒りを受けて、その場で死にました。主の箱は神の臨在の場所であり、決して手を触れてはいけなかったのです。ダビデは主を恐れ、3カ月間オベデ・エドム之家に主の箱を置きました。主がオベデ・エドム之家を祝福されたと聞くと、ダビデは再び主の箱をエルサレムに運び始めました。ダビデは主の箱の前で力の限り踊り、主の箱を喜び迎えました。けれどもダビデの妻でサウルの娘ミカルはダビデをさげすみました。ミカルにはダビデのような主への信仰がなかったのです。

3. ダビデ契約 IIサムエル7：11－13

ダビデは主の箱を安置する神殿を建てたいと願いました。そのことを預言者ナタンに告げると、神はナタンにダビデの家へのすばらしい計画を伝えられました。それはダビデが神の家を造るのではなく、神がダビデのために一つの家を造るというものでした。「わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはこの王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」「世継ぎの子」(ヘブル語でゼラー)は「子孫」とも訳される言葉です。神はここで、「女の子孫」(創 3:15)、「アブラハムの子孫」(創 22:18)として生まれる救い主は、「ダビデの子孫」であることを明らかにされたのです。ダビデの子孫として生まれる救い主によって、神の国は確立するのです。この箇所はダビデ契約と呼ばれ、救い主の大切な預言です。そして、イエスはその預言どおり、アブラハムの子孫、ダビデの子孫として生まれました。

4. ダビデの罪 IIサムエル11：1－5

イスラエルは、なおも周りの国々と戦いを続けていましたが、王自らが戦いに出る必要がなくなりました。イスラエルの全軍がアモン人と戦っている時、ダビデは昼寝から起き上がり、屋上を歩いていると、一人の美しい女が体を洗っているのが見えました。ダビデは人をやってその女を調べさせるとヘテ人ウリヤの妻バテ・シェバであることがわかりました。ダビデはこの女を召し入れ、彼女と寝ました。その結果、女が身ごもると、今度はウリヤを戦場から呼び戻し、家に帰らせようとした。けれども、忠実なウリヤは他の兵士が戦場で野営している時に、自分だけが家に帰り、妻と寝ることなどできないと言い、家に帰りませんでした。そこで、ダビデはウリヤを激戦地の前面に送り、敵に打たれて死ぬように指図し、その結果、ウリヤは死にました。王宮で気が緩み、王として傲慢になったダビデは、姦淫と殺人の恐ろしい罪を犯し、主のみこころをそこないました。

29 ダビデV

1. ダビデの悔い改め IIサムエル12:9-14

主は預言者ナタンを、罪を犯したダビデのもとに遣わしました。そして、ダビデに対して、主と主のことばをさげすみ、ウリヤを殺し彼の妻を取って自分の妻とした罪と、その罪に対する神のさばきを告げました。ダビデは、ナタンを通して語られた主のことばを聞くと、自分の罪を認め、即座に悔い改め、「私は主に対して罪を犯した。」と言いました。それに対してナタンは、「主もまた、あなたの罪を見過ごしてくださった。」と、ダビデに対して罪の赦しを告げました。しかし一方で、罪の結果は刈取らなければならないことも告げ、生まれる子は必ず死ぬと告げました。詩篇51篇にはこの時のダビデの祈りが記されています。ダビデは主の前に赦しを乞い、「ヒソブをもって私の罪を除いてきよめてください。そうすれば、私はきよくなりましょう。私を洗ってください。そうすれば、私は雪よりも白くなりましょう。」と祈りました。(詩 51:7) 今日、私達は主イエスの血によって、どんな罪も赦され、きよくしていただけます。(Iヨハネ 1:7)

2. 罪の結果の刈り取り IIサムエル12:18、13:14、28-29

主は、罪を深く悔い改めたダビデを赦されました。けれども、ダビデは自分の罪に対する結果を刈り取らなければなりません。まず、ナタンが告げた通り、生まれた子は7日目に死んでしまいました。またダビデの罪は、他の自分の子どもにも悪影響を及ぼしました。ダビデの息子アムノンが母親違いの妹タマルを強姦する罪を犯しました。それに対して、タマルの兄アブシャロムがアムノンに対して復讐し、アムノンを殺しました。アブシャロムは逃げ、ダビデはアムノンの死を嘆き悲しみました。ダビデは、自分の子どもが犯す罪を通して、自ら犯した罪の大きさを知ったのでした。主はどんな罪も悔い改めるならば、イエスの血潮によって赦してくださいますが、人は自ら犯した罪に対する責任を負わなければならないのです。

3. アブシャロムの反乱と死 IIサムエル15:13-17、18:32、33

ダビデはさらに自らの罪に対する結果を刈り取ることになりました。3年間ダビデのもとから逃れていたアブシャロムは、將軍ヨアブのとりなしによってエルサレムに戻ることができました。けれども、ダビデはアブシャロムと会おうとはしませんでした。そのようなダビデに対して、アブシャロムは不信任を募らせ、民を巻き込んでダビデに対して謀反を起こしました。この謀反に加わる民は多く、ダビデは家来とともにエルサレムから逃げなければなりません。アブシャロムはエルサレムに入り、白昼公然とダビデのそばめたちと寝て、ダビデへの敵対心をあらわにしました。これも預言者ナタンが語った通りになりました。さらにダビデは自分の息子と戦うことになりました。戦いは、アブシャロムの死によって、ダビデ軍の勝利となりました。けれども、ダビデはアブシャロムの死をいたみ悲しみました。ダビデにとってはただ悲しみだけが残る勝利となったのです。

4. もう一つの罪 IIサムエル24:1-4、24-25

ダビデの王としての歩みは、罪の結果を刈り取るという悲しみを経験しました。けれども、ダビデは罪を赦された者として、主に信頼して歩み続けました。そして、主もまたダビデを助け、イスラエルは繁栄を続けました。そのような中で、ダビデは再び罪を犯しました。ダビデはヨアブに人口調査を命じ、このことによって王としての業績を誇る高慢の罪を犯したのです。ダビデは人口調査を行った後、良心のとがめを覚えて、主の前に悔い改めました。神はその祈りを聞かれるとともに、罪に対する責任を取らなければならないことを告げました。こうして神はイスラエルに疫病を送り、7万人が死にました。主はダビデに、エブス人アラウナ(別名オルナン)の土地を買い、そこに祭壇を築くようにと告げました。ダビデは主が言われるとおりにし、いけにえをささげて祈った結果、神罰は止まりました。この場所にやがてソロモンが神殿を建てることになったのです。(II歴代 3:1)

30 ソロモン

1. 信仰者としての出発 I 列王 3 : 3、10-14

ダビデの跡を継いでソロモンがイスラエルの王となりました。ソロモンは主を愛し、父ダビデから言われたとおり、主の戒めを守り、主に従って王として歩み始めました。主がソロモンに何を願うかと聞かれた時、ソロモンは「王として善悪を判断し、民をさばくために聞き分ける心をください。」と願いました。このソロモンの願いは主のみどころにかない、主はソロモンに知恵の心と判断する心、さらには富と誉れを与えると約束されました。そのとおり、ソロモンは善悪を判断して民を正しくさばく王となりました。さらには知恵に満ち、詩篇の一部、箴言、伝道者の書、雅歌を書きました。また「栄華を窮めたソロモン」とイエスが言われたように、富と誉れを手に入れ、父ダビデが築き上げたイスラエル王国を繁栄させました。

2. 神殿建設 I 列王 6 : 1、2、8 : 27-30

ソロモンは父ダビデが命じたように、神殿建設を行いました。7年かけて完成した神殿は実に壮麗なもので、当時の世界の七不思議の一つとされました。神殿奉獻式の時のソロモンの祈りに、彼のへりくだった信仰者としての姿を見ることができます。神殿は神の臨在の場所であり、祈りの家でした。神殿では犠牲のいけにえがささげられて罪が贖われ、神の民としての祝福を受けることができました。けれども、ソロモンの死後、国は南北に分裂し、北イスラエル王国はベテルとダンで礼拝し、南ユダ王国だけがエルサレム神殿で礼拝することになりました。そして、BC586年にバビロン軍により神殿は破壊され、民はバビロン捕囚となりました。その後、捕囚から帰還したゼルバベルが第2神殿を建設し、その神殿はBC37年にローマ軍によって破壊されました。その後ヘロデによって第3神殿が建設され、この神殿もAD70年にローマ軍によって破壊され、ユダヤ人は離散の民となり、それ以降神殿はなくなりました。現在エルサレムにある嘆きの壁は第3神殿の時のものです。

3. 王宮と各地の町の建設 I 列王 7 : 1、9 : 15、10 : 14、15、12 : 4

神殿建設の後も、ソロモンによる建設ラッシュは続きました。ソロモンは自分の王宮を13年かけて作りました。また、各地に町を建設しました。そのために、多くの労働力と費用が必要になり、民に苦役と重税を課しました。また多くの建築資材を提供したツロの王ヒラムに代金を支払いきれなくなりました。そのような中で、民に不満がたまり、ソロモンに敵対する者が起こりました。北イスラエル王国初代の王となるヤロブアムもその一人です。栄華を窮めたソロモンの国造りの背後には、民に対する王の圧政があり、そのためソロモンに対する不満が膨らみ、国の一致を損なう結果となってしまったのです。

4. 主への不信仰 I 列王 11 : 1-6

ソロモンが主の祝福を失った決定的な原因は、彼の女性関係でした。ソロモンは正妻としてエジプトの王パロの娘を迎えました。このことはエジプトがイスラエルを偉大な国と認めた証しであり、エジプトとイスラエルが平和を築くための政略結婚でした。この結婚がうまくいったので、ソロモンは次々に近隣諸国から妻やそばめを召し入れ、ついには700人の妻と300人のそばめを持つようになりました。そして、彼女たちがソロモンの心を異教の神々に向けさせ、ソロモンは偶像礼拝をするようになってしまったのです。主は、ご自分に従い通さなかったソロモンに対して、彼の死後、王国を分裂させると告げました。ダビデは罪を犯しながらも、悔い改め続け、最後まで主に従い通しました。一方、ソロモンは最後には主から離れていったのです。このことは私たちにとっての反面教師として、心に留めなければなりません。何があっても最後まで主に従い通すことを、主は願っておられるのです。

3.1 レハブアムとヤロブアム

1. 王国分裂の預言 I 列王 11 : 29 - 33

ソロモンの家来のヤロブアムのところに、預言者アヒヤがやって来ました。そして自分の外套を 12 切れに引き裂き、ヤロブアムに 10 切れ取るように言いました。そしてアヒヤは、ソロモンから 10 部族を引き裂きヤロブアムに与え、ソロモンには 1 部族だけが残ると言い、ソロモンの死後、王国が分裂することを預言したのです。その理由は、ソロモンが偶像を拝み、主に従わなかったからです。そのことが、ソロモンの耳に入ると、ソロモンはヤロブアムを殺そうとしました。けれども、ヤロブアムはエジプトに逃れ、ソロモンが死ぬまでエジプトにいました。

2. 王国分裂 I 列王 12 : 1 - 5、14 - 15、20

ソロモンの死後、彼の息子レハブアムが王となりました。その時、ソロモン王に反感を持っていた民が、エジプトからヤロブアムを呼び寄せました。そして、ヤロブアムをリーダーに立てて、レハブアムに対して、ソロモンが民に課した重労働と重税を軽くしてくれるなら、続けてレハブアムに仕えろと伝えました。レハブアムは3日の猶予を求め、まずソロモンの長老たちに相談すると、彼らは民のくびきを軽くするようにと助言しました。けれども、レハブアムは長老たちの助言を退け、彼の同世代の若者たちの助言に従い、今以上にくびきを重くするとヤロブアムたちに伝えました。その結果、イスラエルの北10部族はレハブアムに仕えることをやめ、ヤロブアムを王に立てて、北イスラエル王国を建てました。そして、ユダ族(ベニヤミン族も含む)だけがレハブアム王に仕え、南ユダ王国を建てました。こうして、預言者アヒヤの預言通り、イスラエル王国は南北に分裂しました。その原因はソロモンの主への不信仰でした。

3. ヤロブアムの罪 I 列王 12 : 26 - 31

ヤロブアムが北王国の王となった時、民がエルサレム神殿に行き、礼拝するようになれば、彼らの心は再びレハブアムに回り、自分を殺すだろうと考えました。そこで彼は、金の子牛を二つ作り、一つをベテルに、もう一つをダンに置きました。そして、これが我々をエジプトから連れ上った神であると民に告げ、もうエルサレムに上る必要はないと言いました。その結果、北王国の民は偶像礼拝をするようになりました。また、レビ族以外の人を祭司に立てて、祭壇でいけにえをささげました。これ以降、北王国の王はすべてヤロブアムの罪の道を歩むようになりました。主は再三北王国に預言者を送り、主に立ち返るようにと伝えますが、王は聞き入れることはしませんでした。その結果、北イスラエル王国は南ユダ王国よりも早く、BC721 年にアッシリアによって滅ぼされました。

4. レハブアムの罪 I 列王 14 : 21 - 26

レハブアムが南ユダ王国の王となると、当初は主に従い、国を安定させ、王位を確立せるために励みました。ところが、彼が強くなるに及んで、主の律法を捨て去り、民も王にならい、罪の道を歩み始めました。民はすべての高い丘の上や青木の下に、偶像の祭壇である高き所や石の柱を立て、またアシェラ像を立てて拝みました。この主への不信の罪の結果、主はエジプトが南王国を攻めるようにされました。エジプト軍はエルサレムを攻めて、主の宮の財宝や王宮の財宝を奪い取りました。けれども預言者がレハブアムとつかさたちに、主を捨てた結果、主もあなたがたを捨ててエジプト軍の手に渡したのだと告げると、彼らは主の前にへりくだりました。その結果、南王国はエジプトに滅ぼされずに済んだのです。(II 歴代 12:1-8)

3.2 エリヤ

1. アハブとイゼベル I 列王 16 : 29 - 33

イスラエルが南北に分裂すると、南王国では主に従う王も出ますが、北王国ではすべての王が主に従いませんでした。そのような中で、主のみこころを伝える預言者の活躍が顕著になりました。北王国の中で霊的に最悪の王がアハブでした。アハブは一方では政治的には国を安定させ、経済的にも繁栄させるという働きをしました。他方、霊的には偶像崇拜を行い、主の預言者を殺す最悪の王でした。アハブはシドン人の王の娘イゼベルを妻にめとりましたが、アハブはイゼベルに影響され、バアルの神を信じるようになりました。さらに、アシェラ像も作り、バアル礼拝をイスラエル中に広め、主の預言者を殺しました。バアルは男神、アシェラは女神で、当時は一緒に信仰されていました。そのような中で、神は預言者エリヤをアハブのもとに遣わし、神のことばを伝えました。

2. 干ばつの預言 I 列王 17 : 1 - 6

神はエリヤをアハブ王のもとに遣わし、「わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられる。私のことばによらなければ、ここ2、3年の間は露も雨も降らないであろう。」と伝えました。この預言は、干ばつを通して主こそまことの神であることをアハブが知るためでした。エリヤの言った通り、イスラエルは干ばつになり、人々は飢饉で苦しみました。その間、神はエリヤをまずケリテ川のほとりで、からすによって養われました。次にシドンのツアレファテのやもめによってエリヤを養われました。シドンはイゼベルの出身地でしたが、ここでやもめの家のかめの粉は尽きず、つぼの油はなくならないという奇跡によって、エリヤも彼女の家族も養われたのです。またやもめの息子が死んだ時、エリヤはその子を生き返らせました。

3. カルメル山での対決 I 列王 18 : 36 - 40

干ばつが起きて3年目に、エリヤは再びアハブに会いに行きました。そして、カルメル山にバアルとアシェラの預言者を集めるように伝えました。そしてエリヤは、カルメル山に集まった人々の前で、バアルの預言者とエリヤがそれぞれたきぎの上に雄牛を載せ、それぞれの神の名を呼び、火をもって答える神がまことの神であると伝えました。初めにバアルの預言者が、バアルの名を呼び求めますが、火は下りませんでした。次にエリヤが主の名を呼び求めると火が下り、たきぎも雄牛も焼き尽くしました。それを見た民はひれ伏して、「主こそ神です。主こそ神です。」と言いました。エリヤはバアルの預言者を捕えると彼らを殺しました。その後、エリヤの祈りに主は答えて、大雨が降り、干ばつは終わりました。

4. エリヤを力づける神 I 列王 19 : 4 - 8

カルメル山の出来事はイゼベルの怒りを買って、イゼベルはエリヤを殺そうとしました。そのことを聞いたエリヤはイゼベルを恐れ、彼女から逃げて、えにしだの木の陰で自分の死を願って、「主よもう十分です。私のいのちを取ってください。」と祈りました。カルメル山での大勝利にもかかわらず、悪の力は衰えを見せない現実を見て、エリヤは燃え尽きてしまったのです。けれども主はエリヤにパンと水と睡眠を与えて力づけ、回復するとホレブの山にエリヤを導き、かすかな細い声でエリヤに語られました。そして、ハザエルに油を注いでアラムの王とし、エフーに油を注いでイスラエルの王とし、エリシャに油を注いで、後継の預言者とするように伝えられました。ハザエルとエフーによってアハブの家は全滅し、エリシャによって主の働きは継続していきました。エリヤはその後も活躍し、エリシャの目の前で、たつまきに乗って生きたまま天に上って行きました。(II 列王 2:11)

3.3 エリシャ

1. エリヤの後継者 II 列王 2 : 9 - 14

エリヤにとって幸いなことはエリシャというすばらしい後継者を得たことです。エリシャはエリヤに外套を掛けられ預言者として召された後、エリヤに仕え、預言者としての訓練を受けました。そして、エリヤが召される前に、エリヤの霊の2つの分け前を願い、エリヤの昇天を見たことにより、その願いはかなえられました。エリシャはその後、様々な奇跡を起こす預言者となりました。まずエリヤの外套でヨルダン川の水を打つと水が両側に分かれ、渴いた地を渡りました。また水質の悪い水源に塩をまき、水を良くしました。聖書に記されている奇跡は、主にモーセの時代、エリヤとエリシャの時代、そしてイエスと使徒の時代の3つの時代に起こっています。

2. 預言者学校の指導者 II 列王 4 : 38 - 41

エリシャの働きの一つに預言者の後進の育成がありました。アハブとイゼベルの死後、預言者たちが再び姿を現す中で、エリシャは預言者学校を作り、後進の指導に当たりました。彼の親身の指導は様々な奇跡となって現れます。まず、預言者の未亡人を助けるために、器に油を満たす奇跡を行い、彼女の家族が生活に困らないようにしました。(4:1-7) また預言者のともがらと食事をする時、かまの中の 毒を麦粉を入れて取り除く奇跡を行い、(4:38-41) 大麦のパン20個と一袋の新穀で百人の預言者が食べて満ち足りる奇跡を行いました。(4:42-44) また預言者学校寄宿舎工事のために森に行き、一人の預言者が斧を水の中に落とした時、エリシャは一本の枝で斧の頭を浮かばせる奇跡を行いました。(6:1-7) エリシャはこのように預言者のともがらと生活を共にしながら、後進の育成にあたったのでした。

3. ナアマン將軍とアラム軍 II 列王 5 : 13, 14, 6 : 17 - 23

エリシャの奇跡の中で有名なのがナアマン將軍のいやしです。ナアマンはアラムの將軍でしたが、ツアラアト(皮膚や物の表面が冒される状態)にかかっていました。ナアマンはエリシャのもとに行きますが、エリシャは彼に会わず、ヨルダン川に7回つかれば治るとだけ告げました。ナアマンはその対応に怒り、帰ろうとしますが、彼のしもべにたしなめられ、エリシャの言ったとおりにすると、彼のからだはいやされました。さて、この出来事の後、イスラエルとアラムは戦闘状態となります。アラムの王はエリシャがイスラエルの王に自分たちの情報を伝えていると知ると、エリシャを捕えるために軍隊を送りました。けれども、エリシャは主に祈り、アラムの兵士を盲目にして、サマリヤに連れて行きました。イスラエルの王はエリシャに彼らを打ちましようかと聞きますが、エリシャは打たずにもてなして送り返すようにと告げ、王はエリシャの助言に従い、彼らをもてなして帰国させました。

4. 王の助言者 II 列王 13 : 14 - 21

アハブとイゼベルの時代に生きたエリヤは、バアル礼拝をする王との対決姿勢を貫きましたが、エリシャは王に対して叱責しつつ、助言も惜しみませんでした。その結果、エリシャは王に信頼される存在となりました。エリシャは約50年間、アハブからヨアシュまでの6人の北王国の王の時代に働きました。エリシャの臨終の際にはヨアシュ王が見舞いに来て、エリシャの上に泣き伏し、「わが父、わが父、イスラエルの戦車と騎兵たち」と叫んだことは、エリシャがいかに王と国にとって重要な存在であったかを示す出来事です。エリシャは最後に、ヨアシュがアラムを3度打つとの預言をして召されました。エリシャの死後、彼の墓に投げ入れられた死者がエリシャの骨に触れると生き返ったという奇跡が起きました。エリシャはエリヤと並んで、北王国で働いた偉大な預言者でした。

3.4 アモス

1. テコアの牧者アモス アモス 1 : 1、7 : 14、15

アモスは北イスラエル王国のヤロブアム2世(Ⅱ列 14:23-29)の時代に、北王国で活躍した預言者です。ヤロブアム2世の時代、北イスラエルは非常に繁栄し、外国からの侵略もなく、領土も拡大しました。しかし、豊かさを楽しんだのは一部の上流階級だけで、民衆は貧しく、圧政に苦しみ、虐げられていました。また、道徳は乱れ、社会悪は増大し、偶像礼拝が行われていました。この北王国に主が遣わされたのがアモスです。アモスは南王国テコアの出身の牧者であり、いちじく桑の木を栽培する農夫でした。彼は元々預言者ではなく、また預言者学校で何らかの教育を受けたわけでもありませんでした。そのようなアモスを主は召され、「行って、わたしの民イスラエルに預言せよ。」と命じられたのでした。アモスは主の召しに答え、イスラエルに行き、神のさばきを語り、悔い改めて主に立ち返るようにと語りました。

2. 三つのそむきの罪、四つのそむきの罪 アモス 2 : 6-8

アモスは北王国に行き、罪に対する神のさばきを宣告しました。1章、2章では、「…の犯した三つのそむきの罪、四つのそむきの罪のために、わたしはその刑罰を取り消さない。」という定式を用いて、まず諸国に対する神のさばきを告げました。ダマスコ、ガザ、ツロ、エドム、アモン、モアブ、ユダに対する神のさばきをイスラエルの民が聞いたとき、彼らはアモスの預言に興味を持ったことでしょう。その時アモスはイスラエルの罪に対する神のさばきを宣告したのです。イスラエルは表面的には栄えていても、内側は罪に満ちていました。彼らは不正を行い、弱い者を虐げ、不品行を行い、主にそむき、偶像礼拝を行っていました。義なる神は、周りの国をさばかれるのと同様に、イスラエルに対しても罪に対するさばきを行われるのです。

3. 主の招き アモス 4 : 11-12、5 : 4-6、24、8 : 11

主がアモスを通して、罪に対するさばきを宣告されたのは、イスラエルが自分の罪に気づき、罪を悔い改めて、主に立ち返るためでした。そこで、アモスは神のさばきの警告と共に神の愛の招きを語りました。イスラエルが飢饉、水不足、疫病、戦争、地震などの災いを経験したのは、災いを経験することを通して、罪を悔い改めて主に立ち返るためでした。けれどもアモスは、「それでも、あなたがたはわたしのもとに帰って来なかった。」との主のことばを伝えました。そして、「あなたはあなたの神に会う備えをせよ。」と悔い改めを迫りました。また「主を求めて生きよ。」「公義を水のように、正義をいつも水の流れる川のように、流れさせよ。」と言って、主を信じ、主の喜ばれる道徳的にも正しい生き方をするようにと伝えました。そして、それでも主のことばを聞かないならば、「主のことばを聞くことのききん」という主のことばを全く聞けなくなるという神のさばきが来ることを伝え、心をかたくなにせず、今主のことばを聞くようにと迫りました。

4. イスラエルの回復 アモス 9 : 8-12

アモスは、主のことばを聞かないイスラエルは滅びると預言するとともに、主はイスラエルを滅ぼし尽すことはなく、最後にはイスラエルを回復させてくださると預言しました。このイスラエルの回復は国としての回復の預言であると同時に、救い主イエスを通しての霊的イスラエルを建て上げる預言でもありました。エルサレム会議の中でイエスの兄弟ヤコブは、アモス 9:11, 12 を引用して、主は救い主イエスを通して新しい霊的イスラエルを築かれたことと、イエスを信じる者はユダヤ人だけでなく異邦人も救われることは神の計画であったことを説明しました。(使徒 15:16-18)アモスの預言は、主イエスの救いと教会の誕生にまで至る預言でした。

35 ホセア

1. 愛の訓練 ホセア 1 : 1 - 3、3 : 1 - 3

ホセアは北イスラエルで活躍した預言者で、ヤロブアム2世の晩年からイスラエル滅亡の直前までの約40年間、預言者として働きました。ヤロブアム2世時代の北王国は、経済的に繁栄した一方で、偶像礼拝が盛んになり、道徳的にも墮落しました。主はまず預言者アモスを遣わし、神の義を語ってイスラエルに悔い改めを迫りました。そして、次にホセアを遣わし、神の愛を語って悔い改めを迫りました。神はホセアを神の愛を伝える預言者とするために、特別な訓練を与えられました。それは、姦淫の女をめとり、彼女の子らを引き取って結婚生活をするのでした。ホセアは主の御声に従い、ゴメルと結婚し、3人の子供を得ました。けれども、ゴメルはホセアを捨てて、他の男のもとへ行ってしまうしました。しかし、ホセアは主の命に従い、ゴメルを買い取り、再び自分の妻としました。ホセアは自分の結婚生活を通して、靈的姦淫を犯し続けるイスラエルに対する神の愛と苦しみを経験し、神の思いをイスラエルに伝えました。

2. 神の愛とイスラエルの罪 ホセア 11 : 1 - 5

神はご自身の選びの民イスラエルを愛されました。そして、エジプトで奴隷となっていた民を救い出し、約束の地カナンに導かれました。それなのに、イスラエルは自分たちを愛する主なる神から離れ、偶像の神を恋い慕い、バアルを礼拝し、靈的姦淫を行うようになりました。また、周囲の敵から国を守るために、主なる神に頼らずアッシリアに頼りました。けれども、神はそうにご自分を裏切るイスラエルをなお愛し続け、彼らの必要を満たし、ご自分のもとに帰るように愛のきずなで彼らを連れ戻そうとされました。それは、ホセアが自分の結婚生活を通して教えられた、背信の者を愛し続ける神の絶対的愛によるものでした。それでもイスラエルは神に立ち返らなかったもので、ついにBC721年にアッシリアによってサマリヤは陥落し、北王国は滅ぼされることになったのです。

3. 主の招き ホセア 5 : 3、4 6 : 1 - 3

神はイスラエルを知り、イスラエルを愛し続けました。けれども、イスラエルは神から離れ、偶像礼拝という靈的姦淫を犯し続けた結果、主なる神を知らない民となってしまいました。彼らは自分たちに対する主の愛も主の恵みも知らず、自分たちに与えられている祝福を他の神々に帰し、偶像を恋い慕ったのです。イスラエルが再び主の愛と恵みを知るためには、主のもとに帰らなければなりません。ホセアは、「さあ、主に立ち返ろう。私達は知ろう。主を知ることとせつに追い求めよう。」とイスラエルに呼びかけ、主の御前に生きるべきことを伝えました。私達が主に帰るなら、主は私達の所に来てくださり、主のすばらしさを知って、靈的祝福の中に生きることができるのです。

4. 悔い改めといやし ホセア 10 : 12、14 : 1 - 4

主に立ち返ることは、主の前に悔い改めることです。悔い改めとは方向転換という意味であり、それはまず言葉によって行われます。「あなたがたはことばを用意して、主に立ち返り、そして言え。『すべての不義を赦して、良いものを受け入れて下さい。』」彼らは偶像礼拝を止め、主なる神のみを信じて生きることを告白しなければなりません。またアッシリアに頼らず、主なる神のみに頼って生きることを告白しなければなりません。そして、次に悔い改めのことばを実践しなければなりません。偶像を捨て去り、アッシリアに頼ることをやめなければなりません。また、道徳的に墮落した生活を改め、「正義の種を蒔き、誠実の実を刈り入れ」なければなりません。しかし、そのように徹底して悔い改めるならば、主はイスラエルの背信を赦し、神の怒りは去り、神の愛に満たされて歩むことができるのです。しかし、残念ながらイスラエルは真の悔い改めを行うことなく、彼らが頼ったアッシリアによって滅ぼされてしまったのです。神は今も私達に真の悔い改めを迫っておられます。

36 ヨナ

1. 主に従わないヨナ ヨナ 1 : 1 - 4, 15 - 17

ヨナはアモスやホセアと共に、北イスラエルのヤロブアム2世の時代に預言者として働きました。Ⅱ列王 14:25 では、ヨナの預言どおりヤロブアム2世はイスラエルの領土を回復したことが記されています。ヨナ書では、主の命によりアッシリアの伝道に遣わされるヨナの姿が記されています。主はアッシリアの首都ニネベに行き、神のこばを伝えるようにとヨナに命じました。けれども、当時アッシリアはイスラエルの敵国であったため、ヨナはアッシリアが救われることを願わず、むしろ滅びることを願っていました。そこでヨナはニネベに行くことを拒み、タルシシュ行きの船に乗り、逃げようとした。しかし、船に乗ってもヨナは神から逃げることはできません。神は嵐を起こし、ヨナは神から逃げている自分が嵐の原因だと言い、嵐の海に投げ込まれてしまいました。あわれみ深い神はヨナのために大きな魚を備え、ヨナを飲み込ませ、ヨナは3日3晩、魚の腹の中にいました。ヨナが魚の腹の中にいた出来事は、イエスの十字架と復活を表す預言的しるしとなりました。(マタイ 12:39-41)

2. 悔い改めるヨナ ヨナ 2 : 1 - 2, 7 - 10

ヨナは魚の腹の中で祈り、悔い改め、主に従う決心をしました。この祈りの中でまず、嵐に会い、海の中でおぼれ死にそうになったのは、自分が神の命にそむき逃げた結果、神の怒りに会ったからであることを告白します。また、この苦しみの中で神に救いを求めた時、神は自分の祈りを聞き、嵐の中から救い出してくださったことを感謝します。そして、自分の罪を悔い改め、主に従う決心を言い表しました。私達もクリスチャンであっても、主に従わず、自分勝手な道を歩むことがあります。そのような時、神は私達の道を矯正するために、時には私達を危機的状況に陥らせることがあります。しかし、それは私達をご自分の子として訓練しておられるのであり、試練からの脱出の道をも備えてくださっています。私達は自分の罪に気づいたら、即刻悔い改め、方向転換して、主の道に従うことが大切なのです。

3. ニネベでの伝道 ヨナ 3 : 1 - 5, 10

主はヨナに再びニネベに行って、主のこばをニネベの人々に伝えるようにと言われました。今度は、ヨナは主の命令に従い、ニネベに行き、「もう40日するとニネベは滅ぼされる。」と主のこばを告げました。すると、ニネベの人々は身分の高い者から低い者まで、王に至るまで、主なる神のこばを信じ、断食をし、悔い改め、悪の道から立ち返るために努力し始めました。神はニネベの人々の悔い改める姿をご覧になり、下すと言っておられた災いを思い直されました。神はどの国の人であっても悔い改める者にはあわれみ深く、その人を救われます。このヨナの異邦人への預言者活動は、本来のイスラエルの民の使命を教えています。旧約時代であっても、神がイスラエルに与えられた使命は、異邦人の光となり、主なるまことの神とそのみこころを異邦人に伝え、世界の人々の救いのために仕えることだったのです。そして、この世界宣教の使命は新約時代において、新しい霊的イスラエルである教会に与えられているのです。

4. 神の愛と救いのご計画 ヨナ 4 : 1 - 4, 10 - 11

神はニネベの人々の悔い改めを喜ばれ、ニネベを滅ぼさずに救われました。けれども、ヨナはそのことを喜ばず、ニネベを救われた神に対して怒りを覚え、自分の死を願いました。それに対して、神はご自分のみこころを教えるために、まず一本のとうごまの木をヨナに備え、日陰を与えられました。次にそのとうごまを枯らし、太陽の光でヨナを衰えさせました。ヨナはとうごまを惜しみ、再び怒り、死を望みました。神はヨナに、「あなたが枯れたとうごまを惜しむなら、まして、わたしは多くの民が住むニネベの人々を惜しまないはずがあるうか」と語り、神はすべての人が救われることを願っておられることを伝えられました。ヨナはこの出来事を通して、すべての人を救おうと願っておられる神の愛のみこころを教えられたのです。そして、神はすべての人の救いのために、御子イエスを遣わし、確かな救いの道を備えられました。私達はイエスの福音を携えて、この世の人々に神によって遣わされていくのです。

37 ヨエル

1. 主の日は近い ヨエル 1 : 4 - 6、13 - 15

預言者ヨエルが活躍した時代について聖書は記していませんが、祭司が国家の中心的役割を果たしていることから、南ユダ王国ヨアシュ王の時代と考えられます。そうすると、ヨエルは聖書を書き記した最初の預言者です。ヨアシュの前の南王国の王たちは主の目の前に悪を行った結果、主は南王国にいなごによる災害をもたらされました。ヨエルはこの災害は主のさばきであり、さらに大きな主のさばきが来る前兆であると語りました。そのさばきとは外国の軍隊による攻撃です。ヨエルは主のさばきの日を「主の日」と呼び、「主の日は近い」と告げて、民に悔い改めを迫りました。実際にヨアシュ王は祭司エホヤダの指導のもと、主の宮を修理し、霊的リバイバルが起きました。しかし、エホヤダが死ぬとヨアシュは主に逆らいました。その結果、ヨエルの預言どおりアラム軍が攻めてきました。ヨアシュの死後、南王国では主に従う王が続きました。(Ⅱ歴代 24:15～)

2. 近い将来のさばきと終末のさばき 2 : 1、10 - 13

ヨエルの主の日の預言は、近い将来の神のさばきと終末の神のさばきが2重写されています。近い将来の外国の軍隊による攻撃を預言するだけでなく、終末のキリスト再臨時の最後の審判の預言となっています。このように、ヨエル以降の預言者は、時代を超えて縦横無尽に近い将来と終末に至るまでの預言を重ね合わせて行いました。イエスがマタイ24:29、30で「これらの日の苦難に続いてすぐに、太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は天から落ち、天の万象は揺り動かされます。その時人の子のしるしが天に現れます。」と語られましたが、それはヨエルの預言と一致します。そして、ヨエルの預言は人の子イエスが再臨される時に起こる事を、イエスは語られたのです。ですから、ヨエルの悔い改めのメッセージは新約時代に生きる私達にも語られていることがわかります。主は悔い改める者にはあわれみ深く、十字架の赦しによってさばきから救ってくださるのです。

3. 聖霊の注ぎ 2 : 28 - 32

ヨエルはさらに、終わりの日の聖霊の注ぎの預言をしました。そして、ヨエルの預言はペンテコステの日に成就しました。イエスの復活50日後のペンテコステの日に、聖霊が弟子達の上に下りました。その時ペテロは聖霊に満たされ、自分たちに何が起こったのかを人々に伝えました。ペテロはヨエル書2:28-32を使徒2:17-21で引用して、終わりの日に聖霊がすべての人に注がれるというヨエルの預言が成就したことを伝えました。聖霊が下られたことは、終末時代に入ったことのしるしでした。そしてイエスが再臨される時に終末時代は終わりを告げ、その後最後の審判が行われます。そして、その間は恵みの時代であり、「主の名を呼ぶ者はみな救われる。」のです。なぜなら、主イエスは私達の罪を負い、十字架で罪の贖いを成し遂げて、よみがえられたからです。

4. 最後の審判と新天新地 3 : 14 - 18

ヨエルは主の日は近いと預言して、近い将来イスラエルに下る主のさばきを預言して、悔い改めを迫りました。ヨエルの預言を通して、祭司エホヤダの指導のもとヨアシュ王は主の道に歩み始めました。しかしエホヤダの死後、ヨアシュは主に逆らい、アラム軍の攻撃を受け、ヨアシュは謀反によって死にました。ヨエルはさらに終末の最後の審判を預言しました。そして、「主の名を呼ぶ者はみな救われる」との預言どおり、主はイエスを信じる者を救い、新天新地における永遠の救いへと導かれます。「主の宮から泉がわき出る」とのヨエル3:18の預言は、その後エゼキエル47章でさらに詳しく語られ、そして黙示録22:1、2のヨハネの見た新天新地において成就します。「御使いはまた、私に水晶のように光るいのちの水の川を見せた。それは神と小羊との御座から出て、都の大通りの中央を流れていた。」新天新地において主の救いは完成します。ヨエルはそこまでの預言をBC830年頃に行ったのです。ここに神のことばの確かさを見ることができます。

38 イザヤ

1. イザヤの召命 イザヤ1：1、6：1－8

イザヤは南ユダ王国で、ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの4人の王の時代に、50年以上預言者として活躍しました。イザヤはエルサレムに住み、神殿や王宮と関係がある生活をしていたと考えられるので、貴族の家の出身と思われます。イザヤはウジヤ王が死んだ年(BC740/739 年)に、預言者としての神の召命を受けました。その時、イザヤは神殿に座しておられる聖なる神の幻を見たので、罪深い自分は死んでしまうと思いました。すると御使いセラフィムが祭壇の燃えさかる炭を取り、イザヤのくちびるに触れたので、イザヤの罪が贖われました。その後、イザヤは「だれを遣わそう。だれがわれわれのために行くだろう。」と言っておられる主の声を聞きました。彼は、「ここに、私がおります。私を遣わしてください。」と答え、預言者として主によって任命されました。

2. 南王国への預言 イザヤ37：5－7、39：5－8、44：26－28

イザヤが書いたイザヤ書は66章からなり、聖書66巻の構造と似ています。前半の39章は旧約の39巻に対応する律法の書であり、後半の27章は新約の27巻に対応する福音の書といえます。イザヤは南王国に対して、将来起こる事を正確に預言しました。ヒゼキヤ王の時、すでに北王国を滅ぼしたアッシリアは南王国にも侵入し、エルサレムを包囲して、降伏を求めてきました。その時イザヤは、アッシリア軍はエルサレムを攻めずに退却すると預言し、そのとおりになりました。その後、ヒゼキヤが病気になると、イザヤは神のいやしを預言し、ヒゼキヤはそのとおりいやされました。しかし、ヒゼキヤは見舞いに来たバビロンの使者に、自分の宝物や武器を全部見せ、バビロンと同盟を結びたいとの思いを現しました。その時イザヤは、神に頼らない南王国はバビロン捕囚になると預言しました。さらには、やがてクロス王が捕囚の民を自由にし、エルサレムは再建されると預言し、そのとおりになりました。

3. 救い主の預言 7：1、9：1、61：1、53：5、6

イザヤ書は旧約の中で最も多く新約に引用されており、救い主の預言に満ちています。そして、その預言はイエス・キリストにおいてすべて成就しました。救い主の処女降誕の預言は、処女マリアが聖霊によってみごもり、イエスを産んだことによって成就しました。(マタイ1:23)イエスがガリラヤ地方で伝道を開始したことによって、異邦人のガリラヤは光栄を受けるというイザヤの預言が成就しました。(マタイ4:14－16)また、イエスがナザレの会堂で、御霊を受ける救い主についてのイザヤの預言を朗読したことによって、イザヤの預言が成就しました。(ルカ4:16－21)そして、イザヤの最大の預言である私達の罪のために死なれる救い主の預言は、イエスが十字架で死なれたことによって成就しました。(I ペテロ2:24)

4. 最後の審判と新天新地の預言 65：17、66：22－24

イザヤは、救い主によって与えられる神の救いは、新天新地において成就することを最後に預言しました。神は、キリストの救いを完成させるために、今の天地を過ぎ去らせ、新しい天と新しい地を創造されるのです。ヨエルもすでに新天新地の預言をしました。イザヤは「新しい天と新しい地」という言葉を使って、黙示録21:1の「新しい天と新しい地」を預言したのです。新天新地においては、主の民が主を礼拝することが最大の祝福であることも預言しました。同時に、最後の審判において、キリストの救いを受けなかった者は、ゲヘナにおいて神のさばきを受けることも預言しました。イエスはイザヤが預言したゲヘナが真実であることを語られました。(マルコ9:48)神はイザヤの預言を通して、今もイエスを信じて、罪を赦され、永遠の救いに至るようにと私達を招いておられます。

39 エレミヤ

1. エレミヤの召命 エレミヤ1：1－8

エレミヤはアナトテの祭司ヒルキヤの子として生まれ、ユダの王ヨシヤの第13年に預言者として召されました。神はエレミヤを、母の胎に宿る前から預言者として聖別し、選んでおられました。そのことを神から告げられた時、エレミヤは最初、自分の若さを理由に躊躇しましたが、神の励ましを受けて、預言者としての神の召命に応じて献身しました。エレミヤの時代、北イスラエル王国はすでに滅んでいました。南ユダ王国のヨシヤは宗教改革を行い、主に立ち返りましたが、その後の王、エホアハズ、エホヤキム、エホヤキン、ゼデキヤは主にそむき、その結果、BC586年にエルサレムはバビロン軍によって陥落し、南王国は滅ぼされて、民は捕囚となってバビロンに連れて行かれました。エレミヤはバビロン捕囚まで約45年間南ユダ王国で預言をしました。

2. バビロン捕囚の預言 エレミヤ25：8－12

エレミヤは、民に救いを伝えるのではなく、滅亡を警告する預言をしました。エレミヤの時代、神のさばきによる南王国の滅亡は刻一刻と近づいていました。それなのに預言者や祭司は「平安がないのに平安だ、平安だ」と言い、偽りのことばを語っていました。(6:13, 14)それに対してエレミヤは、神はバビロンによって南王国を滅ぼし、民は捕囚となって70年間バビロンに仕えたと預言しました。さらには、70年の終わりには神はバビロンをその咎のゆえに滅ぼし、捕囚の民はエルサレムに帰還できると預言しました。(29:10)歴史はエレミヤの預言どおりになりました。第1回目の捕囚の民とされ、バビロンに連れて来られたダニエルは、エレミヤの預言により捕囚の期間が70年であることを知りました。(ダニエル9:2)そして、ペルシャのクロス王まで仕えたダニエルはエレミヤの預言の成就を目撃したのです。

3. エレミヤの預言と迫害 エレミヤ38：2－6

エルサレムの滅亡とバビロン捕囚を預言するエレミヤのことばを、王も預言者も祭司も民も聞こうとはしませんでした。エホヤキム王はエレミヤの書いた巻き物を暖炉の火で焼き尽くしました。(36:23)またゼデキヤ王の時にエレミヤは、バビロン軍の攻撃によってエルサレムは滅びると預言し、その時、この町にとどまる者は滅びるが、降参して捕囚の民となりバビロンに行く者は生きると預言しました。すると首長たちは、エレミヤを偽預言者呼ばわりし、エレミヤを殺すようにと王に進言しました。その結果、エレミヤは王の命令によって、穴の中に投げ込まれました。このようにエレミヤは迫害を受けつつ、涙をもってユダの民に神のことばを語り続けました。エルサレムが陥落すると、エレミヤは主のことばに逆らう民によってエジプトに連れて行かれました。そこでも預言をし、エレミヤはエジプトで死んだと考えられます。

4. 新しい契約 エレミヤ31：31－34

エレミヤは地上では何の報いも受けることができませんでした。けれども、エレミヤの預言は歴史の中で確かに成就していきました。それはバビロン捕囚の預言の成就にとどまらず、キリストの救いに至るまでの預言の成就です。エレミヤは神の救いの計画は、新しい契約によって成就すると預言しました。新しい契約は、民の心の中に律法が書き記され、神は民の神となり、民は神の民とされ、神が民のすべての罪を赦すという契約です。イエスは聖餐式を制定された時、「この杯は、あなたがたのために流されるわたしの血による新しい契約です。」と言われました。(ルカ22:20)エレミヤが預言した新しい契約は、イエス・キリストの十字架の死と復活の救いによって成就したのです。さらには聖霊の内住によって、心の中に律法が書き記されるという預言も成就しました。

40 エゼキエル

1. エゼキエルの召命 エゼキエル 1 : 1 - 3、2 : 1 - 3

エゼキエルは、南ユダ王国エホヤキン王の時代の第2回バビロン捕囚の時(BC597年)、捕囚となってバビロンに連れて来られました。ケバル川のほとりに捕囚の民ユダヤ人の居住地があり、エゼキエルもそこに住みました。エゼキエル30歳の時(第30年)、バビロンに来てから5年目の時にエゼキエルは幻の中で主の栄光を見、預言者としての召命を受けました。神はエゼキエルに神のことばの巻き物を食べるように勧め、エゼキエルはみことばで腹ごしらえをしました。(3:3)また神はエゼキエルに金剛石のような堅い額を与えられました。(3:9)これはどんな困難にも負けない強い心です。このようにして、エゼキエルは神によって預言者として整えられ、預言活動を始めました。同時代のエレミヤはユダヤで預言しましたが、エゼキエルはバビロンで預言をしたのです。エゼキエルの預言の前半はエルサレムと諸外国に対する神のさばきの預言で、後半はイスラエルの回復と新約の救いの預言です。

2. エゼキエルの預言 エゼキエル 8 : 1 - 5

エゼキエルの預言の特徴の一つは、自らの動作をもって預言することです。粘土板でエルサレムの町の模型を作り、鉄なべで攻撃したり、長期間左右一方に身を横たえたり、糞でパンを焼いたりして、南ユダに対する神のさばきを具体的に人々に示しました。(4章)もう一つの預言の特徴は、エゼキエルが神の霊に導かれ、引き上げられて幻を見、その幻を通して人々に預言することです。8章ではエゼキエルは神の霊に引き上げられ、エルサレムの神殿で行われている偶像礼拝の実態を見ました。そして9章では、この偶像礼拝の罪に対する神のさばきがあることを幻によって見ました。但し、神は偶像礼拝を行わない民にはしるしをつけて彼らを救われます。エゼキエルはバビロンの地で、神のさばきによって間もなくエルサレムは崩壊することを預言したのです。

3. イスラエルの回復 エゼキエル 37 : 7 - 12

エゼキエルの預言はその通りになり、BC586年にバビロン軍によってエルサレムは崩壊し、神殿は破壊されました。そして第3回バビロン捕囚によって、ユダヤに残っていた多くの民がバビロンに連れて来られました。すると、神はエゼキエルを通して、イスラエルの回復という希望のメッセージを語られました。37章では、エゼキエルは主の霊によって引き上げられ、多くの干からびた骨を見ました。エゼキエルは神が命じられたとおりに預言すると、骨と骨とがつながり、肉が付き、皮膚がおい、いのちの息が入り、彼らは生き返ったのです。この幻によって、イスラエルは再び国として生き返り、神は民をイスラエルの地に連れ戻すことを預言しました。また、この幻はやがて救い主が来られると、新しい霊的イスラエルが起こされるという新約の救いをも預言しています。

4. 神殿から流れる川 エゼキエル 47 : 6 - 9

エゼキエルは新約の救いの預言もしました。36:26では、神は民に新しい霊を授けると預言し、聖霊が新約の救いの民に与えられることを預言しました。38, 39章では終末時代におけるゴグとマゴグの最後の戦いの預言をしました。(黙示20:8)そして、40章からは新天新地の神殿の幻を見て預言しました。47章では神殿から流れるいのちの水の川の幻を見ます。この川が流れていく所は、あらゆる生物は生きることができます。この預言はイエス・キリストが約束された聖霊が私達に与えられることによってまず成就します。そして、最終的には新天新地における神と小羊イエスの御座から流れ出るいのちの水の川によって成就します。(黙示22:1, 2)このように、エゼキエルは捕囚の地バビロンで、神の霊により自由を与えられ、民に警告し、希望を与え、天国の祝福に至るまで預言しました。

4 1 ダニエル

1. 捕虜からバビロン王に仕える者へ ダニエル 1 : 1 - 3、17 - 21

ダニエルは、BC605年のユダの王エホヤキムの時代の第1回バビロン捕囚の際に、捕囚となってバビロンに連れて来られました。その時ネブカデネザル王は捕囚の民の中から王族か貴族の少年たちを選び、彼らを養育することにしました。その中にダニエル(ベルテシャツアル)、ハナヌヤ(シャデラク)、ミシャエル(メシャク)、アザルヤ(アベデ・ネゴ)がいました。ダニエルは自分たちに出される王の食べ物やぶどう酒が偶像にささげられたものであるので、身を汚すまいと心に定め、身を汚さないようにさせてくれと宦官の長に願いました。宦官は、ダニエルの願いどおり十日間野菜と水だけを与えると、ダニエル達のほうが王のごちそうを食べている者よりも健康であることがわかり、その後も野菜を与えることにしました。そして3年後、4人が王のもとに召されて行くと、彼らは他の者よりも知恵に富むことがわかり、王のしもべとして仕えることになりました。ダニエルは最初から妥協しない信仰を示し、その結果、バビロンの地でも神の祝福を受けて用いられる人になりました。

2. 預言者にしてバビロン全州の長官へ ダニエル 2 : 26 - 28、47 - 49

ネブカデネザル王は、ある時、自分が見た夢とその解き明かしを知らせるようにバビロンの知者達に求めました。けれどもだれも王に伝えることができなかったので、王は知者達すべてを滅ぼす命令を出しました。ダニエルはこのことを知ると、自分が王に夢とその解き明かしを知らせると王の侍従長に伝えました。そして4人で神の助けを祈りました。すると神は祈りに応え、夢とその意味をダニエルに教えました。ダニエルは主をほめたたえた後、王のもとに行き、王が見た夢とその解き明かしを知らせました。夢はバビロニア、メド・ペルシャ、ギリシャ、ローマ、キリストの王国に至る将来に起こる預言でした。王はダニエルの解き明かしに満足し、ダニエルをバビロン全州を治める最高位の長官に任命しました。またダニエルの願いによって、他の三人もバビロン州の官僚に任命しました。ダニエルはこうして預言者でありつつバビロンの最高位につき、王のもことで仕えることになったのです。

3. 獅子の穴から救い出されるダニエル ダニエル 6 : 19 - 24

ネブカデネザル王が死んだ後、王家は混乱し、ダニエルも国家の職から解かれました。ネブカデネザルの孫のベルシャツアル王の時、王が見た人の手によって書かれた文字を解き明かした結果、ダニエルは再びバビロンの第3の権力者となりました。そして、その後のダリヨス王の時も、ダニエルは国家の最高位の3人の大臣の一人となりました。けれども、他の2人の大臣がダニエルをねたみ、ダニエルを失脚させるために、30日間王以外を拝む者は獅子の穴に投げ込まれるとの法律を作りました。ダニエルはその法律のことを知りつつ、いつものように日に三度、エルサレムに向かって神に祈りました。その結果、ダニエルは捕えられ、獅子の穴に投げ込まれました。けれども、神は御使いを送ってダニエルを守られたので、獅子はダニエルに何の危害も与えませんでした。王は非常に喜んでダニエルを穴から出し、代わりにダニエルを訴えた者たちを穴に入れると、獅子は彼らをかみ砕きました。

4. ダニエルの預言 ダニエル 12 : 1 - 4

ダニエルはエレミヤの預言によってバビロン捕囚が70年であることを知りました。(9:2)そして、ダニエルはペルシャのクロス王が捕囚の民を解放し、預言が成就したことをバビロンの地で見届けたのです。神はダニエルに将来起こる事の啓示を与えられました。11章のダニエルの預言は、ペルシャとギリシャの戦い、勇敢な王アレクサンドロス、南の王エジプトのプトレマイオス朝、北の王シリアのセレウコス朝、神殿を汚した卑劣な者アンティオコス・エピファネスと歴史の中で成就しました。そして、12章でダニエルは終末時代の預言をしました。大患難時代の後、復活があり、いのちの書に記されている者はすべて救われます。ダニエルの終末の預言は黙示録でさらにはっきりと啓示されました。私達はダニエルを通して、異教の地で信仰者としていかに生きるべきかを教えられます。

4.2 ゼルバベル

1. エルサレム帰還 エズラ 1 : 1 - 4、7 - 8

バビロニアを滅ぼしたペルシャの王クロスは、BC539年にユダヤ人に対しエルサレムへの帰還を許可しました。その結果、イザヤとエレミヤの預言が成就し、バビロン捕囚は70年で終了しました。翌 BC538年に第1回のエルサレム帰還が行われ、ユダの総督として任命されたゼルバベルがリーダーとなり、約5万人のユダヤ人帰還民を連れてエルサレムに帰ることができました。総督ゼルバベルはクロス王からエルサレム神殿再建の使命を与えられました。バビロニアは支配した民族の宗教を否定し、自国の宗教を強要しましたが、ペルシャは各民族の宗教に対しては寛容であり、国家統一のために各民族の宗教を用いました。総督ゼルバベルはエルサレムに神殿を再建するというユダヤ人にとっての最大の念願をかなえるために、帰還民と共にエルサレムに到着しました。

2. 神殿工事開始と中断 エズラ 3 : 8 - 13、4 : 24

ゼルバベルは大祭司ヨシュアの協力を得て、エルサレム帰還の翌年に神殿再建工事を開始しました。神殿の礎が据えられた時、民は主を賛美して大声で喜び叫びました。しかし、最初の宮を見たことのある多くの老人たちは、感極まって大声を上げて泣きました。工事が始まると、ユダヤ人の敵であるサマリヤ人による妨害が始まりました。彼らは議官を買収して神殿再建計画を打ち壊そうとしました。その結果、神殿工事は中止され、18年間工事は中断されました。その間、ユダヤ人の神殿再建の熱意はいつしか失われ、自分たちの生活を中心とする生き方に戻ってしまいました。また総督ゼルバベルや大祭司ヨシュアの指導に対する疑問や軽視が、民の中に起こりました。ゼルバベルにとっても、この18年間は失意の試練の中にあつたと考えられます。けれども神はゼルバベルを忘れてはおられませんでした。

3. ハガイとゼカリヤの励まし 5 : 1 - 2、ハガイ 1 : 4、8、ゼカリヤ 4 : 6、9

神は総督ゼルバベルと大祭司ヨシュアを励ますために、ハガイとゼカリヤという2人の預言者を遣わしました。ハガイは「この宮が廃墟となっているのに、あなたがただけが板張りの家に住むべき時であろうか。」と問いかけ、「宮を建てよ。そうすれば、わたしはそれを喜び、わたしの栄光を現そう。」と言って励ましました。またゼカリヤは「権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって。」、また「ゼルバベルの手が、この宮の礎を据えた。彼の手がそれを完成する。」との主のことばを告げて、ゼルバベルを励ましました。その結果、ゼルバベルは主の霊によって奮い立ち、ヨシュアも立ち上がり、民も主のことばによって奮い立って、神殿工事が再開されました。

4. 神殿の完成 エズラ 6 : 6 - 10、15

神殿工事が再開されると、サマリヤ人による妨害工作も再開しました。けれどもゼルバベルは、妨害の中でも工事を継続し、サマリヤ人に対して、自分たちはクロス王の命令によって神殿工事を行っていると伝えました。すると、サマリヤ人総督タテナイはダリヨス王に手紙を書き、ゼルバベルの主張が事実かどうか調べてほしいと訴えました。そこでダリヨス王は文書保管書を調べさせるところ、クロス王がエルサレム神殿再建を命じた文書が発見されました。その結果、ダリヨス王は総督タテナイに対し、神殿工事の継続を命じ、さらには神殿工事にかかる費用を支払うように命じたのです。こうして神殿は BC515年に完成しました。神殿奉獻式が行われると、民は喜び祝い、過越のいけにえをささげました。ゼルバベルは、神殿再建という主からの使命を果たした総督として覚えられます。彼は「権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって。」のみことばを体験した人でした。

4.3 エズラとネヘミヤ

1. エズラの帰還 エズラ 7 : 6－10、9 : 1－4

バビロン捕囚からの帰還は全部で3回あり、第1回は BC538 年にゼルバベルの指導のもとで、第2回は BC458 年にエズラの指導のもとで、第3回は BC445 年にネヘミヤの指導のもとで行われました。ゼルバベルによる神殿完成から 58 年後、エズラに率いられて、1500 人の男子とその家族及びレビ人たちが帰って来ました。エズラはモーセの律法に精通した学者であり、ペルシヤのアルタシヤスタ王はエズラの願いをかなえ、エズラのエルサレム帰還を許しました。エズラの帰還の目的は先に帰還したイスラエルの民の信仰の再建でした。ところがエズラがエルサレムに着くと、先に帰還した民は予想以上に墮落し、多くの民と指導者が異邦人と結婚し、神殿礼拝はおろそかにされていました。エズラは民の罪を告白して、涙ながらにとりなし祈りました。

2. 罪の悔い改め エズラ 10 : 1－5、10－12

エズラが悔い改めの祈りをした時、同じ思いを持つ多くの民が集まり、彼らも激しく涙を流しながら、共に悔い改めの祈りをしました。そして、エズラに対して、外国人妻を追放し、罪を悔い改めて、信仰の再建を成し遂げようと申し出ました。この民の協力の申し出に勇気を得たエズラは、立ち上がってイスラエル全集団に対して、罪を悔い改め、外国人妻を追放するようにと語りました。イスラエルの民は、「必ずあなたの言われたとおりにします。」と応答し、民は悔い改めを断行しました。異邦人との結婚は、イスラエルに偶像礼拝とそれに伴う悪を持ち込むことになります。それはイスラエルの歴史を見れば明らかであり、南北イスラエルの滅亡の原因ともなりました。イスラエルが再び神のさばきを受けて滅びることがないようにするためには、徹底した悔い改めが必要だったのです。エズラはそのために霊的指導力を発揮したのです。

3. ネヘミヤの帰還と城壁再建 ネヘミヤ 2 : 5－6、17－20、6 : 15、16

エズラ帰還から 13 年後、ネヘミヤが民と共にエルサレムに帰還しました。きっかけはユダから来た人々がエルサレムの困難な状況をネヘミヤに報告したことです。ネヘミヤはその時、アルタシヤスタ王の献酌官でした。ネヘミヤは神に祈り、王にエルサレムの町を再建したいという願いを伝えました。王はその願いを聞き入れ、ユダの総督として王によって任命されたネヘミヤはエルサレムに帰還しました。エルサレムに着くと、ネヘミヤはさっそくエルサレムの城壁再建工事に取り掛かりました。すると、周りの民からの妨害が起こりました。けれども、ネヘミヤは神に祈りながら、民を励まし続け、仕事を分担して行った結果、何と 52 日間で城壁は完成したのです。これには敵も驚きました。

4. 宗教改革 ネヘミヤ 8 : 8－9、17－18

城壁完成後、エズラとネヘミヤによる宗教改革が行われました。この宗教改革は神のことばの朗読によって行われました。エズラの指導のもと、レビ人たちが民に律法の書をはっきりと読んで説明しました。すると民は神のことばを理解し、罪を示されて悲しみ泣いたのです。その後7日間、民は仮庵の祭りをを行い、毎日律法の書が読まれました。8日目にはきよめの集会を行い、神の律法に従って生きる堅い盟約を結びました。そして、信仰が整えられた後に、城壁の奉献式を行いました。この時の宗教改革は、律法に従って生きるというその後のユダヤ教の原点となりました。エズラとネヘミヤは祈りとみことばによって、民の信仰を建て上げました。私達の信仰も、祈りとみことばによって建て上げられるのです。

44 エステルとモルデカイ

1. エステルが王妃となる エステル 2 : 7-8、16-17

アハシュエロス(クセルクセス)がペルシャの王の時代、王妃ワシュティを罷免した王は、新たな王妃を選ぶために容姿の美しい未婚の娘を全国から集めました。その結果、エステルもシュシャンの城に召されました。エステルの両親が亡くなった時、いどこにあたるモルデカイがエステルを引き取り、自分の娘として育てました。二人はユダヤ人であり、ペルシャで生まれ育ち、モルデカイは王に仕える役人でした。エステルが王宮に連れて行かれたことは、二人が願ったことではありませんでしたが、ここにも神の摂理がありました。エステル記には神の名前は一度も出て来ませんが、神はすべての出来事を背後にあって支配しておられることを教えています。モルデカイはエステルに自分がユダヤ人であることを告げてはならないと命じ、エステルはモルデカイの言葉に従いました。エステルが王のもとに召された時、王はエステルを愛し、ついにエステルを王妃として迎えました。

2. ユダヤ人暗殺計画 エステル 3 : 1-2、12-13、4 : 13-16

アハシュエロス王はハマンをペルシャの宰相とし、王は家来に対して、ハマンの前でひざをかがめてひれ伏すようにと命じました。けれども、モルデカイはハマンにひざをかがめず、ひれ伏そうともしませんでした。モルデカイにとってはこの行為は礼拝行為に当たるので、行わなかったのです。ところが、そのことを怒ったハマンは、モルデカイだけでなく、彼の民族であるユダヤ人を虐殺する計画を立て、王の許可を得ました。その計画を知ったユダヤ人は混乱に陥りました。モルデカイはエステルに対して、王の所に行き、自分の民族のためにあわれみを求めるようにと頼みました。それに対してエステルは、王に召されないで王の所に行く者は、王が金の笏を差し伸ばさない限り、死刑になることを伝えました。モルデカイはエステルに、「あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、この時のためであるかもしれない。」と伝え、エステルは「私は死ななければならないのでしたら、死にます。」と答え、王のところに行くので3日間断食して祈ってほしいと伝えました。

3. エステルの嘆願 エステル 7 : 3-7、10

エステルの願いに応じて、モルデカイはシュシャンにいるユダヤ人と共に3日間断食して神に祈りました。エステルは3日後、いのちがけで王のもとに行くと、王は金の笏を差し伸ばし、その結果、エステルのいのちは守られました。エステルは王に、今日王のために設ける宴会にハマンと共に来てほしいと伝えました。王はその日、ハマンと共にエステルの設けた宴会に行くと、エステルは明日も宴会に来ていただければ、その時に自分の願いを王に伝えたいと言いました。その夜、王はモルデカイが王のいのちを救ったことを知り、翌日、モルデカイに栄誉を与えました。一方エステルは、翌日の宴会で、ハマンが自分と自分の民族を滅ぼそうとしていることを王に伝えました。王はハマンに対して激しく怒り、ハマンがモルデカイのために立てた柱にハマンをかけました。

4. ユダヤ人の勝利 8 : 10-12、9 : 20-22、10 : 3

ハマンの死後、王はモルデカイをペルシャの宰相に任命し、王の指輪を与えました。エステルは再び王にユダヤ人を救ってほしいことを願い、その結果、ユダヤ人は自分たちの敵を逆に滅ぼしてもよいとの王の命令を全国に送ることが許されました。ユダヤ人は定められた日に、敵を滅ぼし、それを記念して、毎年その日にプリム祭を祝うことになりました。ペルシャ王国でユダヤ人が生き残ることができたのは、主に信頼した信仰者エステルとモルデカイの活躍がありました。モルデカイは先に活躍したダニエルと同様、主に信頼する信仰に堅く立ちながら、異国の地ペルシャ王国の指導者として活躍しました。私たちも主に信頼しながら、主の民とこの世の人々のために生きることをエステルとモルデカイを通して教えられます。

45 マラキ

1. 神の愛 マラキ 1 : 1 - 3

マラキは、旧約聖書の最後の預言者として、旧約時代を閉じる役目を果たした人物です。マラキの活躍した時代は、エズラとネヘミヤの宗教改革(BC458～432年)が行われる少し前の BC460～450年頃と考えられます。マラキの時代、すでに神殿は BC515年に完成していましたが、民が期待するような目に見える祝福がなかったため、民は再び不信仰に陥っていました。そのようなイスラエルに対して、神はマラキを遣わして、神に立ち返るようにと語られたのです。神はまず、「わたしはあなたがたを愛している。」と語られますが、民は神の愛を疑い、「どのように、あなたが私たちを愛されたのですか。」と問い返しました。それに対して神は、「わたしはヤコブを愛した。」と言われました。ヤコブとは別名イスラエルであり、イスラエルの先祖です。神はなぜ長男のエサウではなく、押しのける者、欺く者であるヤコブを愛されたのでしょうか。それはヤコブのうちに愛され、選ばれる理由があったのではなく、神の特別な恵みによって選ばれ、愛されたのでした。その同じ理由で神はヤコブの子孫イスラエルの民を神の絶対的な恵みによって愛しておられるのです。イスラエルはその神の絶対的な恵みの愛を知らなければなりませんでした。

2. イスラエルの罪 マラキ 1 : 6 - 8, 2 : 13 - 17

神はイスラエルの罪を次々と指摘されました。けれども、民は自分たちの罪に気づかず、神に食って掛かるのです。まず祭司たちは、神へのささげものとして、盲目の獣や足のなえたものや病気の動物をささげました。そのような動物は、エルサレムを治めるペルシャの総督に差し出すことも無礼なのに、まして神に差し出すことがどんなに大きな罪であるかとマラキは伝えました。また民の中には、経済的利益のために自分の妻と離婚し、異邦人の妻をめとる者も多くいました。それがどんなに神のみこころを悲しませる罪であるかをマラキは伝えました。また、悪を行っても神はさばかれず、悪を行う者が栄えているから、悪を行ってもよいのだと主張しました。「どのようにして、私たちは煩わしたのか。」この主への問いかけは、民の罪に対する無自覚、無感覚な状態を表しています。罪を認めない罪深さと神への不信仰が、民の中に蔓延していたのです。

3. 悔い改めの勧め 3 : 7 - 10

神は罪を認めようとしない民に対して、あきらめることなくマラキを通して、罪を悔い改めて神に立ち返るように語り続けました。神は「わたしのところに帰れ。そうすれば、わたしもあなたがたのところに帰ろう。」と言われました。それに対して民は、「どのようにして、私たちは帰ろうか。」と答えます。すると神は、「あなたがたはわたしのものを盗んでいる。」と言われ、所得の十分の一を神にささげるという律法の教えを破ることは、神のものを盗む罪を犯していることになることと告げられました。そして、その罪を悔い改め、十分の一を神にささげることによって、神に帰れと勧めるのです。そして、悔い改めて、神のことばに従う者を、神は大いに祝福してくださると告げられます。十分の一献金の祝福は旧約時代のみならず、新約時代にも当てはまるものです。イエスも十分の一献金をおろそかにしてはいけないことを教えられました。(マタイ23:23)

4. エリヤと主の到来 3 : 1 - 2, 4 : 5 - 6

マラキは旧約時代の終わりに当たり、新約時代到来の預言をして、新約時代を待ち望みました。まず、主の道を整える使者である預言者エリヤの到来を預言しました。この預言はバプテスマのヨハネの到来によって成就しました。イエスはマタイ11:14で、マラキが預言したエリヤはバプテスマのヨハネのことであると言われました。バプテスマのヨハネは主イエス・キリストが来られる前に、罪の悔い改めを伝えて主の道備えをしました。そして、旧約の預言どおり、主が来られたのです。「あなたがたが尋ね求めている主が、突然、その神殿に来る。」そして主の来臨は、悔い改める者には救いであり、ますますきよめられるが、悔い改めない者にはさばきであることが告げられます。マラキはさながら、バプテスマのヨハネのように、新約の道備えをする預言者として活躍しました。

4 6 バプテスマのヨハネ

1. 悔い改めのバプテスマ ルカ 3 : 1 - 8

バプテスマのヨハネは、救い主イエスの道備えをする者として荒野に現れました。彼の父は祭司ザカリヤ、母はエリサベツで二人とも神の御前で正しい者でした。神は年老いた二人に、「エリヤの霊と力で主の前ぶれをし、整えられた民を主のために用意する」という使命を帯びたヨハネを与えられました。ヨハネに神のことばが下った時、ヨハネはヨルダン川のほとりに行き、罪が赦されるための悔い改めのバプテスマを説きました。彼は、群衆に「まむしのすえたち」と語りかけ、彼らの罪を徹底的に指摘し、罪を悔い改めて、悔い改めにふさわしい実を結ぶようにと説きました。そして、悔い改めの証しとしてバプテスマを受け、もうすぐ来られる救い主を待ち望むように教えました。ヨハネは、ラクダの毛の着物を着、腰には皮の帯を締め、いなごと野蜜を食べて荒野で過ごしました。(マタイ 3:4) その姿はエリヤを思わせるものでした。

2. ヨハネのへりくだり ヨハネ 1 : 19 - 27

多くの群衆がヨハネの所に来て、悔い改めのバプテスマを受けるようになると、エルサレムのパリサイ人は使者を遣わして、ヨハネがキリストかどうかを確かめようとなりました。ヨハネは即座に「私はキリストではありません。」と断言しました。さらにエリヤでもなければ、偉大な預言者でもないと言いました。そして、「私は預言者イザヤが言ったように『主の道をまっすぐにせよ。』と荒野で叫んでいる者の声です。」と語りました。さらに、「私は後から来られるキリストの靴のひもを解く値うちもありません。」と言って、へりくだりました。そして、キリストが現れると、「あの方は盛んになり私はおとろえなければなりません。」(ヨハネ 3:30)と言って、徹底的に主の前でへりくだりました。イエスは、そのようなヨハネについて、「預言者よりもすぐれた者」「女から生まれた者で一番すぐれた者」「きたるべきエリヤ」と言って、ヨハネの偉大さを語られました。(マタイ 11:9-14)

3. キリストを信じ、証しする ヨハネ 1 : 29 - 34

イエスはヨハネの所に行き、ヨハネからバプテスマを受けられました。(マタイ 3:13-17) その時、聖霊がイエスにとどまりました。ヨハネは神から「聖霊がある方の上の下って、その上にとどまられるのがあなたに見えたなら、その方こそ、聖霊によってバプテスマを授ける方である。」との啓示を受けていました。そこで、ヨハネはイエスが神の子であると確信しました。そして、次にイエスが自分の所に来られた時、ヨハネはイエスを見て、「見よ。世の罪を取り除く神の小羊。」と人々の前で証言しました。ヨハネはイエスが、イザヤが預言した「ほふり場に引かれていく小羊のように、私たちのそむきの罪のために刺し通され、砕かれ」て世の罪を取り除く、神の小羊、救い主であることを語りました。ヨハネの水のバプテスマは、イエスの聖霊によるバプテスマによって完成します。なぜなら、イエスの聖霊によるバプテスマは、イエスの十字架の死によって成就する罪の贖いの結果、授けられるものだからです。ヨハネは自らイエスをキリストと信じ、人々にイエスを証したのです。

4. ヨハネの殉教 マルコ 6 : 14 - 18

ヨハネは、だれに対しても罪を指摘し、悔い改めを迫りました。そして、ヘロデ王に対しても罪の悔い改めを迫りました。ヘロデ王とは、幼子イエスを殺そうとしたヘロデ大王の息子のヘロデ・アンティパスのことで、ガリラヤの国主でした。ヘロデは、自分の妻と離婚し、自分の兄の妻であるヘロデヤと結婚したため、ヨハネはそれは律法に違反する罪であるとヘロデに言い張ったのです。そこでヘロデはヨハネを捕え、牢につないだのですが、ヨハネが正しい聖なる人であると知って、牢の中でも保護を加えていました。ところがヘロデヤはヨハネを憎み、祝宴の機会に、娘を通してヨハネの首を求め、その結果、ヨハネは殉教したのです。ヨハネは忠実な神のしもべとして、誰をも恐れず、ただ神のみを恐れ、主イエスの道備えをするという神からの使命を果たし切ったのです。

47 イエスの母マリヤ

1. 神への信仰 ルカ 1 : 28 - 38

御使いガブリエルが、ガリラヤのナザレに住むマリヤに現れ、受胎告知をしました。マリヤは御使いのことばにひどく戸惑いました。なぜなら、その時、彼女は大工のヨセフのいいなずけであり、まだ結婚をしていなかったからです。けれども御使いはマリヤに、聖霊によって神の子救い主を宿したことを知らせ、「神にとって不可能なことは一つもありません。」と伝えました。するとマリヤは、「本当に私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」と答えました。このマリヤの応答に、マリヤの神への信仰が表されています。マリヤの信仰は、全能の神を信じる信仰、みことばを信じる信仰、神の前にへりくだり、神に従う信仰、神にゆだねる信仰です。当時未婚の女性が妊娠すると、石打ちの刑になる可能性もありました。実際、ヨセフは当初、マリヤをさらし者にしないために、内密に去らせようとしていました。マリヤはこれから起こり得るすべてのことを神にゆだねて、神に従う決断をしたのです。

2. みことばの理解 ルカ 1 : 46 - 55

神を信じ従う決心をしたマリヤを、神は祝福されました。御使いはヨセフにも現れて、マリヤが聖霊によって救い主を宿していることを伝え、ヨセフも神を信じ、マリヤを妻として迎えました。一方、マリヤは受胎告知の後、パプテスマのヨハネを宿すエリサベツの所に行きました。エリサベツは聖霊に満たされ、「私の主の母が来られた。」と言い、胎内の子は喜び踊りました。そして、「主によって語られたことは必ず実現すると信じ切った人は、なんと幸いなことでしょう。」と言って、マリヤの信仰を祝福しました。それを受けてマリヤは、マリヤの賛歌と呼ばれる主への賛美を語りました。この賛歌を見ると、マリヤの信仰がみことばの理解に基づくものであることがわかります。マリヤは普通の少女として、旧約聖書を学んだことでしょう。けれども彼女は、みことばをよく理解して、神への信仰をはぐみ成長したのです。そして、みことばの理解に基づいて、自分の身に起こったことを喜び、「わが救い主なる神」をほめたたえたのでした。

3. 思慮深さ ルカ 2 : 17 - 20、48 - 51

マリヤは、イエスを育てながら、特別な神の恵みを経験し、時には自分の理解をはるかに超える出来事も経験しました。マリヤはヨセフと共に、住民登録のためにベツレヘムに行った時、泊まる宿がなく、家畜小屋でイエスを出産しました。けれどもマリヤは、その夜、イエスに会いに来た羊飼いや達から、天の軍勢が夜空に現れ、救い主の誕生をほめたたえたことを聞きました。その時マリヤは「これらのことをすべて心に留めて、思いを巡らし」たのでした。また、イエスが12歳の時、エルサレムで迷子になる出来事が起きました。両親が神殿でイエスを見つけると、イエスは「わたしが必ず自分の父の家にいることをご存じなかったのですか。」と言いました。マリヤはイエスの言葉の意味が理解できませんでしたが、「これらのことをみな心に留めておいた」のでした。マリヤは、今わからなくても、後でわかることもあると考え、思慮深くイエスに起こることを心に留めて、イエスと共に歩いたのでした。

4. イエスの弟子 ヨハネ 19 : 25 - 27、使徒 1 : 14

マリヤにとって一番つらかった出来事は、イエスの十字架刑でした。自分が腹を痛めて産み、育て愛したイエスは、救い主として人類の罪を贖うために、十字架で死ななければなりません。マリヤは十字架にはりつけにされたイエスのそばに、他の女性とヨハネと共に立っていました。その時イエスは、悲しみの中にいるマリヤを気遣い、マリヤとヨハネに声をかけ、ヨハネがマリヤを引き取って世話をするようにと伝えました。マリヤが最後に聖書に出てくるのは、イエスの昇天後、弟子たちと共に祈りに専念している箇所です。マリヤもイエスの復活に出会い、悲しみは喜びに変えられたことでしょう。そして、マリヤもイエスの弟子として、聖霊を待ち望み、エルサレムで弟子たちと祈りに専念したのです。マリヤはその後も、一人のイエスの弟子として、また復活の証人として、初代教会で信仰生活を、主にある兄弟姉妹と共に歩んだことでしょう。

48 ペテロ

1. ペテロの召命 マタイ 4 : 18 - 23

シモン・ペテロがイエスに最初に出会ったのは、彼の兄弟アンデレが、彼をイエスのもとに連れて行ったときでした。その時イエスはシモンにペテロ（ヘブル語でケパ、岩の意味）という名を与えられました。（ヨハネ1:40-42）その後、ガリラヤに戻った二人は、漁師だったので湖で網を打っていました。すると、そこにイエスが来られたのでした。イエスは彼らに、「わたしについて来なさい。あなたがたを人間を取る漁師にしてあげよう。」と言うと、彼らはすぐに網を捨てて従いました。その後、漁師のヤコブとヨハネにもイエスは声をかけられ、彼らもイエスに従いました。やがてイエスは、ご自分の弟子の中から12人を使徒として選ばれました。ペテロの名はいつも十二使徒のリストの筆頭にあり、積極的なペテロは使徒の中でリーダー格でした。（マタイ10:2-4）ペテロは他の使徒たちと共にイエスに従い、イエスと行動を共にし、イエスの教えを聞いて学びました。

2. ペテロの告白 マタイ 16 : 15 - 23

ある時、イエスは弟子たちに、「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」と聞きました。するとペテロが、「あなたは生ける神の御子キリストです。」と答えました。イエスは、そのように答えたペテロを幸いだと言い、さらに、「あなたはペテロです。私はこの岩の上にわたしの教会を建てます。わたしは、あなたに天の御国のかぎを上げます。」と言われました。教会の土台となる岩とは、ペテロが告白した神の御子キリストご自身であり、御国のかぎとは信じる者を救うキリストの福音です。イエスはその直後に、最初の受難予告をされました。ところがペテロはイエスが殺されることなど受け入れることができず、イエスの受難を否定しました。するとイエスはペテロに対して、「下がれ、サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。」と厳しく戒められました。ペテロはまだ自分が行ったイエスに対する信仰告白の意味を十分理解していなかったのです。けれども、その6日後、イエスは、ペテロとヤコブとヨハネに、神の御子としての栄光の姿を見せて、ペテロの告白が真理であることを示されたのでした。

3. つまずきと回復 マタイ 26 : 69 - 75、ヨハネ 21 : 15 - 18

ペテロは、自信過剰で先走って失敗をすることがありました。そのような中でも最大の失敗は、イエスを3度も否定してしまったことでした。イエスはペテロに前もって、「今夜、鶏が鳴く前に、あなたは3度わたしを知らないと言います。」と伝えると、ペテロは自分は決してつまずかないと答えました。ところが、いざイエスが捕えられると、ペテロは3度もイエスを知らないと言い、その直後に鶏が鳴いたのです。ペテロはイエスのことばを思い出し、激しく泣きました。ペテロの自信は粉々に砕かれ、失意の中でイエスの十字架の死に直面したのです。けれどもイエスは3日目によみがえり、ペテロにも現れてくださいました。そして、ペテロを立ち直らせるために、ペテロに3度、「あなたはわたしを愛しますか。」と聞かれ、ペテロも「私があなたを愛することは、あなたをご存知です。」と3度答えて、イエスへの愛を告白しました。イエスはそのようなペテロを、教会の牧者に任じました。

4. 初代教会の指導者 使徒 2 : 36 - 42

ペンテコステの日に、聖霊が弟子達に下られた時、ペテロは聖霊に満たされて、十字架で死によみがえられたイエスこそ主であり、救い主であることを宣べ伝えました。その結果、その日3千人の人が、罪を悔い改めてイエスを信じ、バプテスマを受け、エルサレム教会が誕生したのでした。ペテロはその後も教会の指導者として働き、迫害にあっても恐れることなく、大胆に福音を宣べ伝えました。異邦人伝道への道を開いたのもペテロでした。（使徒10章）そして、異邦人伝道のバトンパウロに渡し、ペテロは主にユダヤ人への伝道に力を尽くしたのでした。ペテロは晩年ローマから第1、第2ペテロの手紙を書きました。その後、ローマで殉教したと考えられます。ペテロは使徒の中でも最も人間性をさらけ出した人でしたが、神の恵みによって全く変えられた人となったのです。

49 ヨハネ

1. ヨハネの召命 マタイ4：21—22、マルコ3：17、ルカ9：51—55

ヨハネ(主は恵み深いの意味)は父ゼベダイ、母サロメの子で、兄はヤコブです。彼らはガリラヤ湖の漁師でした。ある日、ヤコブとヨハネが舟の中で網を繕っていると、イエスが二人をお呼びになりました。彼らはイエスの招きにすぐに従い、同じ漁師出身のペテロとアンデレと共に、最初のイエスの弟子となりました。イエスはヤコブとヨハネにボアネルゲ、雷の子という名を付けました。それは二人が激しい気性の持ち主であり、短気で荒っぽいところがあったからです。イエスがエルサレムに向かう途中、サマリヤに寄られました。その時、サマリヤ人がイエスを受け入れなかったので、ヤコブとヨハネが怒って、「主よ。私たちが天から火を呼び下して、彼らを焼き滅ぼしましょうか。」と言いました。イエスはそのように怒る二人を戒められました。雷の子はやがて神の恵みによって変えられ、ヨハネは愛の使徒と呼ばれ、ヤコブは十二使徒最初の殉教者となりました。

2. イエスの側近の弟子の一人 マルコ5：36—37、9：2、14：32—33

イエスはペテロとヤコブとヨハネの三人をそば近くに置かれました。三人は他の弟子達が見ることのできなかった主のみわざと栄光を見ることが許されました。会堂管理者の娘が死んだ時、イエスは三人の弟子だけを伴って、少女を生き返らせました。また、イエスはペテロとヤコブとヨハネだけを連れて高い山に登り、神の子としての栄光の姿を現されました。また、ゲッセマネの園での祈りの時、イエスは三人だけを連れて、祈られました。この時イエスは、三人にご自分の苦しみを伝え、祈りを共にしてほしいかったです。けれども、三人は眠ってしまいました。ヨハネはIヨハネ1：1で「私たちが聞いたもの、目で見たもの、じっと見、また手で触ったもの、すなわち、いのちのことばについて」と言っていますが、それはヨハネがイエスの側近として、イエスを身近に見たこと、聞いたことを証言しているのです。

3. イエスが愛された弟子 ヨハネ13：23、19：26—27、20：2、21：7

ヨハネは、ヨハネの福音書、ヨハネの手紙I、II、III、ヨハネの黙示録を書き記しました。福音書ではヨハネは自分のことを「イエスが愛された弟子」と言っています。最後の晩餐の時、ヨハネはイエスの右隣の席に座り、イエスのことばと行動を目の当りにして、福音書に記しています。ヨハネはイエスが十字架に付けられた時もそばにいて、イエスから、イエスの母マリヤを引き取って世話をするようにと依頼されました。また、イエスの復活の朝、ペテロとヨハネがイエスの墓に走っていき、イエスの墓がからであることを確認しました。復活のイエスがガリラヤ湖に来られた時、最初にイエスに気づいたのはヨハネでした。ヨハネは十字架に現されたイエスの愛を深く覚え、「ここに愛があるのです」(Iヨハネ4：10)と証言し、自らをイエスに愛された弟子と告白したのでした。

4. 初代教会の指導者 使徒4：1—4、19—20、黙示1：9—10

ヨハネはペンテコステの後、ペテロと共にエルサレム教会の指導者として働きました。ペテロとヨハネはイエスの復活を宣べ伝えた結果、弟子たちの中で最初に捕えられました。宗教指導者たちは、彼らが無学な普通の人であることに驚きつつ、イエスの名によって語ってはならないと命じました。しかし、二人は「私たちは自分の見たこと、また聞いたことを、話さないわけにはいきません。」と答え、大胆に福音を宣べ伝えたのでした。ヨハネはその後エペソに移り、エペソの教会の指導者となり、三つの手紙をエペソから書きました。その後、彼は捕えられ、パトモス島に島流しになりました。そして、そこで幻を見、黙示録を書き記しました。使徒の中でヨハネだけが殉教せず、島流しの迫害の中でも、諸教会をみことばをもって励まし続けたのです。ヨハネが書き記した聖書の最後のことは、「主イエスの恵みがすべての者とともにあるように。アーメン。」です。

50 マタイ

1. マタイの召命 マタイ 9 : 9、マルコ 2 : 14、ルカ 5 : 27、28

マタイは取税人として、収税所で税を取り立てる仕事をしていました。マルコとルカの福音書では、レビという名で記されていますが、マタイと同一人物です。マタイは自らのことを「神の賜物」を意味するマタイの名を好んだと考えられます。取税人はローマ帝国に納める税金を同胞ユダヤ人から取り立て、さらには税金以上の金額を取り立てて私腹を肥やしていたので、ユダヤ人から嫌われ、罪人扱いされていました。けれども、取税人たちは金もうけのために、人々の非難を受けつつも、仕事にいいそんでいたのです。しかしマタイは、金持ちになっても、心が満たされない思いで、悶々としていたのではないのでしょうか。またイエスの話をすでに聞いて、心が引かれていたのかもしれませんが。そんな時、なんと収税所にイエスが現れ、マタイに対して、「わたしについて来なさい。」と言われたのです。その時、マタイはこのイエスこそ自分の心を満たしてくださるお方と信じ、何もかも捨てて、イエスに従ったのでした。この時から、マタイにとっての新しい人生が始まりました。

2. マタイの家での祝宴 マタイ 9 : 10-13

イエスの弟子となった時、マタイはすぐに自分の家にイエスを招き、喜びの祝宴を開きました。マタイはイエスの弟子とされたことを心から喜び、イエスへの感謝とともに、自分の仲間にもイエスを紹介したかったのです。そこで、マタイの家には取税人や罪人と呼ばれて人々から嫌われている人が大勢集まりました。イエスはその人たちと喜んで食事を共にしたのです。ところが、それを見ていたパリサイ人たちが、取税人や罪人と食事をするイエスを非難しました。するとイエスは彼らに言いました。「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。…わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」イエスは罪人を救うために世に来られた救い主です。マタイは、罪深い自分を弟子としてくださったイエスの恵みを覚えながら、喜びの祝宴を持ち、友人たちにもイエスを紹介したのでした。

3. 十二使徒の一員 マタイ 10 : 2-4、ルカ 18 : 9-14

マタイはイエスの弟子となったばかりか、十二使徒の一員に選ばれました。マルコとルカの福音書では十二使徒のリストに「マタイ」と記していますが、マタイの福音書では「取税人マタイ」と記しています。これはマタイが、イエスの弟子になる前は、取税人としていかに罪深い人間であったかを覚え、使徒とされたのはただイエスの恵みと十字架の救いによることを証しているのです。ルカ18章のイエスのたとえの中で、自分を義人だと自任するパリサイ人が罪とされ、自分の罪を深く自覚し、神のあわれみを願った取税人が義と認められました。マタイは主の十字架の赦しを体験し、「今あるはただ神の恵み」と覚え、取税人マタイと自らのことを書き記して、へりくだって主に仕えたのでした。

4. マタイの福音書 マタイ 28 : 18-20

聖書はマタイについては、イエスの昇天後、他の弟子達と祈っていたことが最後の記述となり、その後のことは記されていません。伝承によると、マタイはユダヤ人伝道の後、異邦人伝道に向かい、最後に殉教したと記されています。彼の伝道と共に、マタイの最大の貢献はマタイの福音書を書き記したことです。マタイの福音書は直接的にはユダヤ人を対象に書かれたため、旧約聖書を多く引用し、イエスが旧約の預言の成就としての救い主であることを強調しています。イエスの系図から始まるこの福音書は、旧約と新約を結ぶ橋渡しとなっています。取税人としての経験を活かし、マタイの福音書では、金銭勘定に関することが細かく記されています。また、イエスの教えを強調して書き記しています。マタイは「あらゆる国の人々を弟子としなさい。」とのイエスの大宣教命令に従い、自ら異邦人伝道に向かって行ったのでした。そして、「見よ。わたしは世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」と言われるイエスの約束を自ら経験したのでした。

5 1 マルコ

1. マルコと呼ばれるヨハネ 使徒 12 : 12 - 17

マルコ(使徒15:39)はヨハネ(使徒13:5)とも呼ばれ、使徒12:12ではマルコと呼ばれるヨハネと呼ばれます。彼の母はマリヤで、エルサレムにある彼女の家はマリヤの家と呼ばれ、教会の集會が行われ、女中もいる大きな家でした。ペテロが捕えられた時には、彼女の家で祈り會が行われていました。マリヤの夫は早く亡くなったと考えられます。マルコは、彼の家に使徒たちやクリスチャンが集まるという信仰的な環境で育ちました。またバルナバはマルコの従兄弟に当たり、バルナバがレビ人なので、マルコも同様に祭司の家系に属していました。マルコを信仰に導いたのはペテロでした。ペテロはマルコのことを「私の子マルコ」と呼んでいます。(Ⅰペテロ5:13)マルコはペテロをはじめ、使徒たちと交わりを持ちながら、信仰をはぐくむことができました。

2. 第1次伝道旅行 使徒 13 : 1 - 5、13

ユダヤで大ききんが起こった時、アンテオケ教会は救援物資をエルサレム教会に送るために、バルナバとパウロを派遣しました。任務を果たしたバルナバとパウロは、マルコを伴ってアンテオケに戻りました。(使徒11:27-30、12:25)その後、アンテオケ教会は聖霊の導きにより、バルナバとパウロを第1次伝道旅行に遣わしました。彼らはマルコを助手として連れて行きました。第1次伝道旅行ではキプロス島から小アジアのテルベまで向かいしました。ところが、キプロス島からペルガに渡った時点で、マルコは一行から離れ、一人エルサレムに帰ってしまったのです。彼が一行から離れた理由は記されていませんが、キプロス伝道が予想以上に大変だったので、これ以上は耐えられないと考えたのではないのでしょうか。マルコはこの時はまだ、伝道旅行に耐えるだけの信仰の成長段階には至っていなかったのです。

3. パウロとバルナバの激しい反目 使徒 15 : 36 - 41

エルサレム會議の後、パウロはバルナバに第2次伝道旅行に行くことを提案しました。その時、バルナバはマルコも一緒に連れて行こうとしました。ところが、パウロは第1次伝道旅行の折、パンフリヤで一行から離れ、一人エルサレムに帰ったマルコを連れて行かない方が良いと考えました。そして二人は激しい反目となり、結局二人は別行動を取ることになり、バルナバはマルコを連れてキプロスに、パウロはシラスを連れて小アジアからヨーロッパに向かいしました。その後の10年間はマルコについて聖書は記していません。けれども10年後、マルコはローマの獄中にいるパウロと共にいます。そして、パウロはマルコをローマからコロサイに送ろうとしています。(コロサイ4:10)またⅡテモテ4:11では、ローマの獄中にいるパウロがテモテに対して、マルコを伴って来てほしいと言い、マルコは私の務めのために役立つ人だと言っています。マルコは10年間でパウロも認める同労者に成長したのです。その後、マルコはペテロと共にローマにいます。Ⅰペテロ5:13ではマルコはペテロと共に小アジア諸教会に伝道したことがわかります。

4. マルコの福音書 マルコ 14 : 50 - 52

マルコの最大の貢献はマルコの福音書を書き記したことです。マルコは使徒ではありませんが、エルサレムにいてイエスを実際に見聞きた人でした。マルコ14:50-51の「ある青年」とはマルコ自身のことと考えられています。また、マルコはペテロに信仰を導かれ、ペテロと共に伝道しました。140年頃の教父パピアスは、マルコはペテロの通訳者として、ペテロと共に伝道し、ペテロから聞いたイエスの生涯を書き記したと言っています。マルコの福音書は直接的には異邦人を対象に書かれているので、旧約聖書の成就を示す引用は1回だけです。文体は単純で、早いテンポで話が展開していきます。またイエスの行動をいきいきと記し、教えは簡潔に記しています。伝承によれば、マルコは最後はエジプトで伝道し、そこで殉教しました。マルコは一度は失敗しましたが、その後バルナバによる訓練を受けながら成長し、忠実な主の弟子として福音を宣べ伝え、福音書を書き記しました。

5.2 ルカ

1. 医者ルカ コロサイ4:14、ピレモン24、Ⅱテモテ4:11

新約聖書でルカの名前が出て来るのは、上記の3か所だけです。パウロはルカを「愛する医者ルカ」と言います。ルカ(ギリシャ語で光の意味)は聖書著者の中で唯一の異邦人です。彼は医者であり、当時の教養人でした。彼は第2次伝道旅行からパウロに同行して伝道し、パウロの殉教まで共にいました。パウロはルカを「私の同労者」と呼び、殉教が間近に迫る2回目のローマでの獄中生活で、「ルカだけは私と共にいます。」と告げています。ルカは医者としてパウロの健康を支えるとともに、主にある同労者として、最後までパウロの宣教を支え、共に働きました。また、パウロの獄中生活の中で、ルカはパウロのもとで、ルカの福音書と使徒の働きを書き上げ、諸教会にイエスの生涯と初代教会の福音宣教の働きを伝えたのでした。

2. 私たち章節 使徒16:10-15

パウロの同労者としてのルカの働きを、使徒の働きの「私たち章節」と呼ばれる箇所から知ることができます。ルカは自らの名前は書き記しませんが、ルカ自身がパウロと同行して伝道していることを、「私たち」を主語として書いている箇所から、知ることができます。「私たち章節」は使徒16:10-17から始まります。第2次伝道旅行でパウロがシラスとテモテを連れて、マケドニアに向かう時、トロアスでルカも一行に加わったことがわかります。また第3次伝道旅行の際は、ルカはピリピでパウロの一行と落ち合い、エルサレムまで行きました。(使徒20:5-15、21:1-18)その後、パウロが捕らわれの身となった時も、カイザリヤからローマまでの船旅に同行し、パウロと行動を共にしました。(使徒27:1-28-16)ルカはパウロと共に異邦人伝道をする中で、神がどのような困難の中にも共にいて、すばらしい救いのわざをなしてくださることを経験することができたのです。

3. ルカの福音書 ルカ1:1-4

ルカは異邦人伝道に従事する中で、異邦人にイエス・キリストが全世界の救い主であることを伝えたいと願い、ルカの福音書を書きました。ルカの福音書と使徒の働きは、ルカ自身が「すべてのことを初めから綿密に調べております」と言っているように、当時の歴史記述の技法を用いて綿密に書かれており、それが「歴史家ルカ」と呼ばれるゆえんです。テオピロは、この福音書を書くためのスポンサーであったと考えられます。また当時の歴史の接点をもって書き記しているので、イエスの生涯や初代教会の歴史的年代を知る助けとなっています。ルカの福音書は、イエスの生涯を順序立てて、最も包括的に書き記しています。また、他の福音書には記されていないイエスのみわざや教えが多く記されています。イエスの救いが強調され、社会的に疎外されている人々に関心を寄せ、イエスの祈りや聖霊の働きが強調されています。「良きサマリヤ人」「放蕩息子」のたとえや取税人ザアカイの回心など、ルカ独自の視点でイエスの福音を書き記しています。

4. 使徒の働き 使徒1:1-8

使徒の働きはルカの福音書の後編となる書物です。ルカは、当時の教会に、教会の起源と成長の歴史を知らせる必要を覚えて、使徒の働きを書きました。この書はイエスの生涯を記す福音書と使徒たちの教えを記す書簡を結ぶ懸け橋となっています。ルカは福音書と同じようにテオピロにこの書を献上する形で書き始めます。そして、イエスの約束通り、聖霊が下られ、使徒たちがイエスの証人となって、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで福音が伝えられていった歴史を書き記しています。使徒の働きは「聖霊の働き」とも呼ばれ、聖霊が使徒たちを用いて、どのように伝道がなされ、教会が誕生し、教会を牧会していったかが記されています。使徒の働きをとおして、私たちも新しい教会の時代に生きていることを確認し、聖霊によって、全世界の福音宣教に遣わされていることを教えられます。

5.3 マグダラのマリヤ

1. イエスに仕える女 ルカ 8 : 1 - 3

イエスと弟子たちには、彼らの生活を支える女たちがいました。彼女たちはイエスによって悪霊や病気を直していただいたことにより、イエスを信じ、心からイエスを愛して、イエスに仕える者となりました。その女たちの中心にいたのが、マグダラのマリヤでした。女たちの名前が記された箇所ほとんどに、マグダラのマリヤの名前が最初に記されていることによって、彼女が女たちを指導していたことがわかります。マグダラはガリラヤ湖に面する村で、マリヤはそこで生まれ育ちました。けれども、彼女は七つの悪霊にとりつかれ、困難な人生を歩んでいました。数字の7は完全数なので、悪霊の働きにより大変重い病にかかっていたと考えられます。イエスはマリヤから七つの悪霊を追い出し、彼女はいやされました。その時以来、マリヤはイエスを信じ、イエスに仕える者となり、主を愛する熱心な信仰によって、他の女たちを指導して、共にイエスに仕えたのでした。

2. イエスの死と埋葬を見守るマリヤ マタイ 27 : 55 - 61

マグダラのマリヤは、イエスの一団と共にエルサレムに向かいました。そしてそこでイエスは捕えられ、裁判を受けて、十字架につけられました。ヨハネ以外の使徒たちが逃げてしまう中で、女たちは十字架につけられたイエスの姿を遠くからじっと見ていました。そして、イエスの苦しみが増し加わる中で、イエスの母マリヤやマグダラのマリヤたちは、十字架の下まで近づいて行ったのです。(ヨハネ19:25)彼女たちはイエスの姿を見て、どんなにつらく悲しんだことでしょうか。やがてイエスの息が絶え、主の母マリヤはヨハネに伴われて去っていきました。けれども、マグダラのマリヤは、アリマタヤのヨセフが自分の墓にイエスを埋葬するところまで付き添い、イエスの墓を確認しました。そして、安息日を律法に従って休み、日曜日の明け方、イエスの墓に急いで行ったのでした。

3. 復活のイエスと最初に会うマリヤ ヨハネ 20 : 11 - 18

マグダラのマリヤは、週の初めの日の日曜日に、朝早くまだ暗いうちにイエスの墓に行きました。すると、墓の入口をふさぐ大きな石が取りのけてありました。マリヤは走ってペテロとヨハネにそのことを告げ、二人はイエスの墓に行って、墓がからであることを確認した後、帰って行きました。(ヨハネ20:1-10)けれども、マリヤは墓のところにたたずみ、泣きながら墓の中をのぞくと、御使いを見ました。さらに、うしろを振り返るとよみがえられたイエスが立っておられました。けれども、マリヤにはイエスであることがわからず、園の管理人だと思ったのです。イエスは「マリヤ」と声をかけられました。マリヤはその時、イエスであることがわかりました。そして、弟子たちのもとに行き、主の復活を告げたのです。マグダラのマリヤはこうして復活のイエスに最初に会うことができたのです。その後、聖書はマグダラのマリヤのことを記していません。彼女はその後も、弟子たちと一緒にいて、祈りに加わり、ペンテコステを経験し、弟子たちを支える復活の証人として歩んだことでしょう。

4. マグダラのマリヤへの誤解 ルカ 7 : 44 - 48

ルカ7:44-48に出てくるイエスの足に香油を塗った罪深い女と、8:2のマグダラのマリヤは別人です。ところが、591年に教皇グレゴリウス一世がこの二人を同一人物とし、さらに七つの悪霊を七つの大罪と解釈しました。その結果、マグダラのマリヤは、もとは娼婦であり、「罪の女」(the Sinner)と呼ばれるようになりました。その彼女が罪を悔い改めイエスに仕える者となった結果、悔い改めた罪人の代表とされ、カトリック教会では更生した娼婦の守護聖人とされました。けれども、このような考えは誤った聖書の解釈によるものです。また、3~4世紀に盛んになった異端の文書には、キリストがマグダラのマリヤを一人の女性として愛したとの記述があり、そのような文書に基づき、イエスがマグダラのマリヤと結婚し、子供もいたとの映画や小説が近年出て来ました。けれども、これは事実と異なる作り話であることを知る必要があります。

5 4 主の兄弟ヤコブ

1. 主の兄弟ヤコブ マタイ 13 : 55—56、ヨハネ 7 : 3—5

イエスには、ヨセフとマリヤの子であるヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダの兄弟と妹たちがいました。ヨセフは先に亡くなったようで、イエスは長男として、父の大工の仕事を継いで、家族を養いました。またヤコブも、イエスに次ぐ年長者として、家族を支えたことでしょう。イエスが30歳になった頃、救い主としての公生涯に入り、家を出て行きました。ところが、イエスの兄弟たちはイエスが神の子救い主であると信じるできませんでした。ある時には、イエスは気が狂ったと思い、イエスの家族がイエスを連れ戻そうとして、イエスの所にやって来ました。イエスの兄弟たちにとっては、イエスと一緒に家で過ごした兄であり、その兄が生ける神の御子キリストであるなど、とうてい信じられなかったのです。

2. エルサレム教会の柱 I コリント 15 : 7、使徒 1 : 14、ガラテヤ 2 : 9

では、ヤコブはどのようにしてイエスを信じることができたのでしょうか。それは、復活のイエスがヤコブに現れたことによってです。ヤコブは復活のイエスとお会いした時に、イエスを主キリストと信じることができたのです。また、ヤコブの証言によって、イエスの兄弟たちもイエスを信じたと考えられます。その結果、イエスの昇天後、約束の聖霊を待ち望んで祈っている弟子たちの中に、イエスの兄弟たちもいました。その中にはユダの手紙を書いたイエスの兄弟ユダもいました。救われて聖霊を受けたヤコブは、その後ペテロやヤコブと共にエルサレム教会の柱として用いられました。パウロが回心後3年経った時、エルサレムに行き、そこで会ったのはペテロと主の兄弟ヤコブだけだったと言っています。ヤコブは回心後、イエスの福音を素早く理解して、教会を導く指導者となったのです。

3. エルサレム会議の議長 使徒 15 : 13—21

49年頃、エルサレム会議と呼ばれる教会史上最初の教会会議が行われました。この会議では、異邦人も割礼を受け、律法を守らなければ救われないと教えるユダヤ主義クリスチャンの主張の是非が論じられました。これは信仰によってのみ人は義と認められるという福音の本質にかかわる重要な問題でした。この会議の議長となったのがヤコブでした。激しい論争の後、ヤコブが福音信仰に立って、会議を取りまとめました。そして、ヤコブがまとめた内容が、会議の決定事項となりました。その内容は、まず人はイエスを信じる信仰によってのみ神の前に義と認められることが確認されました。次にユダヤ人クリスチャンとの交わりのために、異邦人クリスチャンが守るべき事柄が決められました。この決定により、福音の本質を曲げることなく、異邦人クリスチャンとユダヤ人クリスチャンの交わりが保たれました。その後、ヤコブについては、パウロが第3次伝道旅行終了時に、エルサレムでヤコブを訪問したことを最後に記されていません。(使徒21:18)伝承によれば、ヤコブは62年にエルサレムで殉教しました。ヤコブは最後まで、主イエスのしもべとして、主を証しました。

4. ヤコブの手紙 ヤコブ 2 : 20—24

ヤコブは、国外に散らばっているユダヤ人クリスチャンを励ますために、ヤコブの手紙を書きました。当時、ユダヤ人クリスチャンは、様々な問題を抱えていました。その問題の根底には、彼らが信じている信仰どおりに、生活していないことにありました。信仰が生活の中で実践されない結果、試練や罪の誘惑に負け、この世を愛する生活に陥っていたのです。ヤコブはこの誤りを正し、行いのない信仰のむなしさを教え、信仰のとおり生きるようにと教えました。ヤコブはエルサレム会議で自ら示した信仰義認の福音をよく理解していました。その上で、本当の信仰は良い行いの実を結ぶことによって証明されるのであり、行いの伴わない信仰は本物ではないことを教えたのです。私たちも、主を信じる信仰を実生活の中で実践することを通して、信仰を証していきましょう。

55 マルタとマリヤとラザロ

1. どうしても必要なこと ルカ 10 : 38 - 42

マルタとマリヤとラザロは、ベタニヤに住む兄弟で、イエスは彼らの家にたびたび訪れました。イエスが彼らの家に訪れたある日のことです。姉のマルタはイエスを喜んでお迎えし、もてなそうと準備を始めました。ところが、妹のマリヤは姉の手伝いをせず、主の足もとにすわってみことばに聞き入っていました。マルタはマリヤの態度に不満を抱き、その不満をイエスにぶつけ、自分の手伝いをするように妹に言ってくださいと伝えました。その時イエスはマルタに言われました。「マルタ、マルタ。あなたは、いろいろなことを心配して、気を使っています。しかし、どうしても必要なことはわずかです。いや、一つだけです。マリヤはその良いほうを選んだのです。彼女からそれを取り上げてはいけません。」主は奉仕を軽視されたのではなく、みことばを聞くことを後回しにするほど、大事な奉仕はありえないことを教えられたのです。マリヤはみことばを聞くことを第一とする信仰を持っていました。イエスはマルタにも、まずみことばを聞いて、それから奉仕をしてほしいと願われたのです。

2. ラザロの死を悲しむ姉妹 ヨハネ 11 : 21 - 32

ラザロが病に伏せた時、マルタとマリヤはイエスに使いを送ってそのことを伝えました。けれども、イエスはすぐに行こうとせず、ラザロが死んでからベタニヤに来られました。マルタはイエスが来たことを知ると、すぐにイエスの所に行き、「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」と言いました。それに対してイエスは、ラザロがよみがえることを告げ、イエスご自身がよみがえりでありのちであることを信じるかとマルタに問われました。マルタはその時、「あなたが神の子キリストであると信じています。」と告白しました。一方、マリヤもイエスに呼ばれ、イエスの所に来て、イエスの足もとにひれ伏して、泣きながらマルタと同じ言葉を言いました。マルタは言葉で信仰を告白しましたが、マリヤはイエスにひれ伏し礼拝することをもって、イエスへの信仰を告白しました。イエスはマリヤと一緒にいた人々の涙を見て、自ら涙を流し、ラザロの墓に向かって行きました。ラザロの復活の出来事の背後には、マルタとマリヤのイエスへの信仰があったのです。

3. ラザロの復活 ヨハネ 11 : 43 - 44、12 : 1, 9

イエスはラザロの墓に行き、死後四日たっているラザロに対して、「ラザロよ。出て来なさい。」と大声で叫ばれました。すると、ラザロが生き返り、墓の中から出て来たのです。この出来事を見た多くのユダヤ人がイエスを信じました。一方で、ユダヤ人議会は人々がイエスを信じることを恐れ、イエスを殺す計画を立て始めました。さて、過越しの祭りの六日前に、イエスは再びベタニヤに来ました。そして、イエスのために晩餐が用意され、ラザロもその中にいました。大勢の人々がイエスと、イエスによって死人の中からよみがえったラザロを見るために、やってきました。聖書にはラザロの言葉は記されていませんが、ラザロの存在自体がすばらしい証しとなりました。私たちの証しも、自分が何をしたかではなく、イエスが自分に何をしてくださったかを、私たちの存在を通して現されることが大切なのです。私たちも主にあって、古い自分に死に、新しい人によみがえったのです。

4. ナルドの香油 ヨハネ 12 : 2 - 8

この日の晩餐のために、マルタは喜んで給仕をしました。またマリヤはイエスのために、非常に高価な純粋なナルドの香油三百グラムを取って、イエスの足に塗り、自分の髪の毛でぬぐいました。その時イスカリオテ・ユダが、「なぜ、この香油を三百デナリで売って、貧しい人々に施さなかったのか。」と非難しました。それに対してイエスは、「マリヤは私の葬りの日のために、それを取っておこうとしたのです。」と言い、さらに「世界中のどこでも、この福音が宣べ伝えられる所なら、この人のしたことも語られて、この人の記念となるでしょう。」(マタイ 26:13)と言って、マリヤがしたこと的重要性を伝えました。マリヤは、他の誰も知ることができなかった、イエスの死が近いことを知っていました。そこで、マリヤはイエスのために自分の宝をささげたのです。実際にこれが最後の機会となり、イエスは翌週の金曜日に十字架で死なれたのです。ベタニヤのマリヤは主との深い交わりの中で、主のみこころを知ることができ、主に喜んで仕えた女性でした。

56 イスカリオテ・ユダ

1. イエスを裏切ったイスカリオテ・ユダ マタイ10：2－4

共観福音書の十二弟子の紹介の箇所では、イスカリオテ・ユダは一番最後に紹介され、しかもイエスを裏切ったことが記されています。イスカリオテとはカリオテ人の意味で、ユダヤのカリオテ(ケリオテ)出身者の意味です。彼はイエスの十二弟子に選ばれましたが、他の弟子たち以上に、この世的な野心が強かったと考えられます。イエスに付いて行き、イエスが王となった時には、自分も一旗揚げようと考えていたのです。けれども、徐々にイエスの目指す道とユダの目的とが違っていることがわかってきて、ユダの心はイエスから離れて行きます。またユダは弟子たちの会計係であり、以前から金を盗んでいた盗人でした。(ヨハネ12:6)ユダは、「あらゆる悪の根である金銭を愛し、金を追い求めたために、信仰から迷い出て、非常な苦痛をもって自分を刺し通しました。」(1テモテ6:10)ユダはイエスと3年間共に過ごし、イエスの愛に身近に触れながらも、心はますます硬くなり、ついにはイエスを裏切る者となってしまったのです。

2. 銀貨30枚による裏切り マタイ26：14－16

ベタニヤのマリヤが、ナルドの香油をイエスに注いだ時、弟子たちは憤慨して、「何のために、こんな無駄なことをするのか。この香油なら高く売れて、貧乏な人に施しができたのに。」と言って、マリヤを非難しました。この非難の声の中心にイスカリオテ・ユダがいたのです。(ヨハネ12:4, 5)それに対してイエスは、マリヤは自分の葬りの用意をしてくれたのだと言って、マリヤを逆にほめました。けれども、ユダはこのことが理解できず、これ以上イエスに付いて行くことができないと考え、イエスとたもとを分かち決心をしました。そして、イエスに対して敵対心を抱き、イエスを売るために祭司長たちの所に行きました。そして、祭司長たちから銀貨30枚をもらい、イエスを彼らに引き渡す機会をねらい始めたのです。

3. ユダの口づけ ヨハネ13：27－30、マタイ26：47－50

イスカリオテ・ユダのイエスに反逆する心を、悪魔は巧妙に用いました。ユダは自分の意思でイエスを祭司長たちに売りましたが、その背後で悪魔が働いていました。(ヨハネ13:2)イエスはユダが自分を裏切ることをご存知でした。最後の晚餐の席で、イエスがユダにパン切れを渡すと、悪魔はユダの心の中に入り、ユダはイエスを裏切るために、席から立ち、外に出て行っただけです。そして、祭司長たちと共にイエスを捕えるために、ゲッセマネの園に向かいました。最後の晚餐を終えたイエスも祈るために、弟子たちと共にゲッセマネの園に行きました。イエスが祈り終えた時、ユダが祭司長たちを連れて、やってきました。そして、ユダはイエスに近づき、口づけをしました。その合図によって、イエスは捕えられたのです。こうしてユダは、悪魔に用いられて、イエスを銀貨30枚で売り渡したのです。

4. ユダの後悔と死 マタイ27：3－10

悪魔はイエスを死に渡すという目的を達成した時、もはやイスカリオテ・ユダに用はなくなり、ユダから離れました。その結果、ユダの良心は目覚め、イエスを売り渡したことを後悔したのです。そして、祭司長たちの所に行き、自分の罪を告白し、銀貨30枚を神殿に投げ込みました。そして、自分のしたことに絶望して、首をつって死にました。ユダは自分の罪に気づき、後悔はしましたが、神の前に悔い改め、神のもとに帰ろうとはしませんでした。むしろ、自分で悩み、自分で責任を取ろうとして、死を選んだのです。しかし、それは神が喜ばれる解決の方法ではありませんでした。イエスは最後までユダを愛しましたが、ユダの心はかたくなになり、イエスの愛を最後まで受け入れませんでした。罪を悔い改めるのに遅すぎるということはありませんし、どんな罪も心から悔い改めるなら、主は十字架の赦しをもって赦してくださいます。後悔と悔い改めは違うのです。ユダを私たちの反面教師とし、「ユダにはなるまじ、我が主よ。」と祈る者となりましょう。

57 ステパノ

1. 教会に仕える7人 使徒6:1-7

エルサレム教会が成長していく中で、ある時、ギリシャ語を使うユダヤ人がヘブル語を使うユダヤ人に苦情を申し立てました。なぜなら、彼らのうちのやもめたちが、毎日の配給でなおざりにされていたからです。そこで、この問題を解決するために、十二使徒は信徒を呼び集め、教会の食卓のことに仕え、信徒の世話をすることができる、御霊と知恵とに満ちた評判の良い人たち7人を選ぶようにと伝えました。そして、その仕事を7人にまかせ、使徒達はもっぱら祈りとみことばの奉仕に励むことを提案しました。この提案を受けて、教会は信仰と聖霊とに満ちた人7人を選びました。その7人の筆頭にステパノが選ばれました。この7人の働きによって、配給の問題が解決したばかりか、教会内の奉仕と配慮が充実し、さらに使徒たちは祈りとみことばに励んだ結果、弟子の数が非常に増えていき、教会はますます成長していきました。

2. 伝道者ステパノ 使徒6:8-15

ステパノは教会内の奉仕を忠実に行うだけでなく、積極的に外に出て行って伝道しました。彼は御霊と知恵と信仰と、さらには恵みと力に満ちて奇跡を行い、福音を伝えました。ところが、奴隷から解放され、エルサレムに戻って来たユダヤ人家族が属するリベルテン(自由にされた者)の会堂の人たちが、ステパノの教えに反対しました。けれども、議論によっては対抗できないので、民衆や長老たちを先導し、ステパノを捕えて、議会に引っ張っていったのです。そして、偽りの証人たちを立てて、ステパノが神殿と律法に逆らうことを語っていると訴えました。それまでも、宗教指導者たちが使徒たちを捕えたことがありましたが、民衆を恐れ、釈放していました。ところが、今回は民衆がステパノを訴えてきたのです。それは、それまで教会に好意を持っていた民衆が、敵意を持つようになったことを表しています。議会の議員がステパノに注目すると、ステパノの顔が御使いの顔のように見えました。ステパノは聖霊に満たされ、神の栄光がステパノを通して表わされたのです。

3. ステパノの弁明 使徒7:51-56

ステパノは御霊に満たされて、堂々と議会で弁明しました。その弁明をとおして、ステパノがみことばに精通していることがわかります。御霊に満たされる人はみことばに満たされているのです。ステパノはイスラエルの歴史の中で、神が律法を与え、神殿建設を許可されたことを語りました。ところが、先祖たちは神のことばに逆らい、預言者達を迫害し、先祖の不信仰を引き継いだあなたがたも律法に逆らい、ついには救い主イエスを殺す者となったと議会に対して語ったのです。このステパノの弁明を聞いた人々は、はらわたが煮え返る思いで、ステパノに向かって歯ざしりしました。その時、ステパノは天を見つめ、神の栄光と神の右に立っておられるイエスとを見て、「見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます。」と言いました。神の右に座しておられるイエスは、この時は立って、間もなく殉教するステパノを見守り、天に迎え入れようとしたのです。

4. ステパノの殉教 使徒7:57-8:1

ステパノの弁明を聞いた人々は、大声を上げてステパノに殺到し、町の外に連れ出し、彼を石打ちの刑にしました。彼らが石を投げつけていると、ステパノは主を呼んで、「主イエスよ。私の霊をお受けください。」と言い、そしてひざまずいて、大声で「主よ。この罪を彼らに負わせないでください。」と言って、眠りについたのです。ステパノは主イエスのように、自分を殺す者のために祈って天に凱旋しました。こうして、ステパノは教会最初の殉教者となったのです。ステパノ殉教後、エルサレム教会に対する激しい迫害が起こりました。その結果、使徒たち以外の者はユダヤとサマリヤに散らされ、そこで伝道をし、アンテオケに来てからは異邦人にも福音を伝え、福音宣教は世界に広がっていきました。さらに、ステパノ殉教はパウロの回心へとつながっていきました。ステパノ殉教の時に、パウロも立ち合っていたのです。パウロの心にはそのことが残り、やがてイエスと出会い、パウロも主の弟子とされました。

58 使徒ピリポと伝道者ピリポ

1. 使徒ピリポ ヨハネ 1 : 43 - 51

使徒ピリポは、12弟子の中でも初期に弟子となった人で、アンデレやペテロと同じガリラヤのベツサイダ出身です。12使徒のリストでは、いつも5番目に挙げられます。イエスはガリラヤに行く途中、ピリポを見つけて、「わたしについて来なさい。」と言われました。ピリポはその時からイエスに従いました。そして、すぐにナタナエルにイエスを紹介しました。しかし、ナタナエルが信じようとしないので、ピリポは「来て、そして、見なさい。」と言って、ナタナエルをイエスのもとに連れて行ったのです。その結果、ナタナエルはイエスを信じ、彼も12弟子の一人となりました。ナタナエルの別名はバルトマイです。ピリポはヨハネ12:20-22でもアンデレと共に、幾人かのギリシャ人をイエスに紹介しています。私たちがピリポのように、「来て、見てください。」と人々を教会にお誘いしたいものです。

2. 伝道者ピリポのサマリヤ伝道 使徒 8 : 5 - 8、14 - 17

伝道者ピリポは最初、エルサレム教会で食卓に仕え、信徒の世話をする7人の一人に選ばれました。(使徒6:5, 6)ところが同じ7人の一人として選ばれたステパノが殉教したことをきっかけに、エルサレム教会に対する激しい迫害が起こり、使徒達以外の者はユダヤとサマリヤに散らされました。そして、散らされた人々はみことばを伝えながら、巡り歩いたのです。ピリポはサマリヤの町で人々にキリストを宣べ伝えました。また、悪霊を追い出し、病人をいやした結果、サマリヤの多くの人がイエスを信じ、バプテスマを受けました。こうしてピリポはサマリヤに福音を伝えるために用いられました。ピリポの働きを知ったエルサレム教会は、ペテロとヨハネを遣わし、彼らを通して、サマリヤ人は聖霊を受け、サマリヤ伝道はさらに進展して行きました。

3. ガザに向かうピリポ 使徒 8 : 26 - 34

ピリポのサマリヤ伝道が祝福されている時、主の使いがピリポに現れ、ガザに下る道に行くようにと伝えました。ピリポはその時、主はなぜ、伝道が祝されているサマリヤを去って、荒れ果てたガザに下る道に行かなければならないかわからなかったでしょう。けれども、ピリポは主に従い、ガザに下る道に行ったのです。するとエチオピアの女王カンダケの高官でエチオピア人の宦官が乗る馬車の一向に出くわしました。彼はユダヤ教への改宗者で、エルサレムでの礼拝を終え、帰る途中でした。御霊はピリポに、あの馬車と一緒に行くようにと言われ、ピリポはそのとおり馬車に近づくと、宦官はイザヤ書を読んでおり、みことばの意味を知りたいとピリポに質問をしてきたのです。宦官の心は開かれていました。聖霊は宦官の救いと、彼を通してエチオピアに福音が伝えられるために、ピリポを遣わしたのでした。

4. エチオピアの宦官への伝道 使徒 8 : 35 - 40

ピリポは宦官の質問に答える形で、イザヤ書のみことばから始めて、イエスのことを彼に宣べ伝えました。ピリポの伝道はサマリヤ伝道の時もそうですが、聖書から救い主イエス・キリストを宣べ伝えることです。宦官はその結果、十字架で死に、よみがえられたイエス・キリストが自分の救い主であることを信じることができました。そして、ピリポに願ってその場でバプテスマを受けたのです。宦官が水から上がると、主の霊がピリポを連れて行かれたので、もはや彼を見ることはできませんでしたが、イエスの救いを喜びながら、エチオピアに帰って行きました。その後、ピリポはアソドに現れ、町々を伝道し、カイザリヤに行きました。使徒21:8, 9を見ると、パウロは第3次伝道旅行の帰途、伝道者ピリポの家に滞在したことが記されています。パウロがその後2年間、カイザリヤの牢にいた時も、ピリポの支援があったことでしょう。ピリポはステパノの殉教を心に留め、彼から引き継いだ伝道の働きを、主に従って全うしたのでした。

59 パウロ I

1. 背景 ピリピ3：5－6、使徒8：1－3

新約聖書27巻中、13の手紙を書き、異邦人の使徒として伝道したパウロほど、キリスト教会に大きな影響を与えた使徒はありません。パウロについては、使徒の働きと彼が書いた13の手紙から知ることができます。まず、パウロの人物像を見てみましょう。パウロはギリシャ名でユダヤ名はサウロです。彼はキリキヤのタルソ生まれのユダヤ人で、ベニヤミン族出身で、生まれながらのローマ市民でした。またパリサイ派に属し、1世紀最大の律法学者ガマリエルのもとで律法について厳格な教育を受け、律法の義については非難されるところのない者でした。パウロにとって、十字架で死んだイエスを救い主とするイエスの弟子達の教えは、神を冒瀆し、ユダヤ教に敵対する教えと映りました。ステパノが殉教する時には、その場に立ち合い、その後の教会迫害の先頭に立って、クリスチャンを迫害しました。

2. 回心 使徒9：1－6、15－20

教会迫害に燃えるパウロは、ダマスコにいるクリスチャンを捕えるために、ダマスコに向かいました。その途上、突然天からの光に照らされ、彼は地に倒れました。そして、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。」という声を聞きました。彼は、「主よ。あなたはどなたですか。」と言うと、「わたしはあなたが迫害するイエスである。」との答えが返ってきました。それは、パウロにとって全く想定外のことでした。パウロは今まで、神に対する熱心さのゆえにクリスチャンを迫害していましたが、クリスチャン迫害は、神に対する迫害であり、何とイエスは主なる神ご自身だということです。目が見えなくなったパウロは、手を引かれて、ダマスコに入りました。そして、アナニヤに祈ってもらおうと目が見えるようになり、イエスを主と信じてバプテスマを受け、イエスの弟子と変えられました。こうして神はアナニヤに言われたとおり、パウロを福音を伝える選びの器として立てられてのです。

3. 初期の伝道 使徒9：26－30、11：25－26

ダマスコで回心したパウロは、直ちにイエスは神の子であると宣べ伝え、ダマスコのユダヤ人たちをうろたえさせました。その後、彼は一人でアラビアに行き、主の前に自分の信仰を整えて、再びダマスコに戻りました。(ガラテヤ1:17)そして、ダマスコの暗殺計画から逃れ、エルサレムに上りました。エルサレムのクリスチャンは最初、パウロの回心を信じられませんでしたでしたが、バルナバのとりなしにより、パウロはエルサレム教会に受け入れられました。ところが、今度はエルサレムでパウロの暗殺計画があることがわかり、パウロは自分の郷里のタルソに行きました。その後、アンテオケ教会の指導者になっていたバルナバがタルソを訪れ、パウロをアンテオケに連れてきました。そして、二人が協力して伝道した結果、教会は成長し、イエスの弟子たちは「キリスト者」「クリスチャン」と呼ばれるようになりました。また、エルサレムでききんが起ると、アンテオケ教会は救援物資をバルナバとパウロの手によってエルサレム教会に送り、支援しました。

4. 第1次伝道旅行 使徒13：1－5

アンテオケ教会が主を礼拝し、断食をしていると、聖霊が「バルナバとサウロをわたしのために聖別し、わたしが召した任務につかせなさい。」と言われました。そこで、教会は二人を伝道のために遣わしました。これが46年頃に行われた第1次伝道旅行です。二人はヨハネ・マルコを助手として連れて行き、キプロスでの伝道を皮切りに、小アジアに渡って、ピシディアのアンテオケ、イコニウム、ルステラ、テルベへと伝道し、教会が誕生しました。彼らの伝道方法は、最初その地の会堂に行きユダヤ人に伝道し、拒否されると今度は異邦人に伝道しました。また、13:9からサウロはパウロと呼ばれるようになり、また13:13からは「パウロの一行」となり、その後は「パウロとバルナバ」と記されて、パウロの指導的な立場が確立していきます。またマルコが途中で一行から離れ、このことが後にパウロとバルナバの間で大問題となります。パウロとバルナバは数カ月の伝道旅行を終えて、アンテオケに戻ってきました。

1. エルサレム会議 使徒15:1-5, 28-29

第1次伝道旅行からアンテオケに戻ったパウロとバルナバは、その後2〜3年アンテオケ教会で働きました。その間、異邦人信者も割礼を受け、律法を守るべきであると説くユダヤ主義キリスト者がガラテヤの教会に入り込み、混乱が起きました。そこでパウロはガラテヤ人への手紙を書いて、人が救われるために必要なのは、キリストを信じる信仰だけだという福音の神髄を伝えました。しかし、それでことは収まらず、ユダヤ主義キリスト者はアンテオケにも来て、異なった教えを伝えました。そこで、この問題を解決するために、パウロとバルナバとその仲間たちが、エルサレム教会に行き、協議しました。これが49年か50年に行われたエルサレム会議です。会議では、異邦人キリスト者にも割礼を受けさせ、律法を守らせるべきかが論じられました。結論は、救われるために必要なのは信仰のみであると主張するパウロの教えが正しいとされました。そして、ユダヤ人信者との交わりに配慮して、彼らが避ける食物や不品行を異邦人も避けるべきことが決議されました。

2. 第2次伝道旅行 使徒16:6-10

その後、マルコの処遇を巡って、パウロとバルナバは別行動を取ることにになり、バルナバはマルコを連れてキプロス伝道に出発しました。一方、パウロはシラスと共に第2次伝道旅行に出発しました。ルステラではテモテが加わり、トロアスからはルカも同行しました。第2次伝道旅行で特記されることは、福音がヨーロッパに伝えられたことです。「マケドニアに渡って来て、私たちを助けてください。」と懇願するマケドニア人の幻を見たパウロは、ピリピ、テサロニケ、ベレヤ、アテネ、コリントへと伝道し、ヨーロッパにも救われる民が起こされ、教会が誕生していきました。コリントではアクラとプリスキラの協力を得て、1年半滞在して、伝道しました。パウロは、コリントからテサロニケ人への手紙第1、第2を書き送りました。その後、エルサレムを経て、アンテオケに戻ってきました。こうして50年から52年までの第2次伝道旅行は終了しました。

3. 第3次伝道旅行 使徒19:8-10, 20:31-32

しばらくアンテオケに滞在した後、パウロは53年から57年まで第3次伝道旅行に出かけました。この伝道旅行で最も力を入れたのが、エペソ伝道でした。エペソはアジア州の州都でありローマ帝国第3の都市であったので、アジア州の伝道の拠点としました。パウロはエペソで約3年間伝道しました。その結果、エペソに教会ができただけでなく、エペソで福音を信じた人たちが自分の町に戻って伝道した結果、アジア州全体に福音が伝えられました。エペソ伝道の後、パウロはマケドニアに渡り、第2次伝道旅行で誕生した教会を回りました。そして、エルサレムに戻る途中でエペソの長老たちを呼び、決別説教を行いました。そして、教会を牧する長老たちの使命を伝え、神とみことばに彼らをゆだね、エルサレムに向かいました。また、パウロはエペソ滞在中にコリント教会の問題を知り、第1の手紙を書き、マケドニアに渡ってから第2の手紙をコリント教会に書きました。その後、コリントを訪れ、そこでローマ人への手紙を書きました。

4. 逮捕からローマへの旅 使徒28:23-31

エルサレムに戻ったパウロは、教会の長老たちに伝道旅行の報告をしました。そして、彼らの勧めに従って、神殿の祭儀に加わりました。ところがパウロに敵意を抱いていた人たちが彼を見つけ、殺そうとしました。危ういところでローマ軍に保護されたパウロは、その後カイザリヤに送られ、総督ペルクスのもとで2年に渡って幽閉されました。(58年〜59年)その後、総督フェストに代わった直後、エルサレムに送り返されないために、パウロはカイザルに上訴し、ローマに送られることになりました。しかし、パウロの乗った船は嵐で漂流し、大変な航海を経て、ついに60年にローマに到着しました。ローマでは2年間、軟禁状態に置かれますが、比較的自由に人々を招いて伝道することができました。

6 1 パウロ Ⅲ

1. ローマから殉教まで II テモテ 4 : 5 - 8

ローマで2年間軟禁状態に置かれたパウロは、人々を招いて伝道することが許されました。またその間に獄中書簡と呼ばれる、エペソ、ピリピ、コロサイ、ピレモンの4つの手紙を書きました。63年頃に釈放されたパウロは、伝承によればスペインにまで伝道に出かけました。またパウロはその間に、3つの牧会書簡の内、テモテへの手紙第1はマケドニアから、テスへの手紙はニコポリから書き送りました。そして、再び捕えられたパウロは、もう一つの牧会書簡であり彼の最後の手紙となるテモテへの手紙第2をローマの獄中から書き送りました。そして67年頃、ネロ帝の迫害のもとに殉教したと考えられます。「私は今や注ぎの供え物となります。私が世を去る時はすでに来ました。私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。」パウロは殉教を前にして、地上での信仰の競争を走り終え、義の栄冠を受け取るために、天に向かうことを書き記したのです。

2. 律法と信仰 ローマ 3 : 20 - 26

パウロはイエスを主と信じるまでは、パリサイ派に属し、律法学者ガマリエルのもとで律法についての厳格な教育を受け、律法の義については非難されるところがないと自負する者でした。けれども、イエスと出会い、自分の罪を示された時、律法を行うことによって、人は神の前に義と認められないことを知ったのです。と同時に、キリストを信じる信仰によって義と認められるという信仰義認の救いを発見し、自らもキリストを信じる信仰によって義と認められる救いを得たのです。パウロはその後、信仰義認による救いを宣べ伝え、各書簡でその真理を説明しました。また律法には、人の罪を示し、人々をキリストに導く養育係としての役割があると教えました。(ガラテヤ3:24)その結果、キリストを信じることによって与えられる信仰義認の救いが明確にされたのです。

3. キリスト者の生活 ローマ 13 : 12 - 14

パウロは、救いの始まりである信仰義認を明確に解くと共に、そこから続く信仰生活の中で求めるべき聖化についても強調しました。キリストによって救われた者は、古い自分がキリストと共に十字架につけられ、キリストがその人のうちに住まれる新しい人に新生したのです。(ガラテヤ2:20、II コリント5:17)キリストのいのちという代価をもって贖われたクリスチャンのうちには聖霊が生まれ、聖霊の宮とされたクリスチャンは、自分のからだをもって神の栄光を現す使命が与えられました。(I コリント6:19, 20)神の前に義と認められて救われても、信仰者の罪との戦いはなお続きます。しかし、聖霊の助けをいただき、聖い生活を求め、神の栄光を現す生活をするのが、救われた目的であることをいつも心に留めたいと願います。

4. 教会 I コリント 12 : 12 - 13, 27

信仰生活を一人で行うことは神のみこころではありません。クリスチャンが信仰の成長をするために、また主のために奉仕するために、神は教会を与えられました。パウロは伝道をし、人々をキリストに導く働きをただけでなく、教会を各地域に建て、長老(監督・牧師)を任命し、彼らにみことばによる牧会の働きをゆだねました。(エペソ4:11-13)クリスチャンは、教会において教えられるみことばによって、霊的に成長することができます。また、すべての信徒がキリストのからだなる教会の各器官であると教え、それぞれが与えられている賜物を用いて、互いに助け合い、支え合いながら、奉仕の働きをすることの重要性を教えました。アンテオケ教会から派遣されたパウロは、教会を重んじ、教会形成をもって、世界宣教に活躍したのです。

62 バルナバ

1. 慰めの子 使徒 4 : 36 - 37、9 : 26 - 28

バルナバの本名はヨセフで、キプロス生まれのレビ人です。彼は使徒たちによってバルナバ(慰めの子)というニックネームで呼ばれていました。バルナバはエルサレム教会誕生後すぐに信者となり、信者を助けるために、所有していた畑を売り、その代金を使徒たちのもとに持って来て、助け合う愛を実践しました。また、パウロが回心後エルサレムに戻って来た時、エルサレムの信者はパウロが弟子となったことを信じず、恐れて、仲間に入れませんでした。その時、バルナバはパウロの良き理解者となり、エルサレム教会への紹介者となりました。バルナバの仲介により、パウロはエルサレム教会の交わりの中に受け入れられました。こうして、パウロにとってもバルナバは慰めの子となったのです。

2. 聖霊と信仰に満ちるりっぱな人物 使徒 11 : 19 - 26

ステパノの殉教の後、迫害が起こり、信者は散らされ、行った先々で福音を伝えました。アンテオケでは大勢の異邦人が救われ、異邦人を中心としたアンテオケ教会が誕生しました。エルサレム教会はこの知らせを聞くと、アンテオケ教会を指導するためにバルナバを派遣しました。バルナバは立派な人で、聖霊と信仰に満ちた人でした。彼の立派さは、信仰と聖霊に満たされ、御霊の実を豊かに結んだ結果としての立派さでした。彼のアンテオケにおける伝道と牧会は大いに祝され、大勢の人が主に導かれました。またバルナバはタルソからパウロを呼び寄せ、1年間一緒に働いた結果、教会はさらに成長しました。弟子たちはアンテオケで初めて、キリスト者と呼ばれるようになりました。

3. 第1次伝道旅行とエルサレム会議 使徒 13 : 2 - 5、15 : 1 - 2

アンテオケ教会はエルサレムに大ききんが起これと救援物資をバルナバとパウロに託して届けました。そしてバルナバとパウロが帰ってくると、聖霊の導きにより、二人を第1次伝道旅行に遣わしました。二人はヨハネ・マルコを助手として連れて行き、まずキプロスで伝道しました。その後、パンフリヤに渡る頃から、それまでバルナバがリーダーだったのが、パウロがリーダーに変わりました。けれども、バルナバは謙遜にパウロに従い、実りある伝道旅行となりました。その後、ユダヤ主義キリスト者がガラテヤの諸教会やアンテオケにやって来て、異邦人信者を混乱させました。この時、バルナバやペテロまでもが影響を受けたようで、パウロは二人を非難しています。(ガラテヤ2:13, 14)バルナバはパウロの非難を謙虚に受け入れ、その後、二人はこの問題を解決するためにエルサレム会議に参加し、信仰義認の福音を確認したのでした。

4. 激しい反目とその後 使徒 15 : 36 - 40

第2次伝道旅行に出発する際、バルナバはマルコを連れて行こうとし、パウロは第1次伝道旅行の際に、途中で帰ってしまったマルコを連れて行かないと主張しました。その結果、激しい反目となり、二人は別行動を取るようになりました。バルナバはマルコを連れてキプロス伝道に行き、パウロはシラスを連れて第2次伝道旅行に向かいました。その後、二人がどうなったのかは、聖書は語っていません。けれども、聖書からわかることは、バルナバはマルコにとって慰めの子となり、マルコを訓練し、パウロも認める伝道者として育てたことです。パウロがローマで監禁されている時にはマルコはパウロと共にいます。(コロサイ4:10、ピレモン24)パウロはマルコを同労者、役立つ者と呼び、殉教前の獄中にいるときには、テモテにマルコを伴って来てほしいと願っています。パウロはバルナバと別れた後も、バルナバのことを手紙に書いており、バルナバの働きを知っていることがわかります(1コリント9:6)。またマルコのことをバルナバのいとこと紹介しています(コロサイ4:10)。パウロはマルコをとおして、バルナバが慰めの子であることを最後まで経験したのです。

63 テモテ

1. パウロの同労者 使徒16:1-3、Ⅱテモテ1:5

パウロは第2次伝道旅行でルステラにきた時、テモテを同伴者として選びました。テモテはその時からパウロが殉教する時まで、パウロの忠実な同労者として働きました。彼の父はギリシャ人でしたが、ユダヤ人の祖母ロイスと母ユニケより幼いころから聖書を学び、クリスチャンとなりました。パウロは異邦人には割礼を求めませんでしたが、テモテにはユダヤ人として割礼を受けさせて、ユダヤ人伝道にも従事できるようにさせました。テモテがパウロの同労者になったのは二十歳前後と考えられます。彼は若い時から、パウロと行動を共にすることによって、信仰と伝道と牧会について教えられ、諸教会で用いられる器に成長しました。

2. パウロの代理人、使者 Iテサロニケ3:1-3、Iコリント4:17

パウロはテモテに信頼を寄せ、パウロの代理人また使者として諸教会に遣わしました。第2次伝道旅行では、ベレヤにシラスとテモテをしばらく留まらせ、パウロは先にアテネに向かいました。(使徒17:14)その後、シラスとテモテをアテネに呼び寄せた後、今度はアテネからテモテをテサロニケに遣わしました。また第3次伝道旅行では、コリント教会の問題を解決するために、エペソからテモテをパウロの使者として遣わしました。その後、エペソに戻って来たテモテを今度はエラストと共にマケドニアに遣わしました。また、パウロが2年間ローマに幽閉されていた時にはテモテが共におり、ローマからテモテをピリピに遣わしました。また、テモテはパウロ6つの書簡の共同執筆者として名を連ねています。(Ⅱコリント、ピリピ、コロサイ、I,Ⅱテサロニケ、ピレモン)このようにテモテはパウロの手足となって、パウロの働きに協力したのです。

3. ローマのパウロと共に ピリピ1:1、2:19-23

パウロがカイザルに上訴するために、カイザリヤから船でローマに向かう間、テモテは同伴していません。この期間は、テモテはいずれかの地方で宣教活動をしていたようです。けれども、パウロがローマに着き、2年間の幽閉生活をしていた時にはテモテはパウロのもとにいて、パウロを支えました。(ピリピ1:1、コロサイ1:1、ピレモン1)テモテが共にいることは、パウロにとって大きな慰めとなりました。テモテは子が父に仕えるようにパウロに仕え、幽閉生活で不自由なパウロの分まで働きました。パウロはテモテをローマからピリピに遣わし、ピリピ教会を励ましました。また2回目にローマで捕らえられた時には、テモテはエペソで働いていましたが、パウロはテキコをエペソに送るので、マルコを連れてテモテにローマに来るようにと伝えました。テモテはパウロの殉教の時までパウロを支えて、主に仕えました。

4. テモテへの手紙 Iテモテ4:12-16、Ⅱテモテ1:5-8

パウロは、テモテのことを「わが子テモテ」と呼ぶほど、信仰の育ての親として、テモテと親しく交わりました。テモテはパウロを師として慕って支えましたが、パウロもテモテの相談役また指導教師として、テモテを支えました。パウロがローマの監禁生活から自由にされると、テモテはエペソ教会の牧師となってエペソで牧会しました。その時、エペソに偽教師が入り込んだので、パウロは第1の手紙を書き、問題の対処法を伝えるとともに牧会上必要なことを伝えました。この時、テモテは13年間パウロのもとで働き、それなりに成熟していましたが、パウロにとってはまだ年若き伝道者であり、まだまだ教えるべきことがたくさんあったのです。また第2の手紙では、テモテが気落ちしていることを知って励ましを与えて、テモテを奮い立たせました。テモテは生涯パウロを模範として宣教に励み、最後は皇帝ドミティアヌスの迫害の時に殉教したと伝えられています。

6.4 プリスキラとアクラ

1. パウロとの出会い 使徒18:1-5

アクラはプリスキラの夫で、ポント生まれのユダヤ人でした。彼の妻の名前をルカはプリスキラという愛称で呼び、パウロは正式名のプリスカで呼んでいます。ほとんどの場合、妻の名前が先に出て来るのは、教会の中で、プリスキラのほうがより多くの活動をしていたからと考えられます。二人はクラウドオ帝によって49年頃に出されたユダヤ人のローマからの退去命令により、コリントにやってきました。一方、パウロも第2次伝道旅行の際、アテネからコリントにやってきました。プリスキラとアクラはパウロを自宅に招き、天幕作りの同業者同士であったため、天幕作りをしながらパウロは伝道し、プリスキラとアクラはパウロを支えました。その後、シラスとテモテがコリントに来てからは、パウロは伝道に専念し、1年半プリスキラとアクラの家に住みながら、コリントで伝道しました。

2. コリントからエペソへ 使徒18:18、19、19:1

コリントでの伝道を終え、パウロがエペソに向かうと、プリスキラとアクラもパウロに同行してエペソにやってきました。パウロはエペソでしばらく伝道した後エルサレムに向かいましたが、プリスキラとアクラは引き続きエペソに残って伝道しつつ、第3次伝道旅行でのパウロのエペソ伝道への準備をしました。第3次伝道旅行では、パウロは約3年間エペソで伝道しましたが、その背後にプリスキラとアクラの協力があつたのです。パウロのエペソ伝道は祝され、アジア各州からエペソに来る人たちが福音を聞き、自分の町に戻って伝道した結果、アジア全州に福音が伝えられました。またアルテミス神殿があるエペソでの伝道は危険や反発も伴いました。プリスキラとアクラはエペソで自分たちのいのちの危険を冒しても、パウロを守ったと考えられます。(ローマ15:14)

3. 伝道者アポロを助ける働き 使徒18:24-28

パウロがプリスキラとアクラをエペソに残して、エルサレムに向かった後、雄弁な伝道者アポロがエペソにやって来て伝道しました。アポロは聖書に通じ、霊に燃えて、イエスのことを正確に語り、教えました。けれども、彼はヨハネのバプテスマしか知らず、主イエスの御名によるバプテスマと聖霊については知らなかったのです。プリスキラとアクラは、パウロから聖書を十分に教えられていたので、アポロの教えに欠けがある事に気づきました。そこで二人はアポロを家に招き、神の道をもっと正確に説明し、アポロの伝道を助けました。またアポロがアカヤに渡りたいと願っていたので、アポロを歓迎してくれるようにと手紙を書き、アポロを励まして送り出しました。アポロはプリスキラとアクラによって、正確な聖書知識と愛と励ましを受けて、アカヤで伝道することができました。

4. ローマそして再びエペソへ ローマ16:3-5、Ⅱテモテ4:19

プリスキラとアクラは、その後エペソを去ってローマに行きました。その頃、クラウドオ帝はすでに亡くなり、ユダヤ人追放令も有名無実となり、ユダヤ人もローマに戻って来ていました。さらに、ローマの教会も活発に活動していましたので、二人もローマでの伝道を志し、ローマに戻って来ていたのです。パウロが第3次伝道旅行でコリントから書いたローマ人への手紙では、ローマの信徒への挨拶の最初に二人の名前を挙げています。パウロは二人を「私の同労者」と呼び、「この人たちは、自分のいのちの危険を冒して私のいのちを守ってくれたのです。この人たちには、私だけでなく、異邦人のすべての教会も感謝しています。」と言って、プリスキラとアクラがいかにパウロのためまた諸教会のために仕えたかを伝えています。二人の家は家の教会として用いられていました。その後、二人は再びエペソに戻りました。エペソではテモテが牧会しており、二人はエペソに戻ってテモテの働きを助けたのです。二人は信徒でありつつ、伝道者の同労者として忠実に主に仕えました。

65 テロス

1. 異邦人クリスチャン テロス1:4、ガラテヤ2:3、16

テロスについては、使徒の働きには記されていませんが、テロスについて言及しているパウロの4つの手紙(Ⅱコリント、ガラテヤ、Ⅱテモテ、テロス)から知ることができます。彼はギリシャ人であり、パウロによってキリストに対する信仰に導かれ、クリスチャンになりました。エルサレム会議にはパウロとバルナバとともにテロスも出席したと考えられます。(使徒15:2)その会議において、異邦人クリスチャンは割礼を受ける必要はないとの結論が出され、会議に出席したテスは割礼を強いられませんでした。パウロはこのテスの実例を挙げ、ガラテヤ人への手紙の中で信仰義認の教理を教えました。このようにテスは信仰義認の生き証人となったのです。

2. パウロの同労者 Ⅱコリント7:7-9、8:23

テスはパウロの同労者として各地で宣教活動に励みました。特にパウロの代理人としてのコリント教会に対するテスの働きは、大きな実を結びました。パウロは第2次伝道旅行で1年半コリントで伝道し、教会が誕生しました。第3次伝道旅行でエペソに来た時、コリント教会における分派と不道德の問題を聞き、手紙を送りましたが、あまり効果がありませんでした。そこで第1の手紙を書き、テモテを遣わしました。その後、パウロ自身も訪問しましたが、逆にパウロに反発する者も現れました。そこでパウロは「涙の手紙」を書いてテロスに託しました。テスはその手紙を持ってコリント教会に行き、手紙の内容を十分に説明し、悔い改めを勧めました。その結果、コリント教会の大半が悔い改めたのです。テスはその知らせを持って、マケドニアにいるパウロのもとに戻りました。パウロはそのことを喜び、第2の手紙を書き、再びテロスに託しました。テスはエルサレム教会への献金を集めるためにも働きました。このようにテスはパウロとコリント教会の仲介者として、良き働きをしました。

3. クレテ、ダルマテヤ伝道 テロス1:5、3:12、Ⅱテモテ4:10

パウロは1回目のローマでの監禁から解放されると、巡回伝道を再開しました。その際、テスを連れてクレテ島で伝道しました。そして、テスにクレテ伝道と教会形成を任せて、パウロは次の地域に向かったのです。クレテ人には、テロス1:12に記されている格言のように、偽り、敵意、怠惰などの特徴があり、教会形成に困難がありました。パウロはニコポリからテロスへの手紙を書き、テロスに対してどのように牧会すればよいかを教えました。その後テスは、アルテマスかテキコがクレテに到着すると、ニコポリにいるパウロの所に行きました。その後、テスはダルマテヤ(イルリコ)で伝道をします。伝承によれば、その後テスは再びクレテに戻って牧師として働き、94歳で召されたと伝えられています。

4. テロスへの手紙 テロス2:7-8、14-15

テモテⅠ、Ⅱとテロスへの手紙は、牧会書簡と呼ばれています。パウロは自分の伝道と牧会の働きを後輩たちに伝えるために、ユダヤ人クリスチャンからテモテを、また異邦人クリスチャンからはテロスを選んで手紙を書きました。パウロはテロスに長老(監督)を教会に任命するように命じ、監督になる者の資格を伝えています。パウロはテモテにも同様の指示を与えていますので、長老(監督、牧師)を任命することは初代教会に置いても重要なことであることがわかります。また、偽教師に対する対処法、教会員各層に対する接し方、クレテ人特有の問題への対処法などきめ細やかに教えています。そして、何よりも伝道者として自分自身に気を付け、だれにも軽んじられることなく、すべての点で信者の模範となることをテロスに教えました。テモテもテロスもパウロの教えを忠実に守り、パウロの働きを継承していったのです。

66. シラス

1. エルサレム会議 使徒 15 : 27 - 33

シラス(ヘブル語名)は、シルワノ(ラテン語名)とも呼ばれ、エルサレム教会の主要メンバーの一人で、預言者とも言われました。彼はエルサレム会議で決定した事柄をアンテオケ教会に伝えるため、バルサバと呼ばれるユダと共にエルサレム教会からアンテオケに遣わされました。そして、会議で決定した「救われるために割礼を受ける必要がないこと」、また「ユダヤ人クリスチャンとの交わりを保つために異邦人クリスチャンが配慮すべきこと」を伝えました。さらに、多くの言葉をもって異邦人クリスチャンを励まし、力づけました。シラスとユダはユダヤ人クリスチャンと異邦人クリスチャンの間の良き架け橋となり、信仰義認の真理を共に確認して、エルサレムに帰って行きました。

2. 第2次伝道旅行 アンテオケからピリピへ 使徒 16 : 25 - 31

第2次伝道旅行の時、パウロはマルコを連れて行かないことにし、シラスを選んで出発しました。途中のルステラでテモテが一向に加わり、さらにトロアスでルカも加わって、4人でマケドニアに渡り、ヨーロッパ伝道が始まりました。ピリピに着くと紫布の商人ルデヤと彼女の家族が救われますが、パウロとシラスは捕えられ、むちで打たれて牢に入れられてしまいました。真夜中ごろ、パウロとシラスが神に祈り賛美していると、突然大地震が起こり、牢の扉が開きました。看守は囚人が逃げたと思い、自害しようとした時、パウロの大声で囚人たちは牢にとどまっていることを知りました。そして、「主イエスを信じなさい。そうすればあなたもあなたの家族も救われます。」との二人の勧めを聞き、看守と家族が救われました。翌日、二人はローマ市民であることを告げ、長官たちの謝罪を受け入れて、テサロニケに向かいしました。

3. 第2次伝道旅行 テサロニケからコリントへ 使徒 17:13-14, 18:5、Ⅱコリント 1:19

テサロニケでパウロとシラスが伝道すると、大勢の者がイエスへの信仰に導かれました。けれども、ねたみにかられたユダヤ人の妨害により、彼らは3週間の伝道の後、ベレヤに向かいしました。ベレヤでは多くの者が信仰に入りました。しかし、テサロニケのユダヤ人の妨害に会い、パウロはシラスとテモテをベレヤに残し、アテネに向かいしました。さらにパウロがコリントでプリスキラとアクラと共に伝道を始めると、シラスとテモテもあとから合流し、コリント伝道は1年半に及びました。第2次伝道旅行における伝道では、パウロの次にシラス(シルワノ)の名が挙げられ、次にテモテの名が挙げられることから、シラスの貢献が大きかったことがわかります。

4. すぐれた書記 I、Ⅱテサロニケ 1 : 1、I ペテロ 5 : 12

パウロはコリントからテサロニケ教会に第1、第2の手紙を書いています。テサロニケではユダヤ人の妨害を受けて、3週間しか滞在することができませんでしたが、その時救われた人々を中心に教会が誕生しました。パウロはその教会に手紙を書いて、キリストにある信仰を教えました。この手紙は、パウロ、シルワノ、テモテから送られた手紙となっていますので、シルワノとテモテも何らかの形でこの手紙に関わっていることがわかります。またシラスはペテロと行動を共にしたことが、ペテロの手紙第1によってわかります。ペテロはこの手紙をローマからアジアに向けて書きましたが、シラスが書記としてこの手紙を書きました。ペテロはシラスを「私の認めている忠実な兄弟シルワノ」と言っています。シラスは忠実な主の弟子として、またすぐれた書記として、使徒たちと共に働きました。

67 ドルカス

1. 女の弟子 使徒9：36－43

ドルカス(ギリシャ語名)は「かもしか」という意味の名前でヘブル語ではタビタです。彼女は地中海に面するヨッパに住む女の弟子でした。「女の弟子」という言葉は、新約聖書では彼女だけに用いられています。もちろん、他にも女性の主の弟子はたくさんいましたが、ドルカスを一言で言い表せば、女の弟子という表現が最もふさわしかったのです。ドルカスはイエスを救い主と信じるだけでなく、自分の主として信じ、主の弟子としてヨッパの教会で奉仕したのです。彼女の奉仕によって多くの人が助けられ、彼女に愛された人々は彼女を愛しました。その彼女が病気になり、死んでしまったのです。人々はすぐ近くの町ルダにいるペテロを呼びました。ペテロは死んだドルカスを生き返らせました。教会の人々は大変喜ぶと同時に、そのことがヨッパ中に知れ渡り、多くの人々が主を信じました。

2. やもめたちへの奉仕者 ヤコブ1：27

ドルカスの特技は裁縫でした。彼女はその特技を用いて、やもめたちを助けました。当時、夫を失った女性たちは生活に困りました。そこで、教会の重要な働きの一つがやもめたちへの奉仕でした。使徒6章には、エルサレム教会でのやもめたちへの配給の問題から、7人の奉仕者が選ばれたことが記されています。ドルカスは自分の特技を生かして、やもめたちを助けるために下着や上着を作ってはプレゼントしました。その衣服を着た人はドルカスの愛を身に着けたのでした。ですから、ペテロが到着した時に、やもめたちはドルカスが作った下着や上着の数々を見せて、ドルカスが愛に満ちた女の弟子であったことを伝えたのでした。ドルカスの愛を受けた人々はドルカスを愛し、彼女が亡くなった時にペテロを呼び、その結果、彼女は生き返ることができました。ドルカスが生き返った時に、人々の愛に感謝するとともに、ペテロと、そして何よりも神に感謝し、ますます主に仕えたことでしょう。

68 ルデヤ

1. 紫布の商人 使徒16：12－15、40

パウロの一行は第2次伝道旅行で、マケドニアの叫びの幻を見た時、ただちにマケドニアに向かい、まずピリピに行きました。ピリピはマケドニア地方第一の都市で、テアテラ市の紫布の商人ルデヤがこの町で商売をしていました。テアテラ市の特産品の紫布は大変有名で、ルデヤはその高価な紫布をテアテラから仕入れてピリピで売っていました。また彼女はユダヤ教に改宗した異邦人でした。パウロたちが安息日に祈りの場があると思われた川岸に行くと、女たちが集まり、福音を伝えました。その時、ルデヤがパウロの話しを心に留め、イエスを主と信じたのです。そして、彼女を通して彼女の家族もイエスを信じ、家族そろってバプテスマを受けました。こうして、ルデヤとその家族がパウロのヨーロッパ伝道の初穂となったのです。さらには看守とその家族が救われ、ピリピ教会が誕生しました。

2. 分かち合う信仰 ピリピ4：14－19

ルデヤがイエスを信じた時、パウロ、シラス、テモテ、ルカの一行を自分の家に招いてもてなしました。また、パウロとシラスが牢から出て来た時も、ルデヤの家に行き、もてなしを受けてから、テサロニケへ向かいました。ルデヤはクリスチャンになった後も商売を続け、商売を通して伝道し、また与えられた収入を伝道のために用いました。ルデヤのいるピリピ教会はパウロをたびたび支援し、支援を通してパウロと困難を分け合いました。ピリピ教会は分かち合う信仰を実践することにより、神の祝福にあずかることができ、パウロと共に主にある喜びを経験することができました。

69 ピレモンとオネシモ

1. オネシモの回心 ピレモン10-12、18-19

オネシモはピレモンの奴隷でしたが、主人のものを盗み、コロサイからローマに逃亡しました。ローマまで来れば捕らえられないと考えたオネシモでしたが、そこでパウロと出会い、キリストに捕えられたのです。オネシモはパウロに導かれて悔い改め、キリストを信じて救われました。しかも、パウロは彼の主人ピレモンを信仰に導いた人でした。ここに神の不思議な摂理を覚えます。オネシモ(有益の意味)は救われた結果、役立たない者から役立つ者へと変えられました。彼は獄中のパウロに仕え、パウロの心そのものと言われる人に変えられました。パウロはオネシモを続けて自分のもとに置きたいとも思いましたが、ピレモンのもとに送り返さなければならないと考え、ピレモンへの手紙を書き、テキコを同行させ、オネシモをピレモンのもとに送り返しました。(コロサイ4:8, 9)

2. パウロのとりなし ピレモン1-2、13-17

ピレモンへの手紙は、聖書の中で最も個人的な手紙です。パウロは一人の主にある奴隷オネシモのために、彼の主人ピレモンにとりなしの手紙を書いたのです。ピレモンもパウロによって信仰に導かれた人です。彼はコロサイに住み、自宅を家の教会として開放し、パウロはピレモンを愛する同労者と呼んでいます。当時の奴隷制度では、主人の物を盗み脱走した奴隷は死刑になることが常でした。けれども、パウロはピレモンに対して、もはや奴隷としてではなく、愛する兄弟として、パウロを迎えるようにオネシモを迎えてほしいと願いました。教会にはこの世の奴隷制度を超えた主にある愛と赦しの交わりがあったのです。ピレモンは、テキコに同行されて戻ってきたオネシモを、パウロの期待に応じて赦し、主にある兄弟として受け入れたことでしょう。そして、オネシモもパウロの期待に応じて、コロサイの教会でピレモンと共に主に仕えたことでしょう。

70 エパfras

1. コロサイ教会の指導者 コロサイ1:7-8、4:12、ピレモン23

パウロは第3次伝道旅行の時、3年間エペソにとどまって伝道しました。その結果、アジア州からエペソに来た人々が福音を聞き、それぞれの地域に戻って福音を伝えたので、アジア州全体に福音が伝えられました。エパfrasもその時のパウロの伝道で救われ、出身地コロサイに戻って伝道し、コロサイ教会が誕生しました。パウロはエパfrasのことを「私達に代わって仕えている、忠実なキリストの仕え人」と呼んでいます。コロサイ教会に様々な異端が入り込んだので、エパfrasはパウロに相談するためにローマにやってきました。ところがエパfrasもローマで捕らえられ、パウロと共に囚人となってしまいました。しかしエパfrasはローマでもコロサイ教会のために祈りに励みました。パウロはコロサイ人への手紙の中で、異端への対応を教えるとともにエパfrasの状況も伝えています。テキコは、ピレモンへの手紙とコロサイ人への手紙をパウロから託され、オネシモを連れてコロサイに行きました。オネシモがピレモンのもとに送り返される時、エパfrasもローマでオネシモを見送ったのです。

71 エパフロデト

1. ピリピの信徒 ピリピ2:25-30、4:18

エパフロデトはピリピ出身の信徒です。彼はピリピ教会からの贈り物をローマの獄中にいるパウロに送り届けるためにローマに行きました。ところがエパフロデトはローマで死ぬほどの病気にかかったのです。当時、ピリピから1200キロ先のローマまで行くのに、1~2か月の旅を必要としました。エパフロデトはその間に体調を崩し、ローマで倒れてしまったのでしょう。そのことがピリピ教会に伝わったので、エパフロデトはそのことを気にしていました。幸い彼は回復し、ピリピに帰ることになりました。その際、パウロはピリピ人への手紙を書き、エパフロデトに託しました。パウロはエパフロデトのことを「私の兄弟、同労者、戦友、またあなたがたの使者として私の窮乏の時に仕えてくれた人」と呼び、彼を尊敬し、喜びあふれて迎えてほしいと伝えました。ここにもパウロの愛に満ちた配慮を覚えることができます。パウロは多くの人に支えられ、また多くの人を支えたことがわかります。